

全上

繼豊公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三ヶ條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保七年正月十一日 繼豊御判

(表紙)

追 舊 記 雜 錄	吉 貴 公	繼 豊 公	享 保 七 年	自 正 月
卷五十八			至 七 月	

全御譜中

松平上總介殿

在口裏 戸田山城守 忠眞

饗レ是吉貴因ニ病痾ニ訟而致仕、然登レ營不レ能レ拜ニ謝
台顔ニ、病痾尚未レ愈、是故雖レ歷ニ驛路數日、希使ニ吉貴

吉貴公御譜中

正文在文庫

松平大隅守殿

在島津藩豊 井上河内守 正岑判

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露候之處一段之御仕合候、恐々謹言、

享保七年 正月十一日

水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠眞判

到_二于薩國溫泉之地_一、浴_二之宜_一得_二愉快_一乎、蓋時候亦可也、得_二驗快之節_一、乃當_二參府_一也、以_二去載八月_一繼豐筆_二前件之事_一、稟_二官府_一矣、今茲享保七年二月七日徵_二繼豐於營中_一、白書院而元老列居、水野和泉守忠之述_二台命_一、吉貴致仕之後始而賜_二告_一、見_二惠_一道服五襲_一、奉_二禮_一謝之退去、

1352

扣正文在右筆所

口上覺

同氏上總介儀去年願之通隱居被仰付_レ付、其以後何とぞ登、城仕、右之御禮可申上と心懸罷在_レ得共、病氣故延引仕_レ、頃日少々快罷成_レ得共、今以勤ケ間鋪儀難仕其段不申上_レ、然者去秋及得御内意_レ通、國元_レ差遣、相應之温泉及御座_レ得者折々入湯保養爲仕度_レ、病身之儀御座_レ得者、時節限參府之儀者難仕可有御座_レ條、病氣快時分者參府之儀可奉伺_レ、近年病身罷成_レ得者、夏道中別_レ難儀仕_レ、末_レ江寄_レ程道中向暑氣_レ付當分之躰_二者猶以病氣之障_一罷成_レ間、此節爲養生御暇被_二下置_一様奉願_レ、以上、

朱力_レキ

享保七年

正月廿五日

松平大隅守

1353

繼豐公御譜中

正文在彌勒院

覺

一金御屏風

壹雙

但古筆札付

一御掛物橫物大幅

壹幅

富士探信筆

一御掛物小幅

壹幅

尚信・常信兩筆

右之通(吉貴養女)於喜代様

思召有之、其御寺江御寄附被遊_レ、

以上、

享保七上寅年二月三日

三雲宗八

○_墨

印 定知判

彌勒院法印

1354

繼豐公御譜中

正文在文庫

御用之儀_レ間、明七日四時可有登、城_レ、以上、

朱力_レキ

享保七年

二月六日

水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

井上河内守

全御譜中

享保七年壬寅二月七日繼豐因_二執政之奉書_一登_レ營也、

於_二白書院_一執政各聯座、就_レ中水野和泉守忠之傳_二台命

於繼豐_一、而許_レ容吉貴因_二久病_一、爲_二温泉療養_一歸_レ國之

告_一、乃賜_二道服五領_一、奉_レ禮_二謝_一之退出、是依_二繼豐兼日之

請_一也、直還_二芝邸_一而達_二吉貴_一、吉貴乃詣_二執政各之第_一

奉_レ禮_二謝_一之、

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

一總州様御暇之御願從

太守様御口上書を以、先月廿五日、御用番戸田山城守

様(忠)小野次郎右衛門様(一)の被差上_レ外處、昨七日御用之

儀_レ外間、

太守様御登 城可被成之旨、御奉書を以一昨日被仰渡

外付、御登 城被遊_レ外處、於白御書院御老中様御列座、

水野和泉守様被仰渡_レ、上總介御暇願之通被仰付、

拜領物被仰付之旨被 仰渡、御羽織五ツ御拜領被遊_レ、

此節御願御口上書之趣類及無之御願之由、小野次郎右

衛門様杯及被仰_レ外處首尾好被 仰出、御拜領物先例不

相替旁以頂上至極恐悅御同意奉存_レ、御願書之趣先キ

々迄相懸_レ儀_レ外間、御家老中も承知_レ様可申越旨

總州様御意_レ外間、寫差越_レ外、

一御願之通首尾能御暇被 仰出_レ付、爲御禮 總州様早

速御老中様方被遊御廻候、若御年寄様方_レ老内膳御使

者_二の御禮被仰達_レ、

一太守様御事及爲御禮御老中様方_レ御見廻被遊、若御年

寄様方_レ老右膳御使者_二の御禮被 仰達_レ外、

右之趣御女姓様方_レ被申上_レ儀ハ、早晚之通宜被申

上_レ外、右付_レの御祝儀申上_レ儀、先達_レ申越_レ外通御役

人限御祝儀申上_レ儀可被申渡_レ、爰元之儀及其通御

祝儀申上_レ外、以上、

名越右膳(禮送)

種子嶋彈正(久老)

鳴津内膳(久兵)

享保七年 二月八日

朱力キ

鳴津 將監殿(久當)

吉貴公御譜中

鳴津 (久實) 內記殿
 鳴津 (久武) 李殿
 伊集院藏 (久勉) 人殿
 北郷作左衛門殿 (久慈)

享保七年壬寅二月十六日、吉貴致仕之後始而賜告、發江都芝第一、家老比志島隼人範房、用人代相良源太夫長以等扈從之、三月四日著伏見、同月七日發伏見著大坂、同月十一日發大坂、取驛路於山陽西海、四月二十一日到著薩府、直入大磯之館、即日使肝付典膳兼隆赴江都、六月朔日兼隆登營於白書院奉謁將軍家、獻上縮緬五卷、二種雙樽、曾祖父光久致仕之後始而賜告、頂二爵、乃賜二使者一獻、上稱物、然今度二殿合二見二候、以二下獻賜之品物、故度二先賜之幣物者也、奉謝還薩國之恩篤、兼隆亦獻上御太刀一腰・馬代白銀一枚・紗綾二卷、奉拜謁將軍家、牧野因幡守英成以奉書授兼隆、賜縮緬二卷於兼隆也、

吉貴公御譜中

同年二月十六日吉貴隱居之後始而發江都芝第一、家老比志島隼人範房、用人代近習役相良源太夫長賢等附從駕矣、歷東海山陽之兩道及九州之驛、而四月二十一日到著于薩府、直入大磯館、委記吉貴之譜中、

正文在文庫

去月廿一日海陸無吳歸國之旨、早速被示聞玆重思給外、餘期後音外、謹言、

朱力キ 享保七年 仲夏十一 (近衛家應)
 松平上總介殿 (花押) (No.3)

全上

芳翰披閱、愈平安、今度海陸無難歸國之由、早被示聞怡悅之事外、此地無恙外、尚期後信外、謹言、

朱力キ 享保七年 仲夏十六 (近衛家應)
 松平上總介殿 (花押) (No.4)

正文在文庫

歲暮之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城の家來可被差出外、以上、

朱力平

享保七年 二月廿日

水野和泉守

松平大隅守殿

1362 繼豊公御譜中

寫正文在文庫

知行目錄寫

高貳百石

伊集院之内

始良之内

眞幸吉田之内

名寄帳在別冊

蒲生之内

加世田之内

串木野之内

右其方事京都に被差置、高貳百石之所務被下置處、此節右以地方被下之外條全可所務者也、仍如件、

享保七年寅三月六日

北郷作左衛門

久嘉判

(伊集院) 伊

藏人 久矩判

(島津) 嶋

内記 久貫判

戸田平次殿

1363 繼豊公御譜中

去歲八月薩州鍛主水正正清俗名宮原 清右衛門主馬首一平安代俗名玉 豐小市各

所ニ自造ノ刀一枚願ニ欲テ自ニ薩府ニ呈ニ上繼豊ニ獻ニ之

將軍家ニ而奉テ伸ニ片衷 恩謝ニ、故繼豊稟ニ執政戸田山城

守忠眞ニ有ニ 台許ニ、至今年三月十二日ニ繼豊獻ニ上ニ之、

1364 正文在文庫

新身御刀ニ腰被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

朱力平

享保七年 三月十三日

忠眞判

口裏ニアリ

戸田山城守

忠眞

松平大隅守殿

1365 寫正文在江戸家老座

口上覺

一去年申上置外領内之鍛治正清・安代、於國許打調外刀一腰宛頃日到着外付、獻上之儀相同外、御差圖被成可

被下り、以上、

三月

松平大隅守

右三月十一日佐久間九右衛門、戸田山城守様は罷出相

伺外處、明朝獻上可被成候旨被 仰渡候旨、九右衛門

申出外、

進上

新身御刀 二腰

以上

松平大隅守

御名乗

一新身二腰仕立研上白鞘木鋸、

一右袋淺黃羽二重兩面同色之くけ緒、

一右箱桐白木きちやうめんくわん紐有二腰掛之繰形有、

一箱之上書新身御刀二腰、腰に寄御名、尤請臺有、

一鐵炮壹挺玉目拾匁

とうらん貳

口藥入貳

鑄形三

火繩三曲

一同壹挺玉目四匁

胴藥入貳玉入付

口藥入貳

鑄形三

火繩三曲

一同壹挺玉目貳匁五分

胴藥入貳玉入付

口藥入貳

鑄形三

火繩三曲

右之通相附外、三挺共ニ大坂に召置外付、筒之尺爰

許ニの老究の相知不申外、以上、

三月

1366

繼豊公御譜中

寫正文在江戸家老座

覺

1367

繼豊公御譜中

正文在江戸家老座

覺

一御代々御年忌御法事之節、毎度

救使被 仰付候得共、兼々思召之品有之付而、當四月

之御法事、御辭退被 仰上り、且又讀經之儀表自今以

後者千部を限り、或ハ三百部、或ハ二百部可被 仰付り

間、私之法事表準之、分限相應に可致修行事、

但作法等略すへからさる事、

一近代禮物等莫太之品多く、末々之輩に至てハ、外をか

さり實儀を失候事共外條、是又減少被 仰出り、大概

別紙に有之事、右禮物法事等之品今度先被 仰出り、

其餘家内之事におゐてハ尤面々覺悟あるへくり、或ハ

儉約に事を寄、禮儀を鹿略し却る自己之榮耀を好むの

義、猶以慎(ミカ)あるへ事(ミカ)り、以上、

朱カキ

享保七年 寅三月

繼豊公御譜中

正文在江戸家老座

被下・献上御禮物員數減少之覺大概

只今迄

此度より

一金百枚以上ハ

拾枚

一同拾枚ハ

五枚

一同三拾枚拾枚ハ

三枚

一同五拾枚拾枚ハ

貳枚

但 五枚以下ハ壹枚

一銀千枚以上ハ

百枚

一同五百枚ハ

五拾枚

一同三百枚拾枚ハ

三拾枚

一同二百枚拾枚ハ

貳拾枚

一同五拾枚ハ

拾枚

一同三拾枚拾枚ハ

五枚

一同貳拾枚拾枚ハ

三枚

但 五枚以下ハ壹枚

一時服百以上ハ

縮緬之内三拾卷

一同五拾拾ハ

縮緬之内貳拾卷

一同貳拾拾ハ

縮緬之内拾卷

一同拾より拾ハ

縮緬之内五卷

一同五ツ迄拾ハ

縮緬之内三卷

一同四ツ拾ハ

縮緬之内貳卷

一同三ツハ拾ハ

縮緬之内壹卷

一綿三百把以上ハ

五拾把

一同貳百把ハ 三拾把

一同百把ハ 貳拾把

一晒布百疋以上ハ 三拾疋

一同五拾疋三拾疋ハ 貳拾疋

一同貳拾疋ハ 拾疋

一拾疋ハ 五疋

一此外領内土産物献上是又減少之筈ニ付、并常式ニ由テ

御樽肴之外、領内土産ニあらざる物ハ献上相止外事、

一惣の數種差上り類ハ其品之内減し申筈ニ付事、

一端午・重陽・歳暮時服敷之儀、大身小身共一重宛可被

差上候事、

一浮居并遺物御道具類献上相止外事、

一香奠被下候儀、右白銀減少之員數たるへき事、

一御褒美又ハ公役ニ付臨時之被下物者只今迄之通たるへ

き事、

右之通ニ相極外間、私之禮物等及右に準し可申付、

且又献上物之儀及此度改り候事ニ付間、此砌者其時

々月番之老中に可被相伺事、

以上

朱力年
享保七年 寅三月

1669

右貳通之御書付、三月十五日御登城之御大名様方御居
残り被成り様ニ有之御居残り被成り處、松平甲斐守(柳沢吉里)
様・松平陸奥守様(伊達吉村)に御渡被成り御書付致順達候様戸田
山城守様被仰渡、横田備中守様(由利)より右御書付御渡被成
り由ニ由、陸奥守様御家來を寫り而差越之付、

継豊公御譜中

正文在文庫

さつまの少將より、今度昇しんの御禮として黄金百兩・
御絹三十疋進上おはしまし、ひろう申て外へハおもしろ
く覺しめし付よし、よくころえ付て申せとて付、御心
え付てつたへられ外へく付、かしく、

封付

御いまの

御局さま

まいらせ付

在口裏
仰

享保七 三十八

1370

継豊公御譜中

全御譜中

寫正文在江戸家老座

去歲享保六年夏繼豐襲封之後賀_レ之、今茲於_二薩府_一命_二幣使_一、以_二白銀二十兩三月九日進_一納于妙蓮隆盛院殿之靈牌_一矣去歲湖進納故及于茲_レ禮、仲右衛門仲寄代公勤之、各以_二白銀二十兩_一獻_二納于三月二十六日、同月二十八日隅州曾於郡鄉霧島神社及國分鄉正八幡宮之神靈_一、以_二白銀二十兩_一四月朔日進_二納于薩州吉田鄉津友寺殿之靈牌_一矣伊集院十藏、久津同上、以_二白銀二十兩_一三月二十六日獻_二納于薩州穎娃鄉枚聞社之神靈_一、以_二白銀二十兩_一同月二十八日進_二納于加世田鄉日新寺殿之靈牌_一矣藤田四郎正武、同上、各以_二白銀二十兩_一三月二十七日獻_二納于薩州出水鄉賀志久利神社、四月朔日水引鄉新田宮之神靈_一、各以_二白銀二十兩_一進_二納于四月二日限之城鄉稱名寺殿、同月四日市來鄉龍雲寺殿、同五日伊集院鄉妙圓寺殿之靈牌_一矣川上藤久、盤同上、以_二白銀二十兩_一四月十一日獻_二納于隅州末吉鄉住吉大明神之神靈_一、以_二白銀二十兩_一同月十三日進_二納于日州志布志鄉即心院之靈牌_一矣島津仁郎、久衛同上、以_二白銀二十兩_一四月十一日獻_二納于日州加久藤鄉二之宮之神靈_一矣喜入主、牌久起

繼豐公御譜中

寫正文在江戸家老座

口上覺

此節私國元_レ之御暇被_レ下置_レ者、御禮申上_レ節、御當地_レに留守差置_レ家老_レ之者、御目見被_レ仰付度奉願_レ、御暇之御禮申上_レ節、右家來_レ御目見被_レ仰付先例御座_レ條此段御沙汰奉願_レ、以上、

四月三日

御名

一右御口上書御文章可然様御沙汰奉頼と以前者相調_レ得共、可然様との文句、ケ様之御願書等_二者_一可相除旨

總州様被_レ仰出置_レ故如斯相調_レ、

一右之御口上書者、御用番水野和泉守様_レに森川理右衛門(武直)

ニ被_レ差出_レ、尤御家老名書者、如例小札_二嶋津李と(久武)

調、右御書付_二相添御取次中村紋左衛門_一に相渡_レ處、

則和泉守様_レに差上_レ得_レ者御受取被_レ成_レ由御返答有_レ之_レ

事、

一松平大隅守留守_二差置_レ家來_一、御目見被_レ仰付_レ節、

御太刀

一腰

御馬代

銀壹枚

御時服 三

内壹御熨斗目

右以前より献上任來り、此度之御書付之趣ニ者

御太刀 一腰

御馬代 銀壹枚

縮緬 之内二卷

紗綾

御張紙墨書ニ而

此通可差上り、但白縮緬・白紗綾之内献上可仕り、

右之通献上可仕り哉奉伺り、以上、

松平大隅守内

四月四日 森川理右衛門

1373 繼豊公御譜中

同年四月十三日

吉宗公使ニ水野和泉守忠ニ來リ于櫻田第上、繼豊襲封之後

始賜ニ還リ國之告ニ、拜ニ戴白銀百枚・縮緬三十卷一也（今年三月

府一田ニ行條一見レ少一 人下之 侯伯男子先矩之獻賜一故及二十茲一、奉レ禮ニ謝ニ之、同十五日繼豊登レ

營也、於ニ黒書院ニ拜ニ謁

吉宗公ニ、奉レ申ニ謝賜レ告、時加ニ懇篤ニ之

尊言一、因ニ先規ニ賜龍蹄一匹一、奉レ禮ニ謝ニ之、且芝第留

守居家老島津奎久武附ニ從繼豊登レ營、從ニ先躡ニ獻ニ上

御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷一、奉レ拜ニ謁

台顔一、内藤丹波守政森奏ニ達ニ之乃退去、

1374 寫正文在江戸家老座

一松平上總介薩州（馬費）に致到着り節、爲御禮使者差上り刻、

綸子 二十卷

二種一荷

御張紙墨書ニ而

白縮緬之内五卷

白紗綾之内一荷

右之通可被差上候、

右者故大隅守隱居以後薩州に致到着り御禮使差上候付

り、先例右通献上仕り、今度御書付之趣付り者如何可

仕哉奉伺り、以上、

四月

松平大隅守内

森川理右衛門

1375

全御譜中

扣正文在右筆所

後大隅守改

大猷院様御代

松平薩摩守
光久

右薩摩守家督以後初の歸國之節、國元は爲上使以
佐々權兵衛御鷹鶴被下置下、

松平薩摩守
綱貴

常憲院様御代

右薩摩守貞享年中家督以後初の歸國之節者、拜領物
之御沙汰無御座下、其節先例及御座下付、御沙汰可
有御座哉と差扣御内意及不奉願下、

常憲院様御代

松平上總介
吉貴

右上總介寶永年中家督以後初の歸國之節者、右之旨
趣先達の御内意相願下處、國元は以宿次塩引鮭一箱
被下置下、

(朱) 是著御看御拜領之段、御伺之御書付二張紙、三月

兩通共此通可然奉存下、來月御暇被仰出以後御用番に
可被出下間、其節此方は及此通御書付百助持參下様被

成可然奉存下、

一御假養子御願書之儀、御發駕二三日前御用番に御持參
被遊下事、

如何程重牛御方様ニの及、御自身御持參之儀ニ御座下、
來月二日御發駕被遊下得者、當月晦日、來月朔日對客
無御座日に御座下間、廿九日比可然奉存下、

一京都に御立寄被遊下御書付者、御暇被仰出下以後一
兩日之内御出可被遊下事、

一御肴之儀者、右一所ニ成共又者少之間御座下成共御勝
手次第奉存下、夫共一度ニ御出し被遊下方可然御座下、

(米) 此御肴之儀者、御家督初而御歸國之節、以宿次御拜領被遊先例察間、御内沙汰
被成度申被仰上御事候

(朱) 右者名越右膳殿より内、御間合被成下御方申來下、此儀隨
成事下間、後年爲見合可記置由ニ而彼方より之書付直ニ御渡
被成下故爲置下也

(朱) 「扣正文在右筆所」

口上覺

私儀家督初の被下御暇國元は罷在下、依之先例之通於京
都松平伊賀守殿に立寄奉伺御機嫌、且又近衛殿に及參申
(所可代、忠則)

1376

度存外、此段相伺外、以上、

(采)

「享保七年」四月

(鳥津繪巻) 御名

右四月十六日八後御用番水野和泉守様江森川理右衛門ニ而被差出外處、諸司代江御越之儀者御勝手次第可被成外、近衛殿江御出之儀者、於京都伊賀守様御差圖次第可被成由、御取次赤星彌三左衛門を以御口達ニ而御即答、

1377

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

私儀家督初る御暇被下置外、歸國仕外ハ、先例之通以宿次御看拜領仕外様御沙汰被成被下度存外、此儀家之規模御座外間別亦奉願外、依之先達外御内意申上外、則先例書懸御目外、以上、

(采)

「享保七年」四月

御名

右四月十六日八以後御用番水野和泉守様江、御用人亦星彌三左衛門取次ニ而森川理右衛門を以被差出候處、兩通之御書付御詰取置被成外由御即答、
右之通今一通相調、戸田山城守様江佐々木百助を以御出シ被成候、

1378

(采) 「正文在文庫」

私儀今度御暇被下置國元江罷越外、未男子無御座外付、在國中若不慮之儀及御座外ハ、國元ニ差置外私弟島津^(實)玄蕃當年拾五歳罷成外、此者養子被仰付跡職相續仕外様奉願候、以上、

享保七寅四月廿二日

松平大隅守御判

井上河内守殿

戸田山城守殿

水野和泉守殿

1379

全御譜中

去歲吉貴養女^{於養}代欲レ配ニ偶于備後州福山城主阿部伊勢守正福ニ而請レ官、因有ニ

台許一矣、今茲四月二十三日整ニ婚儀於正福之第一、

1380

継豊公御譜中

正文在文庫

如嘉例女房之奉書贈之候、被伸謝辭書面令承悦外、餘期後信外也、

(采)

「享保七年」

孟夏廿七

(花押 No.3)

松平大隅守殿

1381

正文在文庫

今度依任信女房之奉書贈之外、被仲謝辭楮面丁寧之事外、愈平安珍重外、餘期後信外也、

〔享保七年〕

初夏廿七

〔花押 No.4〕

薩摩少將殿

1382

正文在文庫

先頃少將拜任、因茲獻上物之儀、右府執奏女房之奉書就〔近衛家久〕被指下外丁寧之書面令承知外、猶期後音不悉、

〔享保七年〕

四月廿九日

基熙

薩摩少將殿

1383

繼豐公御譜中

同年五月二日繼豐發芝邸、家老島津内膳久兵・名越右膳恒渡、大目附格相良大藏長賢、用人伊集院權右衛門久盛・宮之原甚太夫重行等附從駕矣、歷東海道美濃路、同月十八日止宿伏見旅亭、翌十九日繼豐入錦小路旅

亭、詣諸司代松平伊賀守忠榮之第一、奉窺〔所〕

將軍家之安否、〔先規一及二十三茲事一〕且候近衛家熙公之華

第二而還伏見旅亭、同二十二日下河流著大坂旅亭、

同二十六日出大坂、同二十九日自播州坂越港駕船

六月十三日著日州細島港、自是歷佐土原及高岡郷同

二十三日入薩府壘城矣、是故使番頭役禰殿仙十郎清純

豫奉謝恩使之命、茲日赴東都、取路於九州東海、

七月二十六日著東都芝邸、同二十八日到執政用戶田

山城守忠真之第一、呈上連署而勤使節、且到執政若

年寄各之第一勤使節、八月十五日清純登營捧繼豐

之獻物芭蕉布二十端・三種二荷獻上之、於白書院

奉拜調

吉宗公、奉謝繼豐襲封之後始歸國之恩篤、丹羽式部

少輔倚氏奏達之、清純亦親自獻上御太刀一腰・御馬代

白銀一枚・紗綾二卷、再奉拜調

台顔、土井伊豫守利意奏達之、乃退去、同十八日清純

登營執政安藤對馬守重行出席于檜之間、手自附與

所授繼豐之奉書上乃拜賜縮緬二卷、高木主水正陳

執達之、奉申謝之退去矣、九月二日清純發芝邸

取路於東海經西海、十月十六日還薩府復命、

繼豊公御譜中

扣正文在江戸家老座

松平大隅守家督始而御暇被下致歸國付、先例之通御諸司に罷越 近衛殿に表参度由、水野和泉守様に被相伺外處、伊賀守様に老勝手次第可相越外、近衛殿に参外儀老、於京都得御差圖外様こと被仰渡外、彼御方由緒及御座候に付、此節見舞申度被存外、此段相伺被申候、以上、

(朱) 「享保七年」 五月

松平大隅守使者

高城十左衛門

右之書付五月二日之便高城十左衛門に差越、伊賀守様に相伺、御差圖之趣御中途迄便を以可申上由、右膳より申越外事、

全上

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來欣覺外、委曲戸田山城守可述外也、

朱力半 享保七年 五月三日



薩摩少將殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力半 享保七年 五月六日

戸田山城守 忠眞判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

一享保六年丑六月九日

繼豊様被遊 御家督外付、同七年寅五月朔日大雄山御宮并南泉院御位牌殿に御祝詞料又老御香儀料御獻納被成外、右之次第左に相記、

但神社并御先祖様御位牌前に御祝詞料又ハ御香儀料御獻納被成り得共、御宮并御位牌殿に御獻納之儀、何分にも江戸より不申來外に付、御家老中より被相伺趣有之外處、御宮御位牌殿共左之通御獻納可被成由、御意之旨申來外付今日御獻納被成外、

一御太刀一腰

一御馬代銀三枚

御宮

一白銀三枚宛

御位牌殿

右に

御代參(久延)

嶋津市大夫殿

上字領

平原太郎左衛門

下字領

足輕壹人

一同五月四日 清揚院様御位牌殿に

右同斷御祝詞料として白銀壹枚

御代參を以御獻納被成り次第左に相記、

但大雄山 御宮・南泉院 御位牌殿に老御祝詞料又

ハ御香儀料御獻納被成り得共、 清揚院様御位牌

殿に御獻納無之り、年頭老白銀壹枚御獻納被成り

間、御家督付の老銀壹枚御獻納被成るも可有之

哉之旨、御使番申出り付、御家老中被申談、年頭

こさへ御獻納被成儀外條、右に準御家督に付る老

御使番申出り通御獻納可被成儀と被申談、其通御

獻納有之り、右之段ハ被相伺答り得共、其筋に右

老段に延引に罷成り故、先御獻納之儀被申渡、左

外に以後右之首尾被達 貴聞外也、

一白銀一枚

不斷光院

清揚院様

右に

御代參(基明)

畠山式部殿

上字領

柏原源之丞

下字領

足輕壹人

右 御代參之人何れ老支度熨斗目長上

右之通御祝詞料御香儀料御獻納被成相濟外、已上、

享保七年寅五月十五日

練豊公御譜中

1388

正文在不斷光院

御奉納

白銀

以上

壹枚

全上

正文在文庫

1389

芳臧披閱、今度右府事左府轉任、賀義被示聞懇篤之至不
堪感謝外、不悉、

享保七年 五月十八日

基熙

薩摩少將殿

全上

芳簡落筆、今度轉任之事相聞、被伸嘉詞懇篤之至令満足
外、餘期後音外也、

享保七年 仲夏十八

(花押 No.4)

薩摩少將殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

なにもよろしき様ニ申せとの御事御さり、なをく
めてかしく、

一位様より申せとの御事御座り、まつく

一位様御機嫌よくならせられりまゝめてたく思しめし被
成へく外、御手まへさま御かはりもおはしましりハすり

哉、きかせられたく思しめしり、扱者此御目録の通この
たひ

近衛右府様左大臣御轉任の御めてたさ、幾萬々年も御機

全上

嫌よくならせられ、めてたき御事のミといわる入らせら
れ、かすく御満足ニ思しめしり御事ニ御さり、ひと
いは早く御めてたさ被仰上御しうきも御しん上遊ハし御
満足ニ思召り、かしく、

享保七年

右

まつ平

いは倉

大すみの守さま

梅園

人々御中

さくらゐ

なをく御文のやう御満足ニ思しめし、よく申せと
の御事ニ御さり、かしく、

御ふみ被下ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めてたく思しめし被成
りよし、被仰上りことく近衛右府様このたひ左大臣御轉
任遊ハしり、

一位様御満足ニ思しめしり、それニ付此御目録の通御あ
け被成、御満足ニ思しめしり、萬々年も御機嫌よくな
せられ、めてたき御事のミにて御しう被仰上りやうこと

祝入らせられり、かしく、

朱カキ
享保七年

まつ平 御返事
大すみの守さま
人々御中
岩 倉
梅 園
さくらら

1393 吉貴公御譜中

正文在文庫

去月廿一日驛路無恙歸城之旨早速被示聞令悦悦、弥平

安珍重老拙無事、不悉、

朱カキ
享保七年

五月十八日

基熙

松平上總介殿

1394 継豊公御譜中

正文在文庫

今度

有章院様七回御忌御法事御執行付、以使者御香奠被獻

之外、於増上寺奉納之事、右之趣及言上、恐々謹言、

朱カキ
享保七年

五月廿二日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

1395 吉貴公御譜中

正文在文庫

今般御願之通御暇、途中無吳儀其地御着之由珍重存、仍之預瑤章過當之至、恐々謹言、

朱カキ
享保七年

五月廿六日

水戸宰相

宗堯判

松平上總介殿

御報

1396 吉貴公御譜中

正文在文庫

貴札 御門主入御披見、愈御勇健御國許に御到着被成

り由珍重思召、爲御禮就御使者被差上、御書面之趣

被爲入御念儀、御祝着之御事御座、宜申進由仰御座

り、恐惶謹言、

朱カキ
享保七年

五月廿七日

吉川式部卿

盛也判

松平上總介様

1397 継豊公御譜中

寫正文在江戸家老座

一養子いたし者、若養子を返し儀有之時、最前養子

いたし外以後、實子出生外共、其實子家督ニ被_レ仰付間鋪外間、又養子を可奉願外、然共右返し外養子、何とそ行跡悪敷外品有之外敷、病氣ニ決_ル御奉公難成儀ニ相極り養子返し外ハ、頭支配とくと承届、實方江表相尋無相違外ハ、其品申上頭支配より實子を家督ニ可奉願外、輕キ病氣、又老養父之心ニ叶不申外一通之儀ニ_ル、養子返し外跡者、實子ニ家督者被仰付間鋪外、

但右實子御奉公被仰付間敷との儀ニ_ル無之外、分知奉願外敷、外江養子杯ニ遣し外儀ハ可爲勝手次第外、以上、

寅五月

吉貴公御譜中
在正文文庫

御札令披閱外、今度首尾好御暇、路次無恙其許到着之由珍重外、依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

朱カキ
享保七年
六月朔日

薩摩中將殿

御報

尾張中納言
繼友判

全上
御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將亦今度被下御暇、其上御羽織拜領之難有由得其意外、國許到着付_ル爲御禮以肝付典膳縮緬五卷・御樽肴被獻之外、遂披露外處御前江被召出之、入念外段御喜色之御事外、恐々謹言、

朱カキ
享保七年
六月三日

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

戸田山城守
忠眞判

松平上總介殿

全上

返々御ねん入まいらせ外文之返事、何もよろしく申上まいらせ外、めてかしく、

四月廿一日付にて文下され外、

公方様ます々御きけんよく御座なされ、御めて度覺しめし外よし、しかれば御てまへ様御事、此たひ御暇下されそのうへ御羽織拜領被成外て有かたくおほしめし外よし、御同氏大隅守さま今日御國元へ御着被成外ニ付、御

禮仰上られり、御ふみのとをりよろしく申あけりへくり、
めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

あ

まつ平
上總介様
御返事
人々御中

三室
豊岡
高せ
外山
田澤

1401

此よし何もよく心得りて申せと御返しり、かしく、
文のやうまつく

公方様

一位様御機嫌成らせられり御事めてたく思しめし被成り
よし、扱は御手前さま此度御暇仰出され、其上御羽織拜
領被成、敷く有かたく思召り由、御同氏大隅守殿今日
御着被成り付、御使を以御禮仰上られりま、文のや
う披露申まいらせり得ハ、御念入り御事御めてたく御満
足に思しめしり、かしく、

朱カキ
享保七年

1402

まつ平
御返事
上總介さま
人々申給へ

岩くら
梅園
さくらい

継豊公御譜中
正文在文庫

御札令披見り、井上河内守卒去之段被承之、被絶言語由
得其意り、

公方様御機嫌被相伺之り、御安全之御儀り間可御心易り、
紙面之趣各申談及 上聞り、恐々謹言、

朱カキ
享保七年
六月六日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1403

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳翰令披見り、今度首尾好御暇、海陸無吳事同姓隅州在
所に到着之由珍重り、仍之入御念り之段欣然之至存り、
恐々謹言、

朱カキ
享保七年

六月九日

紀伊中納言
宗直判

松平上總介殿
御返報

1404
全上

御札令披見外、就酷暑之節
公方様御機嫌被相伺之外、益御安全御事外間可御心易外、
隨の經節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合
外、恐々謹言、

朱カキ
享保七年 六月十一日

松平上總介殿

水野和泉守
忠之判

吉貴公御譜中
正文在文庫

なをくいよく御きけんよくならせられりまゝ、
めてたく思しめし被成りへく外、めてかしく、
土用御機けん窺とおはしまし文下されり、ひろういたし
まいらせり、まつくことの外の暑氣に御さりへとも、
一位様御機けんよくならせられりまゝ、めてたく思しめ
し被成りへく外、御機嫌御うかゝひ被成、御目錄の通御
あけ被成、御満足と思しめし幾萬々年もと御めてたさ、

よろしく申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、
朱カキ
享保七年

松平
かつさの介さま
梅園

人、御中
御返事 さくららる

1406
継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全之御事外間可
御心易外、隨る琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩
辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、各申談遂披露外之處
一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ
享保七年 六月十三日

松平大隅守殿

水野和泉守
忠之判

1407
全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度安藤對

馬守連判之列被仰付り段被 承之、弥重由得其意り、紙
面之趣各申談及 高聞候、恐々謹言、

朱カキ 享保七年 六月廿二日 水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1408 吉貴公御譜中

去載辛丑六月九日有ニ 台許ニ嗣嫡繼豐續ニ家統於江都一、
仍今茲四月十三日始賜ニ歸國之告一、五月二日發ニ駕於江
都芝第一、歷ニ東海美濃之驛路一、到ニ攝州大坂一、自ニ播州
坂越ニ駕ニ船著ニ日州細島港一、六月二十三日入ニ薩城一、詳
見ニ繼豐之譜中一、

全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度同氏
大隅守儀初る被下御暇、其上品々拜領之難有被存之由得
其意り、紙面之趣各申談及 高聞り、恐々謹言、

朱カキ 享保七年 六月廿六日 水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

1410 吉貴公御譜中

正文右文庫

右之御禮仰上られり、御ふみのやう何も御念入り御
事とめてたく御満足さ、誠に幾萬々年も御機けん
よく成らせられ、大隅守殿も御無事の御事にて、
幾たひも々御國元への御いとま仰出され、御拜領
ものも相替らず被成り様こと祝思しめしり、此よし
何もよく心得りて申せとの御事に御座り、めてかし
く、

文被下披露致まいらせり、まつく

公方様御機嫌よく成らせられ、御目出度さ

一位様御機嫌よく成らせられり由り、めてたく思しめし
被成りへくり、扱は此度 上使にて御同氏大隅守殿御家
督初る御國元への御暇仰出され、白銀縮めん御拜領其う
へ

御前江御召りて御懇の御詮、ことに御馬拜領なされ數
く有かたき仕合に思召被成りよし、めてかしく、

朱カキ 享保七年

まつ平 岩 倉
御返事

上總介さま 梅 園
人々申給へ

全上

返く、幾久しく相替す御のほり下り被成りやうにと
御めてたく存まいらせり、めてかしく、

文下されり、

公方様益御機嫌よくならせられ、御めてたく覺しめしり
よし、さては此度 上使をもて御同氏大隅守殿御家督、
はしめて御國許へ御暇仰出され、白銀・縮緬御頂戴、そ
のうへ

御前へ 召させられ、御懇の御誕殊に御馬御拜領被成、
難有思しめしり由、御禮仰上られ文のやうひろう致まい
らせり、めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

松平

上総介様

御返事人々御中

三室

お

豊岡

高瀬

外山

田澤

さくらい

正文在文庫

まいらせりへハ御念入まいらせられり、御満足にお
ほしめしり、此よし何もよく申せとてり、かしく、
御文くたされり、まつく

一位様御機嫌よく成らせられ、御めてたさ扱は京都にて
左府様御轉任遊ハしり御祝儀として

一位様より御目録の通御てまへさまへ参らせられ、かた
しけなく思しめしなされりよし、御同性上総介殿同御奥
かたへ御祝儀まいらせられりへハ、御てまへさまへおる
ていかほとかたしけなく思しめし被成りよし、御禮仰上
られ御文のやうひろういたし、めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

松平

大隅守さま

御返事
人々御中

いは倉

梅その

さくらい

お

継忠公御譜中

正文在文庫

數く御満足に思しめしり、誠に幾萬く年も相替
らず、幾としも御國もとへの御暇 仰出され、御拜領

継忠公御譜中

1414

物も被成り様こと祝思しめしり、一入御悦さ何もよ
く心得りて申せとてり、返くかしく、

六月廿三日の御日付にて

公方様御機嫌よくならせられ御文被下いたしまいらせ
り、まつく

公方様御機嫌よくならせられ御目出度さ

一位様御機嫌よく成らせられり御事めてたく思しめし被
成りよし、扱は御手前さま御家督以後初め

上使を以て御暇仰出され、白銀・縮緬御拜領被成、其う
へ御懇の上意にて御馬御拜領被成忝思しめし被成りよ
しにて御文のやう何も御念入まいらせられ御事こ、めて
かしく、

朱カキ
享保七年

お

まつ平

御返事

岩くら

大隅守さま

梅園

人々

申し給へ

さくらい

全上

申上りへくり、なをく御表方も御禮仰上られり得

共、なを仰上られりよし、御ふみのやう御つゐてこ

1415

よろしく申上りへくり、めてたくかしく、
御ふみ下されり、まつく

公方様御機嫌よく御座被成り御事、御めて度覺しめしり
由、しかれば御てまへさま御家督はしめて

上使にて御暇仰出され、白銀・ちりめん御はいりやうな
されり、そのうへ 御前ねめさせられ、御懇の御詫こと
に御馬御はいりやう被成、敷難有覺しめしり由、御て
まへさまにも御國元へ御つきなされり付、御使にて御
禮仰上られり由、御ふみのやう何もよろしく御つゐてこ、
めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

お

まつ平

大すみの守様

御返事

三室

豊岡

高瀬

外山

た澤

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山

御靈前 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談

及 高聞外、恐々謹言、

朱カキ

享保七年 七月朔日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1416

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、先頃 有章院様七回御忌之

御法事於増上寺御執行相濟、四月晦日 御靈屋 御參詣

之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞候、

恐々謹言、

朱カキ

享保七年 七月二日

戸田山城守

忠眞判

松平上總介殿

1417

繼豊公御譜中

命天下諸侯伯、令米應采地田而定數運之上甲之於

公廩上、然許入觀于東都、在邸半歲上、委見于後、

(の2)(1418の1)

寫正文在文庫

寫

(朱)「御返寄朱書を以申渡候」

一御在府之御大名様方去ル朔日御登

(朱)「此紙面之通致承知」

城被成外處、來ル三日御用之儀有之之間、萬石以上之

本守棟 松州棟達 貴聞 公議より相渡候御書付備 御覽候」

御方様不殘四時御登

城可被成旨、横田備中守様より被仰達外、若譯有之御

登 城難被成御方并御在國御在邑之御方者、御名代可

被差出外、尤御自分之御用被聞召、他之御名代御兼外儀

者難成事外、誰様御名代を可差出之旨、水野和泉守様

に御届有之外様こと備中守様より松平安藝守様御承知

外付外、外之御方よりも御通達及可有御座外得共、先

早々御知セ申越外様こと安藝守様被仰付外、勿論右之

段水野和泉守様又老備中守様之間合申外様こと是又安

藝守様御留守居生田權左衛門・澁谷藤兵衛・近藤三郎

右衛門より此御方御留守居迄申越外付、備中守様御家

來高主紋大夫迄、岩山半兵衛・佐久間九右衛門より御

名代之儀承合外處、弥來ル三日御用の御名代之儀萬

石以上の御兩人之御名代老不罷成事外、御部屋栖の

の及萬石以上之御名代の御座外得老不苦外、此御方

様御名代老誰様御勤之譯和泉守様は御届申上外様こと

有之ハ得共不及御届ハ間、備中守様御方ハ計之御届ニ
御名代誰様御勤之段書付、明二日可差出旨紋太夫
リ申越ハ旨九右衛門申出ハ、

一右付ハ老島津忠進但馬守殿此段承知候

太守様御名代御勤被成度旨御留守居を以御願申ハ處、
淡路守殿惟久も御聞達御受合被成候付、御名代之儀島津

但馬守殿御勤之筈ハ旨別紙之通書付相認、備中守様ハ
岩山半兵衛持參差出ハ、

一去ル三日四時前但馬守殿御登城、萬石以上之御方様
朱二此段承知候一

何れ表一同於大廊下御老中様御列座、御用番戸田山城
守様より仰出之旨有之ハ間、何れ表可被奉承知旨被仰

渡、右御書付御右筆讀之ハ御張有之ハ、左ハ松平
本マ

加賀守様・松平陸奥守様此御方御名代ハ、別紙 仰出之
備紀

御書付三通横田備中守様より御渡御通達可被成旨山城
守様ハ被仰ハ由、備中守様ハ但馬守殿御承知被成ハ、

左ハ御城より御退出、直芝御屋敷ハ御出、首尾被
仰聞候、佐久間九右衛門事ハ但馬守殿御勤付ハ前以
御城ハ差出置爲申事ハ、

一但馬守殿右通 御名代御勤付ハ者、御挨拶御書ニ表
朱二但馬守殿ハ御挨拶之儀付而者御方より申越候一

被進事ハ哉、其段先例之通被成ニ可有之ハ、

一右付ハ老 仰渡之御書付陸奥守様御留守居ニ此御方御
朱二此段承知候一

留守居申談ハ上、向寄分ニ以御使者御順達可被成旨
被仰渡ハ趣申達、御書付寫候ハ但馬守殿御名之片此御

方御名代之譯相記、別紙之御人數ハ此御方より御馬
廻新御番御使者を以御通達有之ハ、

一右仰渡御承知被成ハ段ハ御老中様ハ
朱二右仰渡御承知被成候、御辭之御飛札今日之便被差越候、委細ハ

御飛札を以御請被仰上筈之旨但馬守殿ハ被仰聞ハ、左
御聞方より申越候一

ハ御並様方承合ハ、其趣御國元ハ老可申越旨被仰
候、右付ハ者此以前右躰之御勤ハ無之、此節初ハ御

事ハ故、飯高市郎兵衛様ハ御右筆を以申上、御案紙申
請差越ハ間、御書被差越ハ、日數相考差出申ニ可
有御座ハ、

一右付ハ老仰渡之通壹萬石ニ米百石ツ、春秋兩度大坂并
朱二此ケ条之趣早ハ吟味仕相究次第其段可申越旨

御當地御藏ニ面々勝手次第上ケ米可被相納ハ、米を以
被仰付候付而御角相しハ候間、相濟次第可申越候一

難納面々ハ者、金子ニ其節之張紙直段を以可被相納旨
被仰渡事候、左ハ得老米ニ御上納被成ハ者、倭作

并米表不宜ハ杯と 公義役人衆萬一申事ニ罷成、其上
大分之御失堅可相懸ハ得者、何様之支有之ハ故、米ニ

ハ御上納ハ難成譯吟味之趣被申越ハ、右之御斷
申上、御張紙直段を以金子ニ御上納被成ハ方可宜哉

と於爰元者申談事、於其元尚被申談何れ、御上

納之譯早、被申越度、尤御張紙之儀、世上米直成

より八下直、有之事之由、御心得、可罷成儀共、

追々承合可申越、京大坂は右通被仰渡、間、金子

の御上納之筋、ハ、御國元より可有御差圖、條、

内、其考致置、様申遣候間、いつれ、御上納之譯京、

大坂、早、被申越、可有之、京・大坂御留守居

に申越、書付寫爲御納得差越、

一先年禁裏築地銀砂上高役金并猿樂配當米迄、琉球高、

相込御上納爲有之事、得者、此節之儀、弥琉球高迄、

相込、可有御座、

一在江戸之儀、半年、御免被成、然者、

(朱) 御參勤御時分之儀、御書付、相見得候共、其上被相伺事、可有之候哉、

太守様御參府來、三月中と御名書之御書付、有之候、右

於爰元者御治定、雜被成條、御並様方承合、其上承合候御方、江藤川利右

通之仰渡、候得共、御參勤御時節之儀、以前不相替

御同被成、儀、可有御座と存申事候、

三月御參府之儀、御用意可申付、仰出、其通御用意申渡候、

一來卯九月御暇、可有御座、巳年三月、

御參勤之積、御座候間、御緩くと重る者、御在國被遊、

(朱) 此段其許考之通御物入相減候方、可有之と爰元、而も、

御座、御上米有之候、御在府半年、御在國一年

半之積り罷成、得者、太赫之考致させ、却る御物入相減、方、相見得申候、猶其元、専御考可有御

座事、

右之段申越、間可被達、貴間候、勿論右之儀、付

考、御心得罷成儀と無油斷承合、追々可申越、

御參勤御時節之儀、御被相記御名書寫、通

御渡御書付寫、通、御參勤御時御暇之儀、被相記、御

名書寫、壹通并御順達御人數書、壹通差越、此節之御

用筋格別之儀、ハ、故、飛脚海陸、貳手、申付差候、

依之御用之儀、同案を以申達、此段、爲御心得候、

以上、

(朱) 「享保七年」七月四日、

(朱) 「七月廿三日」

(朱) 鳴津、内記殿、

(朱) 鳴津、内記殿、

(朱) 鳴津、内記殿、

(朱) 北郷作左衛門殿、

(朱) 名越、右膳殿、

(朱) 比志嶋、隼人殿、

(朱) 以上、

(朱) 寫正文在文庫、

寫

御旗本ニ被召置ハ御家人 御代々段々相増ハ、御藏入高
 及先規よりハ多候得共、御切米御扶持方其外表立ハ御用
 筋渡方ニ引合せ候ハ、早晩年々不足之事ニハ、然共只
 今迄者所々之御城米を廻され、或御城金を以急を辨られ、
 彼是漸御取つゝきの事ニ候得共、今年ニ至ル御切米等及
 難相渡、御仕置筋之御用及御手支之事ニハ、それに付
 御代々御沙汰も無之事ニ候得共、萬石以上之面々よりハ
 木差上ハ様ニ可被仰付ト 思召候、左ハハねハ御家人之
 内數百人及御扶持可被 召放より外者無之ハ故、御恥辱
 を及不被願被 仰出ハ、高壹萬石ニ付八木百石之積可被
 差上ハ、且又此間和泉守ニ被仰付隨分遂愈儀、納リ方之
 品或新田等取立ハ儀申付ハ様との御事ニ候得共、近年之
 内ニ者難相調可有之ハ條、其内年々上ケ米被仰付コル可
 有之候、依之在江戸半年充被成御免ハ間、緩々致休息ハ
 様ニト被 仰出ハ、

何表在府之儀ニ付ル者、江戸人多ク及ハ故兼 思召
 及有之たる事ハ間、此以後在府之間及少キ儀候條可成
 程者人數可被相減候、

(朱)
 「享保七年」

1420

(朱)
 一全上
 寫正文在文庫」

寫

今度御在府萬石以上之御方様去ル三日四時御登 城可
 被成ハ、在國在邑之御方様者御名代可被差出旨被仰渡
 ハ付、此御方 御名代ハ嶋津但馬守殿御勤ハ處、於大
 廊下御老中様御列座ニ被仰渡趣有之ハ、

一右仰渡之趣付ル者、御上米之儀金子ニ被相納ハ方可
 然儀及可有之哉、米ニ納上納有之事ハハ、御國元
 より之御手當可有之事候、又者金子ニ御上納有之事
 ハハ、其許御借入可有之儀候條内々其考可仕置ハ、
 御上納金米之内いつれを以御上納と相究ハ趣者、御國
 元より被申越ハ様ニト申越ハ間左様可相心得ハ、此節
 之儀一統被仰渡ハ得者、何方及金子等之才覺有之善之
 事ハ故早々爲心得申越事候、

一此節 公義仰渡御書付寫貳通爲見合差越之ハ、且又此
 御方様御組合之御在府御在國之譯別紙御名書一通遣之
 ハ、右之外御人數大分之事ハ故、其分者致略書拔候ハ
 差越ハ、此段及爲心得ハ、以上、

〔朱〕
「享保七年」
七月四日

伊集院藏人

鳴津 全

村田與右衛門殿
〔勝〕

高城十左衛門殿
〔殿次〕

1421
〔全上〕
〔朱〕

「寫正文在文庫」

次第不同

松平筑前守様

松平安藝守様

松平民部太輔様

松平丹後守様

松平中務太輔様

有馬玄蕃頭様

松平出羽守様

松平大和守様

松平甲斐守様

上杉喜平次様

丹羽左京大夫様

伊達遠江守様

1422

〔全上〕
〔朱〕

「寫正文在文庫」

寫

七月三日

松平左兵衛督様

松平左京大夫様

織田美濃守様

松平越前守様

牧野越中守

小笠原佐渡守

井上攝津守

青山因幡守

内藤伊賀守

松平市正

板倉甲斐守

松平越中守

板倉伊豫守

米倉丹後守

酒井越前守

辰三月參勤
同九月御暇

巳辰九月參勤
辰三月御暇

同卯三月參勤
卯九月御暇

酒井 右京
酒井 修理大夫

松平 伊豆守

朽木 大膳

土井 甲斐守

松平 能登守

牧野 周防守

板倉 讚岐守

松平 縫殿助

内藤 下總守

森川 出羽守

松平 伯耆守

土井 大炊頭

石川 主殿頭

板倉 近江守

青山 大膳亮

土岐 丹後守

卯九月參勤
辰三月御暇

阿部 伊勢守

永井 飛騨守

三浦 壹岐守

三宅 備前守

京極 主膳正

小堀 備中守

右當年在府之面々來春不殘御暇可被下外、其以後者此書
付割合之通たるへく外、

帝鑑之間ニある三分一之御上米被仰渡り列

松平 讚岐守

井伊 掃部守(頭)

松平 攝津守

松平 左京大夫

松平 大學頭

松平 越前守

松平 播磨守

松平 求馬

松平 伊賀守

蜂須賀 隱岐

間部 下總守

牧野 因幡守
松平 相摸守
土井 伊豫守
松平 備中守
細川 備後守
井伊 兵部少輔
松平 玄蕃頭
佐竹 壹岐守
高木 主水正
丹羽 式部少輔
松平 彈正少弼
井伊 因幡守
松平 靱負佐
堀田 刑部
堀田 三四郎
松平 刑部少輔
同 式部少輔
松平 兵庫頭
松平 備前守
松平 金之介

雁之間ニ被仰渡外列

内藤 銀一郎
稻垣 熊二郎
本庄 宮内少輔
柳生 備前守
堀 遠江守
遠藤 下野守
永井 播磨守
戸田 右近將監
井上 遠江守
佐竹 豊前守
上杉 駿河守
渡部 備中守
松平 大藏少輔
北條 遠江守
松平 下野守
水野 壹岐守
本田 伊豫守
米津 出羽守

阿部 豐後守
 黒田 豊前守
 土屋 左京亮
 鳥居 丹波守
 内藤 丹波守
 戸田 大隅守
 酒井 信濃守
 山口 伊豆守
 稻葉 丹後守
 秋元 伊賀守
 本田 豊前守
 稲垣 和泉守
 阿部 攝津守
 保科 彈正忠
 井上 筑後守
 松平右近將監
 大久保加賀守
 久世 隠岐守
 永井 伊豆守

1423

阿部 因幡守
 内田 信濃守
 植村 土佐守
 右半年代之面々者壹年宛在所ニ在之、半年宛當地ニ可
 罷在旨被 仰出外、
 松平和泉守名代
 松平 内匠頭
 上ケ米之儀來春迄者高三分一可被差出候、其以後者壹
 萬石ニ付百石之積可被差出候、
 右席々ニ而被 仰出外御書付之趣、松平肥後守・松平
 下總守老中列座和泉守申渡外、參勤交替之刻者大目附
 渡外、
 但被仰出外御書付、表御祐筆組頭小池與左衛門讀之、
 (朱)
 「享保七年」
 繼豊公御譜中
 正文在文庫
 去ル三日諸御大名様方ニ高壹萬石ニ付米百石ツ、之積
 (朱)「押札ニ而
 春秋兩度可被差上外、右付而者 御參勤御時節之儀是
 本文達 貴聞被開召置候以上、

又被仰渡旨有之、委細之儀共承合外趣追々可申越旨、
七月廿七日 御取次町四八左衛門
同日極々急之飛脚を以具申越外間可相達と存外、

一御城中之口江米直成之御張紙出申外由之、御留守居差出外、此以前御張紙之米直段者世上相場より八下直有之たる由外處、此節之御張紙直段ハ當分之世間米直成より八石ニ付三匆程高直之方ニ相見得外、然共近キ比迄ハ、世間之米直成大抵百目程致外故、左様成を相考外得者、御張紙之米直成者下直之方ニ相見得外、世上米直成之儀者時々相替事外故、當分之世間直成可押通事ニ之及無之外、御張紙之趣專其元ニ之御吟味之御見合ニ罷成筈候故、早々申越候方可宜と申談態と極急之飛脚を以申越事候、

一右付者老切角脇々被成方承合外得共、金米ニ之御納被成外儀いつれ之筋可宜者當分迄ハ究之儀不相知候得共、兎角ハ金子ニ之御上納之方可有之哉と、脇方御留守居なども致沙汰事之由ニ御座外故、右之譯究之儀未相知不申外、

一御張紙直成現米百石ニ付代金百三拾八兩三部と銀八匁三分三厘ニ之御座外由外、右付者老小判之直成自然者御考ニ表可罷成哉と存外付、當分江戸直段ハ壹兩ニ付

銀五拾七匁五分貳厘相場ニ由外、大坂之儀者老小判壹兩ニ付五拾七匁三分七厘相場之由、大坂より頃日差越候金子直成書ニ相見得外付申越事外、

右之段片時表早く相達外方可然申談早々申越事外、
此段ハ猶爲御存外、以上、

〔朱〕
「享保七年」七月八日 伊集院藏人

鳴津 全

島津 内記殿

島津 内膳殿

北郷作左衛門殿

名越 右膳殿

〔朱〕
全上

寫正文在文庫」

寫

但石ニして三十五石也、

御張紙百俵ニ付

四拾九兩直段

金壹兩ニ付米七斗貳升かへ

現米百石代

百三拾八兩三分

八匁三分三厘也、

(朱)
「享保七年」七月

(朱)
「全上」
正文在文庫」

一當年御在府之御方様來春不殘御暇御給、其以後者此度
(朱)「押札」
之御書付割合之通之筈外由、御口上ニ有御老中様より
本文會聞被問旨當候、以上、

去ル三日被仰渡たる由ニ外、
七月廿七日 御取次 田田八左衛門

一萬石以上御參勤御用捨無之御方、又者御暇等御給不被

成、或御當地御在役之御方様より米等被差上外儀付有、

一萬石ニ付百石之御割合三分壹之積を以被差上筈之由

ニ外、

右之段不急儀ニ御座外得共、此程之御大名様方御名

書差越外人數ニ不相見得御方之様ニ有外故差越之

外、其外ニも被仰渡外御人數有之外得共、未相廻不

申外故相知不申外間、右之趣を以可被達貴聞儀者宜

被申上外、且又溜詰御連枝方寺社御奉行などへ仰渡

之御書付寫并御名書壹通松平伯耆守様御留守居より

差越外由ニ有佐久間九右衛門差出外付、御見合ニも
(盛村)

可罷成哉と差越之外、以上、

(朱)
「享保七年」七月八日 伊集院藏人

島津 杵

嶋津 内記殿

嶋津 内膳殿

北郷作左衛門殿

名越 右膳殿

(朱)
「全上」

寫正文在文庫」

寫

今度萬石以上より八木差上外儀并參勤之節御用捨被遊被
差延外段委細別紙被 仰出外、夫ニ付參勤御用捨無之面

々、又者御暇等不被下、或ハ當地在役之輩は、八木差上

外儀被 仰出間敷思召外、然るに御勝手御不如意之故以

八木等差御用立外儀者何者可爲本意儀者勿論ニ外、然上
(云脱カ)

ハ縦雖爲在役之者一統ニ被 仰出外様ニと年寄共達有相

願外付有、難止被思召、左外者八木少々可指上旨被

仰出外條參勤御用捨無之面々并御暇等不被下面々、壹萬
(云脱カ)

ニ付百石之割合三分一之積を以差上之外、

右之趣可申聞旨被 仰出之、

右ハ溜詰御連枝方・寺社奉行・伏見奉行・萬石之大番頭
且亦居所無之面々へ申達、

(朱)
「享保七年」

1427

(朱)
「寫正文在文庫」

覺寫

一 參勤御暇之儀只今迄外様四月、御譜代六月交替被仰付
外得共、向後老一同ニ三月中、九月中交替可被 仰付
外事、

一 嫡子御暇被下、其父在所到着以後六十日過、
可致參府外事、

一 在所又老居所有之面々ニ老、幼少、若年之者、老御
暇被下間敷、併一年半老御暇之格ニ准し御門番・火
之番等被仰付間敷、尤半年充老在府之格ニ右御用
等可被 仰付外事、

一 上ケ米之儀、大坂御藏に成共、當地御藏に成共、面々
勝手次第上ケ米高半分充春秋兩度ニ可被相納外事、

但米ニ難納面々老金子ニ其節之張紙直段を以可
被納外事、

一 當年老上ケ米高半分之積、秋中可被相納外事、

(朱)
「享保七年」

1428

繼豊公御譜中

(朱)
「寫正文在文庫」

寫

辰三月參勤
同九月御暇

張紙ニ而
參勤交替只今迄之通

辰九月參勤
巳三月御暇

松平 安藝守
有馬 玄蕃頭

細川 越中守
佐竹右京大夫

松平 淺五郎
松平 加賀守

松平 出羽守

松平 丹後守

藤堂 和泉守

松平 大炊頭

松平 土佐守

卯三月參勤
同九月御暇

松平 大隅守

松平 右衛門督

松平 甲斐守

松平 民部大輔

宗 對馬守

松平 陸奥守

張紙^二而
參勤交替只今迄之通

松平 淡路守

松平 筑前守

松平 中務大輔

上杉 喜平次

卯九月參勤
辰三月御暇

丹羽左京大夫

伊達 遠江守

松平 備後守

南部 大膳亮

溝口 信濃守

藤堂 佐渡守

秋月 長門守

辰三月參勤
同九月御暇

堀 若狹守

遠山 勝三郎

鍋嶋 攝津守

毛利 但馬守

岩城 但馬守

鍋島 和泉守

市橋 壹岐守

松平 近江守

土方 彦五郎

立花 出雲守

織田 播磨守

堀 淡路守

建部 丹波守

加藤 大藏少輔

京極 壹岐守

織田 美濃守

仙石 信濃守

京極 若狹守

伊東 修理亮

辰九月參勤
巳三月御暇

稻葉能登守
龜井隱岐守
鳴津淡路守
六郷伊賀守
毛利周防守
大田原飛驒守
毛利讚岐守
京極土肥之助
細川伊豆守
田村下總守
分部左京亮
南部甲斐守
大關信濃守
細川長門守
森安藝守
池田丹波守
一柳因幡守
松浦豐後守
松平大和守

卯三月參勤
同九月御暇

中川内膳正
松浦肥前守
黒田甲斐守
津輕土佐守
金森出雲守
小出信濃守
木下肥後守
池田内匠頭
九鬼大隅守
五嶋大和守
久留嶋信濃守
谷出羽守
青木出羽守
新庄駿河守
一柳對馬守
織田肥前守
松平長門守
松平左兵衛督
立花飛驒守

卯九月參勤
辰三月御暇

加藤 出羽守
 大村 伊勢守
 木下右衛門佐
 相良 遠江守
 森 和泉守
 鍋嶋 加賀守
 九鬼 丹後守
 松平 豊前守
 堀 左京亮
 伊達 和泉守
 織田 近江守
 關 備前守
 片桐 石見守
 伊東 播磨守
 前田 丹後守
 榑原式部大輔
 本多中務大輔
 松平 遠江守
 松平 隲岐守

辰三月參勤
同九月御暇

本多 唐之助
 松平 主殿頭
 松平 孫四郎
 加藤 和泉守
 水野 攝津守
 松平 飛驒守
 本多 肥後守
 本多 兵庫
 戸田 采女正
 堀田 伊豆守
 内藤 豊前守
 松平 日向守
 内藤 備後守
 本多 主膳正
 相馬 讚岐守
 脇坂 豊之助
 諏訪 安藝守
 小笠原能登守
 酒井 石見守

辰九月參勤
巳三月御暇

本多 時之助
小笠原喜三郎

小笠原右近將監

酒井左衛門尉

松平 和泉守

水野 日向守

松平 周防守

太田 備中守

有馬左衛門佐

松平 采女正

西尾 隱岐守

植村右衛門佐

増山 對馬守

酒井 雅樂頭

眞田 伊豆守

奥平大膳 大夫

牧野 駿河守

戸澤 上總介

卯三月參勤
同九月御暇

卯九月參勤
辰三月御暇

岡部 内膳正

秋田 信濃守

松平 紀伊守

本田 若狹守

小笠原近江守

〔朱〕
「享保七年」

〔朱〕
「存口裏」

國持

外様 之面々に

御譜代

1429 吉貴公御譜中

松平上總介

只今まで御内證より差上られものこれあり外へとも、表
向より上げ物これある方ハ、御内證よりの上げ物ハ相止
り間、自今御内證よりの上げられものに及ハす外、寒暑
に使計差上らるへく外、

朱力奉
享保七年七月五日

1430 全上

1432

今度嗣息爲轉任之嘉客芳札令満足外、猶期後音外、謹言、

全上

松平上總介殿

朱力キ 享保七年 孟秋廿二

(花押 No.4)

1431

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳牒披閱、今度轉任之事相聞、被伸嘉詞目錄之通惠賜懇
篤之至不淺満足思給外、謹言、

朱力キ 享保七年七月五日

土用

御着

之内一種

御菓子

寒中

御着

之内一種

御菓子

右のとをり向後差上らるへくり、此外只今まで差上られ
外品もこれあり外へともその儀におよハす外、

松平上總介

内より

1433

朱力キ 享保七年

初秋廿三

(花押 No.3)

松平上總介殿

全上

返々文のやうかすく御まんそく思しめし、よ
くく申せとの御事ニ御さ外、かしく、

御ふミ被下ひろういたしまいらせ外、まつく
一位様御きけんよくならせられ外まゝめてたく思しめし
被成外へくり、さてハこのたひ

近衛左大臣様御轉任遊ハし外ニ付、御悦被仰上外、御満
そくニ思しめし外、萬々年も御はんしやう遊ハし、めて
たき御事のミといわる入らせられ外御事ニ御さ外、めて
かしく、

朱力キ 享保七年

松平

御返事
上總之介様

人々御中

いは倉

梅園

さくらら

方

吉 貴 公
 繼 豐 公
 享 保 七 年 自 七 月
 至 十 二 月

追 舊 記 雜 錄 卷 五 十 九

繼豐公御譜中

正文在文庫

松平大隅守

只今まで御内證より差上物これあり外へとも、表向より
 上げ物これある方ハ御内證よりの上げ物ハ相止外、大隅
 守より表向よりも度く上げ物もこれあり外間、旁御内
 證よりの差上物に及ハす外、年頭・土用・寒に使計差上
 らるへく外、

(朱)
 「享保七年七月五日」

繼豐公御譜中

去載六月十五日、於江府芝邸吉貴讓傳來之家系文獻及
 寶器等讓狀并錄目於繼豐、然家系文獻寶器藏于薩城寶
 庫、故使比志島隼人範房、命就薩城而覽閱之上、
 於是繼豐歸國、而後享保七年丁寅七月二十六日備家系
 文獻及寶器等府城對面所、而繼豐拜覽之、斯時記錄官
 町田權兵衛俊懿持讓與之諸品樞機書、侍于席末、逐
 一演說之達于聞、因先規也、嚮是吉貴襲家統之日、
 因大故闕讓與之書并錄目矣、其後歸國、寶永三年
 丙戌三月二十二日備家系文獻及寶器等於府城對面所、
 拜覽之、斯時記錄官田中五右衛門國明持讓與之諸品樞
 機書、侍于側、一々演說之達于聞、斯事雖闕、
 載于吉貴之譜中、詳錄別冊存之、然則繼豐拜覽亦
 因先規也、

(朱)
 「正文在納戸方」

小十文字
 一御太刀 一腰光世作

源氏重代膝丸之御太刀ニ候、從

頼朝卿 忠久公に御拜領被遊、小十文字と名を御改

外、

大十文字
一御太刀 一腰無銘

賴朝卿御太刀 忠久公に御拜領之後被號大十文字、

鳩作
一御脇指 一腰無銘

賴朝卿御守刀 忠久公に御拜領被遊り御重物に候、

細切
一御太刀 一腰兼永作 但當分之二候
御拜御脇指

二代 太守忠時公承久三年之兵亂に關東方に宇治

川御渡、敵七人御討取被成り時御帶被遊、夫より

御代に御傳來之御重物に候、右御軍功により伊賀國

長田郷地頭職御賜に候、

八幡十
一御太刀 一腰青江恒元作

一般若之劍 一振波平行安作

大夫判官 宗久公之 御袖刀に候、中心に島津判

官殿袖刀と銘有之候、

一御太刀 一腰宗近作

血吸劍
一御劔 一振弘法大師作之由

右四行 御家御代に之御重物藤野怒世より差上り、

一御太刀 一腰眞利作

寛永十四年二月從 家久公、平田清右衛門を以

光久公に御讓爲被進御太刀にあり、此外鷹之巢御脇指

光忠御腰物一所御讓被進りと相見得り、鷹之巢者由緒(行カ)緒左條に有之候、光忠者先年從 光久公、平松中納言

様は爲被進由に候、

一御琴 一面遠鷹

元和三年二月 家久公江戸御參府之砌、於京都

後水尾院様宸襟御伺被成り處、甚愜慮に被爲懐、右之

御琴御拜領被遊、夫より 御代に御傳來之處、元禄九

年子四月罹火災、從 綱貴公摸寫被 仰付置り付、直

右御拜領之御琴同前に御取持に候、

一衛府御太刀 一腰眞眞作

寛永三年丙寅秋

後水尾院様より 家久公に御拜領被遊り、

一御太刀 一腰康次作

天正十二年九月四日從

將軍義昭公 義久公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰包平作但當時御短刀拵に而候

鷹之巢
一御脇指 一腰宗近作但當時御短刀拵に而候

天正十五年五月八日於泰平寺 秀吉公に 義久公初め 御目見被遊り御

秀吉公被帶り右包平之御腰物、宗近者御脇指 御手自

義久公に御拜領被遊り、右宗近者名物の御脇指に由り、
義久公 家久公に被進之、寛永十四年二月從 家久公

平田清右衛門を以

光久公に 御讓爲被進御脇指に由り、

一御太刀 一腰正恒作

寛永七年四月十八日

家光公櫻田御屋敷に 御成之節 家久公に御拜領被遊
り、

一御腰物 一腰正宗作

寛永七年四月廿一日

秀忠公櫻田御屋敷に 御成之節、備前長光之御太刀と

一所に 家久公に御拜領被遊り、

一御脇指 一腰貞宗作

正保四年十一月十三日、於武州王子原犬追物被備 台

覽り節、從

家光公 光久公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰吉房作

義久公御指料に由り御秘藏爲被遊御腰物に由り、

右十八ヶ條從此以前御讓物に由り、

一御腰物 一腰長光作

慶長四年正月三日 忠恒公家久伏見御旅館に朝鮮國御歸朝
之爲御祝儀

家康公御見舞之節、從

家康公 忠恒公に御拜領被遊り、

一御脇指 一腰彌正宗

元和二年四月八日

家康公御不例御大切被成御座り砌、松平陸奥守様・松
平肥前守様・細川越中守様 家久公駿府御城に被爲召
爲御暇乞、各御腰物御脇指御拜領被成り、其節 家久
公に右御脇指御拜領被遊り、

一御脇指 一腰堀尾正宗

慶長五年七月於參州池鯉鮒之驛、加賀井彌八郎、水野
和泉守忠重を致殺害り節、堀尾帶刀吉晴右脇指を以彌
八郎を被刺殺り由、其後

將軍家に進上り由り處、寛永三年正月十四日、從

秀忠公 家久公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰來國光作

寛永七年四月十八日

家光公櫻田御屋敷に 御成之節

光久公に御拜領被遊り、

一 御太刀 一腰備前長光作

寛永七年四月廿一日

秀忠公櫻田御屋敷江 御成之節、正宗之御腰物と一所

二 家久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰吉家作

寛永七年四月廿一日

秀忠公櫻田御屋敷江 御成之節

光久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰來國行作

寛永八年從

秀忠公爲御形見 家久公江御拜領被遊下、

一 御脇指 一腰筑州住左文字作

寛永八年四月朔日於江戸 御城

光久公御元服之節、從

秀忠公 家久公江御拜領被遊下、

一 御太刀 一腰備前守家作

寛永八年四月朔日於江戸 御城

光久公御元服之節、從

家光公 光久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰無銘左文字作

寛永八年四月朔日於江戸 御城

光久公御元服之節、從

秀忠公 光久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰國行作

正保四年十一月十三日於王子原犬追物被備 台覽下

節、從

家光公 綱久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰則光作

正保四年十二月二日王子原犬追物首尾能相濟下爲御

禮、御登 城之節於二之御丸、從

家綱公 光久公江御拜領被遊下、

一 御脇指 一腰備前兼光作

正保四年十二月二日犬追物首尾能相濟下爲御禮、御登

城之節、於二之御丸、從

家綱公 綱久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰則宗作

慶安四年十二月廿六日、於江戸 御城 綱久公御元服

之節、從

將軍家綱公 綱久公江御拜領被遊下、

一 御腰物 一腰備前吉房作

寛文七年十二月廿五日、於江戸 御城 綱貴公御元服之節、從

家綱公 綱貴公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰備前助眞作

天和四年四月十九日

將軍綱吉公御代、初め 光久公御國元江之御暇御給之節、從

綱吉公

光久公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰一文字作

元禄二年十二月十五日、於江戸 御城 吉貴公御元服之節、從

綱吉公

吉貴公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰備前長光作

元禄十一年八月二日 綱貴公武州東叡山本堂御手傳首尾能御成就に付、於江戸 御城、從

綱吉公御手自

綱貴公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰三条吉家作

寶永六年六月六日

將軍家宣公御代初め 吉貴公御國元江之御暇御給、翌

七日御禮被仰上り砌、從

家宣公 吉貴公に御直御拜領被遊り、

一御腰物 一腰越中國則重作

正徳五年六月十二日

將軍家繼公御代、初め 吉貴公御國元江之御暇御給、翌十三日御禮被仰上り砌、從

家繼公 吉貴公に御拜領被遊り、

一御腰物 一腰來國光作

享保二年六月十二日

將軍吉宗公御代、初め 吉貴公御國元江之御暇御給、御禮被仰上り砌、從

吉宗公 吉貴公に御拜領被遊り、

右二拾一ヶ條今度新に御讓物に被相加り、

右總而三拾九ヶ條之品々、御家御傳來之御重物に、

爲御讓物之條萬般無聊尔可格護之者也、仍如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越 右膳 恒渡判

種子嶋 彈正

久基判

北郷作左衛門

久嘉判

1437

(卷) 「正文在納戸方」

御尺八 二管

一管者わし

一管者かゝみ

元和三年二月

家久公江戸御參府之砌、於京都

後水尾院様宸襟御窺被成り處、甚

歎慮ニ被爲慚、右之御尺八御拜領被遊外、

右御拜領以來爲御傳來御讓物之處、元禄九年子四月罹火

災かゝみ一管者燒失、わし一管者半燒殘有之候、然者御

重物 御覽之席ニ被備躰ニ無之故、此節御目錄之内被相

除外、雖然後代右之由緒傳失仕問敷者也、仍る如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越 右膳 恒渡判

種子嶋 彈正 久基判

鳴津 内膳 久兵判

鳴津 内記 久貫判

御納戸奉行

1438

(小) 「正文在納戸方」

御納戸奉行

一御太刀 一腰景光

右從 立久公、細川右馬頭政國に太刀一腰・鳥目三千

疋被贈遣外爲御返禮、文明年間十一月廿二日政國より

立久公に右之御太刀被進り由 立久公御譜中に見得申

外、尤御納戸方に其譯相知居外、左り而天和二年、

戊四月三日日本阿彌より右御太刀備前師光に相極り由、

御納戸方帳内相見得申外、

一御太刀 一腰一文字

右天正十三年二月廿七日有馬左衛門太夫久賢に 義久

公より御諱之字被遣外爲御禮、久賢鹿兒嶋に被差越り

節、右御太刀久賢より 義久公に進上る御座外、

一御太刀一腰吉重

北郷作左衛門 久嘉判

鳴津 内膳 久兵判

鳴津 内記 久貫判

御納戸奉行

右者 中納言様御太刀ニ御座レ由、然共右之由緒御
記錄所ニ相知不申レ、

一 御鐵炮 一挺本マ、五匁五分玉

但 金銀ニ水牛之象眼有、

右者 惟新様御持筒ニ御座レ、然共右之由緒御記錄
所ニ相知不申レ、

一 同 一挺五匁四分玉

但 曲尺之二字彫付有之、左之文字眞鍮ニ居物有、

中心乘直三韓制敵胎厥家聲久揚文祿甲午年

右朝鮮國ニ被成御持セ御鐵炮ニ御座レ由申傳レ、
右之譯御記錄所ニ相知不申レ得共、右文字を以相考候
得者 義弘公 久保公 忠恒公御間之御持筒ニ、朝
鮮國ニ御持セ爲被成鐵炮ニ可有御座レ、

一 同 一挺

二十目玉九字之切物有

右種子嶋山栖久徳三郎久徳と申レ節、鐵炮數挺 光久公御

用付被差上レ、依之御持筒之内一挺拜領可被仰付レ間、
御鐵炮藏ニ參見合可備 御覽旨 御意レ付、右御鐵炮

致持參拜領仕度旨被申上レ處、折節嶋津市正殿患・嶋津
安藝殿御前久雄に被詰居、右御鐵炮者

家久公御佳例能御鐵炮之由ニ

光久公御下向之砌、御中途ニ御持セ被進之、其時分肥

前嶋原籠城之砌ニ、城下御通船御手自向城中、爲被
遊御放御鐵炮之由、於御前兩人より御物語被申上レ段、

種子嶋山栖久時覺居被申レ、然共其譯御記錄所ニ相知不

申レ、

一 同 一挺三匁五分玉十目

一 同 一挺三匁六分玉明德

一 同 一挺三匁五分玉五典

右三行 家久公御持筒ニ、朝鮮國ニ御持セ被成、御
手自大明人餘多御討爲被成御鐵炮ニ、右三挺共ニ筒
之銘家久公御作御自筆之由、種子嶋時春杯承傳居レ由、
尤於世上表其尊承事御座レ、然共右之譯御記錄所書付
之内ニ者相見得不申レ、

一 同 一挺三匁五分玉白木台

右十目・明德・五典同前ニ 家久公御持筒ニ、朝鮮

國ニ御持セ爲被成、決勝と申御鐵炮ニ御座レ由、覺
居申者及御座レ、然處先年御拂罷成、於脇方臺仕直シ、

當時決勝之文字無之レ得共、右譯を以其以後御取上ニ
罷成レ由承申レ、然共右之譯御記錄所ニ相知不申レ、

一 琵琶 一面名松風

但 白木撥面黒塗、若松ニ金銀之金具ニ座頭之圖有、
萌黄地金入緞子袋ニ入、外家黒塗松風之文字有、
右龜山(忠思)又兵衛(如雲)義久公ニ進上仕(久忠)由、龜山全太

夫文書之中へ相見得申(久忠)由、又兵衛事ハ 勝久公御由緒
之譯を以 御家御傳來之御重物餘所持仕居 義久公

義弘公 久保公ニ進上仕(久忠)由、書付之中ニ相見得申(久忠)由、
右琵琶之儀及 御家御傳來之物ニ座外故、進上仕

外半と存申(久忠)由、其外大白流・小白流之琵琶二面、是又
義久公ニ進上仕(久忠)由、龜山家書付之内相見得(久忠)由、

當時右之二面御納戸方ニ無御座外、

右之通御記録奉行よりしらへ申出外間、取置等入念向
後不紛様ニ屹と取分可藏置外、尤代合之節ハ跡役堅固

可次渡也、

享保七年寅七月

嶋(高津久信)將監

(本)「正文在兵具所」

一 御鎧一領

忠久公御鎧御嫡家御代々御相續之御重物ニ座、明德四

年 元久公御從弟 上總介伊久より 元久公ニ御使者

を以被仰遣外者、御家督御相傳小十文字之御太刀 忠
久公御鎧 元久公ニ御附屬可被成由外、 元久公固御

辭退被遊外得共、御家鎮護之御寶物ニ外間、被成御受
用國家を御治外儀專要候旨、再三被仰進御同意被成、

撰吉日河邊兩城之間、田之中ニ伊久方より相渡外役、
御太刀阿蘇谷周防介、御鎧石塚大和守、此方より請取

之役、御太刀山田右京亮、御鎧伊地知民部少輔請取之、
納御寶藏御家珍と被成候、御一族他家之國人此御規式

を奉拜弥 元久公を奉仰 主君、御威光益莫大ニ罷成
候、

一 御旗二流(一流者時雨之御旗 一流者日御旗)

時雨之御旗者天文十四年

貴久公中興之太守御定被遊、始御出陣之時御指せ被
成外、御家之儀、雨を以嘉瑞と被成外故、時雨之模様

有之外、白御旗者本より爲源家之御佳例故ニ 貴久公
及亦御用被成外、二流共ニ 貴久公御實名有之、御吉

例之御旗御重物ニ座候、

一 御手鐮一本城州長吉作

元龜三年五月四日、伊東家より加久藤之城ニ押詰、急

可攻取と仕り時 義弘公飯野之城より 御出り、於
木崎原御鍵を御合せ、則敵を御押崩追討被成、小林鬼塚
原にる柚木崎丹後を御討取被成り時之御道具に候、

一本杉御馬驗 一本

於朝鮮國 義弘公御作せ被成、泗川之御一戰に初る御
持せ被得御太利り、其以後此御馬驗に御定被成、別
御吉例之御馬驗に被成り、

一御旗一流八幡大菩薩之文字
有、文覺上人筆

頼朝卿御旗に候、

一御旗一流

義久公御旗御實名有之外、

右六ヶ條之品に 御家御傳來之御重物に爲御讓物之
條萬般無聊尔可格護之者也、仍如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越

右膳 恒渡判

種子嶋

彈正 久基判

北郷作左衛門

久嘉判

嶋津

内膳 久兵判

物頭

嶋津

内記 久貫判

1440

(宋) 「正文在兵具所」

小泉 一御冑 一領

文祿四年 義弘公に御領國御給之御朱印并御目錄可被
遣り間、御歸朝可被成旨朝鮮國に 合翰御到來、則御
歸朝被遊之處、於伏見、從

太閤秀吉公御朱印并御目錄御給に候、其節右御冑平
野肩衝御茶入と一所御拜領被成、再朝鮮國に御渡海、

慶長三年十月朔日泗川之御一戰被得御太利、被遊御軍
配候節、初る被爲召候御冑に候、

一御鎧 一領

日新様御召料、

一御鎧 二領

義久公御召料、

一御鎧 一領

慶長三年十月朔日、朝鮮國泗川之御合戰に 家久公御
手自敵七人御討取被遊、 家久公表御肩に御手疵を被

爲負^レ時、被召候御鎧ニ^レ候、

右四ヶ條爲 御代々御讓物之處、元祿九年子四月罹火災、其札混雜^ル不分明、御胄者總^ル雖其形相殘、御重物 御覽之席被備躰無之故、此節御目錄之内被相除^レ、雖然後代右之由緒傳失仕間敷者也、仍如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越 右膳 恒渡判

種子嶋 彈正 久基判

北郷作左衛門 久嘉判

鳴津 内膳 久兵判

鳴津 内記 久貫判

物頭

(朱) 一正文在兵具所

物頭江

一御鎧一領

右者 泰清院様御召料ニ^ル御座^レ、
(續必)

一加藤鎌御手鍔 一本

右者加藤清正手鍔ニ^ル御座^レ處、於朝鮮國又者江戶と申 説も有之由

家久様、清正と賭之御勝負被成 家久様者御鐵炮、清正者弓ニ^ル 家久様御負^レハ、正説者不相知^レ得共、七嶋可被遺^レナト、御約束爲被成由、清正被負^レハ、右手鍔可被遺^レ由^レ、御勝負被成^レ處、家久様御勝被遊、右手鍔此方江御取爲被成由、御兵具所江申傳御座^レ、尤於世上も其噂承事^レ、其節御勝負被成^レハ、大蜻蜒と申御鐵炮ニ^ル御座^レ由、右御鐵炮、從 光久公入來院石見重頼江拜領被 仰付、于今主馬殿家ニ格護ニ^ル、彼家中古老之者共右之噂申傳^レ由、主馬殿方より承届申^レ、然共右之譯御記錄所書付之内ニハ相見得^レ不申^レ、

一團扇之丸御馬印一本

右究^レ之儀者不相知^レ得共、

忠恒様朝鮮國江被成御持せ、御佳例能御馬印ニ^ル御座^レ由、其故ニ^ルも御座^レ哉、大玄院様御道中被遊御持せ、左^レハ 總州様御部屋栖之節も、御道中御持せ被遊來^レ處、先年高輪御類燒之節致燒失、其後右寫^レ以出來被仰付置^レ由、御兵具所江申傳御座^レ、然共右之由緒御記錄所江相知^レ不申^レ、

一 御幕貳頭内壹頭ハ仕切幕

但 古物日野絹紋所丸之内二ツ引

右者朝鮮國御渡海之節、御船幕之由申傳、御船手には有之ハ處、先年御兵具所は爲被納置由ハ、然共右之譯御記錄所は相知不申ハ、

一 御船鹿のさかつら

右者寛永七年四月櫻田御屋敷ハ 御成之節、獻上有之ハ御船之寫ニ由緒相知不申ハ、御兵具所ハ申傳ハ得共、御記錄所ハ右由緒相知不申ハ、

一 御持弓壹張

但 黒塗七所藤高荷のむら

一 同壹張

但 末本はつ朱塗、稻妻之蒔繪九所藤

一 同壹張

但 三所拵七所藤

一 同貳張

但 白木

一 同壹張

但 四方竹

一 同壹張

但 そば朱塗、九所藤

一 御持狩籠一腰

但 紫緒添

右御弓御船御兵具所ハ被納置ハ得共、御家誰様御持御道具と申儀、究ハ御兵具所ハ及相知不申、御記錄所ハ及其譯相見得不申ハ、

一 御手鑓一本

宗近作

一 御長刀一振

三條住吉則作、享徳三年四月日と銘有

右之御道具御兵具所ハ有之ハ得共、誰様御代より被納置ハ由緒、御兵具所ハも相知不申、御記錄所ハ及其譯相見得不申ハ、

右之通御記錄奉行より相しらへ申出ハ間、取置等入念向後不紛様屹と取分可藏置ハ、尤代合之節ハ跡役ハ堅固可次渡也、

享保七年寅七月

（爲津久重）
鳴 將監

(朱) 一正文在御覽方

御覽別當に

一御鞍 一口無海

但 黒塗御紋金具乗合青貝十二支之圖形高蒔繪金覆輪

伊勢上野介作

一御鏡 一掛

但 黒塗金粉鑄掛内朱塗鳩胸十二支之圖形高蒔繪有

右御鞍鏡者 義久公御秘藏爲被遊由、嶋津兵庫忠

朗致格護り處、綱久公加治木に御光儀之節、自忠朗

進上より、御覽方に申傳り、慶長五年九月 義弘

公關ヶ原御退陳之節、御召御馬福山野黒栗毛名小於中

途別の草臥、乍御鞍置被捨置り處、御中間小川與三左

衛門・江口作兵衛兼り御秘藏之御鞍を存り故、兩人御

跡に馳戻り御鞍を取解鞍に仕、肌に着御供爲仕之由り、

御記録所書付之中、右御退陳之節御供仕り御小者大重

平六覺書に考、御馬但青毛名紫と申り、境之住吉大明

神に御寄進被成り由相見得申り、右通に御座り得り、

御覽方申傳之趣とハ相違仕り得共、御馬ハ住吉に御寄

進より、右御鞍之儀者御持下り可被成事と存申り、

一御鞍 一口海有

但 梨子地石餅(持丸)之紋金粉鑄掛伊勢駿河守入道照安作

右御鞍者 御家御代に御相傳被成來り由、然共右由緒

御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口海有

但 黒塗御紋高蒔繪有

一御鏡 一掛

但 黒塗御紋高蒔繪内朱塗すかし崩格子有

右御鞍鏡者 御家御代に御相傳被成來り由、然共御記

録所に右由緒相知不申り、

一御鏡 一掛

但 梨子地丸之内丁子紋有

右御鏡者 御家御代に御相傳被成來り由、然共右由緒

御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 龜甲高蒔繪、居木黒塗高蒔繪、御紋金金具

一御鏡 一掛

但 龜甲高蒔繪御紋金金具内朱塗

右御鞍鏡 御家御代に御相傳被成來り由、然共右由緒

御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 黒塗一疋獅子之紋金具伊勢上野介作

一御鏡 一掛

但 黒塗無紋内朱塗大取すりかぶ

右御鞍鐙者 御家御代々御相傳被成來り由、然共右由

緒御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 梨子地御紋金具

一御鏡 一掛

但 梨子地無紋内朱塗片突すりわらひて

右御鞍鐙者 御家御代々御相傳被成來り由、然共右由

緒御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 黒塗茗荷之紋金具伊勢駿河守入道照安作、

一御鏡 一掛

但 黒塗大花茗荷高蒔繪内すかし花菱、

右御鞍鐙者 御家御代々御相傳被成來り由、然共右由

緒御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 黒塗御紋金具金粉鑄掛

一御鐙 一掛

但 梨子地桃之紋有

右御鞍鐙者 義久公御秘藏被遊り由、然共右由緒御記

録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 梨子地葵御紋金具伊勢因幡守貞直作

一御鏡 一掛

但 梨子地葵御紋金具伊勢因幡守貞仲作

右御鞍鐙者 御家御代々御相傳被成來り由、然共右由

緒御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 梨子地金粉青貝江南鞍、

右御鞍者 御家御代々御相傳被成來り由、然共右由緒

御記録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 黒塗無紋號小鞍、

右御鞍者嶋津兵庫忠朗より進上之由、然共右之譯御記

録所に相知不申り、

一御鞍 一口無海

但 波之蒔繪、三笠之紋有、

右御鞍者 家久公に寺澤志摩守正成より被進り由、然

共右之譯御記錄所に相知不申外、

一御轡 一間市村吉勝作

右御轡者 家久公に上田吉之允より進上仕御秘藏被遊

外由、右吉之允と申者者 家久公御心安被仰下外哉、

差上外書狀御家譜之内にも段々相見得申外得者、右轡

進上可仕事御座外、

一御鞍 一口無海

似 黒塗無紋

右御鞍者 京極若狹守様御家來、沖長門氏一入道道栖

と申者、此御方に御預に罷成居外、右道栖より進上仕

外由、其譯御記錄所に相知不申外、然共道栖事此御方

に御預り被成外事者別條無之事外付、右鞍進上仕外半

と存外、右者御厩方御讓物外爲差立御馬道具由緒如斯

御座外、右之内御代々御傳來之御鞍鏝其由緒過半御記

録所へ相知不申外、乍然天正十二年九月四日

靈陽院義昭公より 義久公に作之御鞍被遣外由御内書

御座外、且又天正十一年三月廿四日 義弘公に甲斐宗

運より鞍一口稱繪進上仕外書狀、御記錄之内に相見得

候得共、右御鞍之儀ハ當時御厩方に相知不申外、右由

緒相知不申御鞍之内に者、右之御鞍可有御座儀も外得

共、難相糺御座外、其外御馬具之儀御記錄之内に相見
得不申外、

右之通御記錄奉行より相知らへ申出外間、取置等入念
向後不紛様屹と取分ケ可藏置外、尤代合之節ハ跡役は

堅固に可次渡也、

享保七年寅七月

鳴久嵩
將監

1443

(宋)
「正文有御厩方」

一御鞍 一口 御鏝一掛

梨子地蝶之高蒔繪紫大形綱虎皮泥障野沓四方手添

寛永三年八月十九日 家久公從三位中納言に御昇進之

日

後水尾院様より寮之御馬御鞍置に御拜領被遊外時之

御馬道具にあり、

一御鞍 一口紋猿金具

從 義久公御吉例之御鞍にありと 御意あり 家久公

に爲被進御鞍にあり、

一御鞍 一口御鏝一掛黒漆御
紋金具

義弘公伊東家御討罰之節、御嘉例能御鞍鏡ニ由從 義弘公 家久公ニ爲被進御道具ニ由、

一御轡 一間正宗作

義弘公御秘藏被遊、

右四ヶ條從此以前御讓物ニ由、

一御鞍 一口御鏡 一掛龜甲高壽輪金具 散シ四方手添

從

將軍尊氏公 五代太守貞久公ニ御拜領被遊、御鞍鏡ニ

由、

一御鞍 一口 御鏡 一掛菊之御紋高壽輪梨地桐之地紋詩繪有鏡黑塗

天正十五年七月

義久公於京都御不快ニ被遊御座、御、從

秀吉公御醫師被差遣早速御平愈ニ由、依之於聚樂第

秀吉公ニ 御目見、右之御禮被仰上、御鞍置馬并

御長刀御拜領被遊、右御鞍鏡老其節御拜領ニ由、

右二ヶ條今度新御讓物ニ被相加、

右總、六ヶ條之品、 御家御傳來之御重物ニ由爲御讓

物之條、萬般無聊尔可格護之者也、仍如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越 右膳

恒渡判

1444

〔正文在御祈念方〕

御厩別當

種子嶋 彈正 久基判

北郷作左衛門 久嘉(判懸)

嶋津 内膳 久兵判

嶋津 内記 久貫判

御祈念方

一 不動明王像御掛物 一幅

天竺光音筆

一 網天神畫像御掛物 一幅

菅丞相自畫自讚

一金佛千手觀音 一鉢

一 五大尊像御掛物 一幅

古筆

一 兩頭愛染像御掛物 一幅

古筆

一 上品上生阿彌陀唐金佛座像 一鉢

一十一面觀音像 一幅

春日筆

右御本尊者御代々被遊御信仰、段々申傳々由緒未有之由々間、隨分入念向後代合之節者、右由緒之譯を委細跡役江堅固可次渡也、

享保七年寅七月

鳴
將監(久當)

1445
(朱)「正文在書院方」

平野肩衝
一御茶入 一箇

文祿四年 義弘公江御領國御給之御朱印并御目錄可被遣々間、御歸朝可被成旨朝鮮國江 台翰御到來、則御歸朝被遊之處、於伏見從

太閤秀吉公御朱印并御目錄御給ニ由々、其節右御茶入小泉御冑と一所ニ御拜領被成名物之御茶入ニ由、寛永七年四月江戸櫻田御屋敷江

將軍家光公 相國秀忠公御成之節、御數寄屋御飾ニ相

備々、

右從此以前御讓物ニ由候、

八景
一御釜 一口

從 賴朝卿 忠久公江御拜領被成、御代々御傳來ニ由候、

寛永七年四月

家光公 秀忠公櫻田御屋敷江御成之節、鎖之間相掛々御釜ニ由候、

右今度新御讓物ニ被相加々、

右之品 御家御傳來之御重物ニ由爲御讓物之條萬般無聊尔可格護之者也、仍如件、

享保七年壬寅七月廿八日

名越 右膳
恒渡判

種子嶋 彈正
久基判

北郷作左衛門
久嘉判

鳴津 内膳
久兵判

鳴津 内記
久貫判

御書院方

1446
(朱)「正文在書院方」

一薩摩文琳御茶入 一箇

御書院方江

右者慶長五年九月關ヶ原合戰之後、(家久著釋明)國分様大坂御屋敷

御退被成り節、御手自御携被遊、夫より御代々御傳來之御茶入之由り、然共右之由緒御記録所に相知不申り、

一種子茄子御茶入 一箇

右種子嶋彈(久基)正祖父種子嶋左近家ニ被持傳り處、中納

言様御代被召上、藤重藤巖と申者に御見せ被成り處、天下之名物つくもと申りなすひの茶入ニ少々不相替り、

天下ニ三ツ々と昔より申習しり、内貳ツハ

太閤様に御座り、大坂ニ有

秀頼御果り時焼りを(秀忠)相國様より藤巖に被成御預、當

時手前ニ御座り由、則其茶入召寄、於 中納言様御前

種子嶋より之茶入と被見合り得者、形比少々不相違り、

勿論つくもハ焼りつる故、わろく入りぬくすり之分少々

不見得り、此方之御茶入ハ一段見事ニ付、殊之外褒

美被申り、其時藤巖當時賣申り共、五百枚ニ者賣可申

と被申り由

家久公御譜中嶋津下野久元・伊勢兵部貞昌書狀相見得

申り、左り右御茶入之御禮彼是三種子嶋に有之り、

御藏入四千石餘左近に被致拜領り由、是又

家久公御譜中ニ相見得申り、

一定家卿筆蹟古今集 一冊

右龜山又(忠辰)兵衛より飯牟禮喜之助御取次を以、國分様に

進上仕り由、龜山李太夫文書之中ニ相見得申り、又兵

衛事者 勝久公御由緒之譯を以 御家御傳來之御重物

餘多所持仕居 義久公 義弘公 久保公に進上仕り

由、書付之内ニ相見得申り、右古今集之儀も御家御傳

來之物故、龜山家より進上爲仕る可有御座と存申り、

一東坡墨蹟 一帖

右(義弘)惟新様御所持被遊り處、

中納言様御覽被成度由被仰上御遣被成り由 惟新様御

狀 中納言様御譜中ニ相見得申り、

一鶴形御茶入 一箇

一繩すたれ御水指 一箇

一やうへん御茶碗 一ツ

右三行名物之御什物ニ御座り由、然共御家誰様御代

より御持傳被遊り由緒、御記録所に相知不申り、

右之通御記録奉行よりしらへ申出り間、取置等入念向

後不紛様屹と取分可藏置り、尤代合之節者跡役に堅固

可次渡也、

享保七年寅七月

寫正文在江戸家老座

家督御禮被申上り節之覺

一五萬石以上より御馬可被差上候事、

繼豊公御譜中

寫正文在江戸家老座

覺

一國持大名歸國禮・參勤伺・暑寒御機嫌伺者可爲使札候、
其外之御禮事杯ハ可爲飛札外事、

一諸大名ハ在所到着之御禮・參勤伺此分計使札、其外ハ
可爲飛札候、尤只今迄飛札ニ勤來り品者、向後亦可
爲其通候事、

但參勤伺只今迄飛札之面々ハ勿論、向後亦可爲其
通外事、

一年始八朔之御太刀者、萬石以上之面々當地之者を以可
有獻上外事、

右之外おも立り御禮事之節者、月番に可被伺り、以上、
朱方年
享保七年 寅七月

嶋
將監(久吉)

一唯今迄眞御太刀被差上候面々ハ、自今ハ作り御太刀并
御馬差上、且又御刀可被差上外事、

但三拾萬石以上ハ御馬二疋、其以下ハ一疋可被差上
外事、

一格別重キ御祝儀御禮事有之節者、眞御太刀可被差上候、
此節者御馬鞍置可被差上外事、

一御一字被下り節者、作り御太刀并御馬差上、且又御刀
可被差上外事、

一只今迄一同御禮有之節者、眞御太刀差上り得共、向後
作り御太刀并御馬可被差上外事、

一向後御刀被差上り節者、代金貳拾枚迄之内ニ可被差
上外事、

但目貫・筭・小柄新古之無差別有合を可用候事、
一箱者桐白木一重箱たるへく外事、

一袋ハ繡珍(巻)段子之内たるへく外事、
但銘など縫付り不及外事、

右之節々金銀絹布綿等差添獻上之儀者、當春相達り書
付之通たるへく外事、

一禮式一通之品ニ取かわしの刀・脇指ハ右ニ可被準り、
其外由緒有之道具杯ハ、代付高下之沙汰ニ不及候條格

別之事、

以上

朱力本
享保七年 寅七月

右貳通之御書付、七月九日戸田山城守様より御留守居可罷
出旨被 仰渡、佐久間九右衛門罷出外處、右貳通寫取可申
(盛村)
旨被 仰渡寫差出外、

繼豐公御譜中

扣正文在江戸家老座

覺

(朱)「御破紙」

一 此度被 仰渡外上米之儀、當秋中老何比迄ニ上納可仕

上納當九月申迄ニ而候、米ハ新古之儀無之候事

外哉、米新古ニ無構上納仕儀ニ委可有御座外哉、

(朱)「右同、金納者江戸御金藏江相納管候事」

一 仰渡之通、米ニの上納難成外ハ、金子を以上納可仕

外、金子ニの委御當地又老大坂御藏ニ成共勝手次第上

納可仕外哉、

(朱)「右同、書面之通ニ候事」

一米之儀ハ石高を以上納仕儀ニ御座候得老、俵之入老何

程ニの委無構儀ニの可有御座外哉、

右之段御尋申上外、以上、

(朱) 松平大隅守内

「享保七年」 七月

佐久間九右衛門(盛村)

右御勘定頭大久保下野守様江差出御尋申上外處、八月二日
御張紙を以被仰聞外、御張紙朱書ニ而記置外也、

1450 全上

正文在文庫

松平大隅守歸國御禮之使者

彌寝仙十郎(清村)

右 御前江被

召出外節、如先例自分之御禮申上外老

御太刀・銀馬代

白縮緬

白紗綾 之内貳卷

右之通可差上外、

(朱) 「享保七年」

松平大隅守家來江

1451 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被

獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

(朱)

「享保七年」 八月三日 安藤對馬守 重行判

1453

御鐵炮三挺被獻之外、遂披露之之處一段之御仕合外、恐
く謹言、

正文在文庫

全上

(朱) 「享保七年」八月十六日

戸田山城守 忠真判

1452

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又今度被

仰出外御書付之趣相達、難有由得其意外、紙面之通各一

覽之事外、恐く謹言、

(朱)

「享保七年」八月十三日

安藤對馬守

重行判

松平大隅守殿

水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠真判

松平大隅守殿

1454

寫正文在江戸家老座

松平大隅守殿

一慶長年中より寛永年中迄之間 御城廻御普譜等有之

節、御手傳御勤外方ハ、何之年場所老何方ニぬいつれ

よりいつれ迄之所、何御普譜之御手傳御勤外と申譯書

付并繪圖・仕様書可被差出候、若繪圖等無之ハ、

書付計成共可被差出候、且又相掛之御手傳之方有之ハ、

ハ、其儀御書加可有之ハ、

一右御手傳御勤外時 公義之奉行役人老誰ニ有之ハ

哉、相知候老是又書付可被差出外、

一右年歳之間御手傳御勤候儀無之ハ、其譯書付御出

シ可有之ハ、

右之通被遂吟味委細ニ書付相認、拙者共四人之内ハ勝

手次第近日可被差出候、此方御役所留書ニ及致外ニ付

相尋申事外、廻狀無滞被致順達、留之方より四人之内

向寄江可被相達外、以上、

(朱) 「享保七年」八月十六日

(白) 普譜奉行(和雄)

丸毛美濃守 (同) (定盛)

朽木丹後守 (作事奉行) (定持)

久松豊前守

(同) (伊尹)
柳澤備後守

松平陸奥守殿奉

御名

有馬玄蕃頭殿

御連名餘ハ略ス

留守居中

右之通御廻狀を以被仰渡り付、右年間之内御手傳御勤之譯承傳表無之、書留等表無御座り故、左之通申上候、左の委細御國元江申越書留等吟味仕、其段可申上由申上置り、右勤佐久間九右衛門也、

但本書之御廻狀ニ者、御名之脇ニ銘々留守居中と有之り得共、其分ハ致略、奥ニ留守居中と記置也、

1455

全上

扣正文在江戸家老座

慶長年中より寛永年號迄之間、御城廻御普譜御手傳相勤候儀、覺爲申者無御座り、舊記相記り帳面過半類焼仕り故、御當地ニ難札御座り、於國元書留等吟味仕、申來次第有無之御届可申上り、以上、

松平大隅守内

(朱)

「享保七年」

八月

佐久間九右衛門

(盛村)

右者於御國元段、被相札候得共、御手傳御勤之儀不相知り、乍然右年間之内ニ木石御獻上之儀者有之り由ニ而、御記録奉行より書出り、御用ハ有之間敷り得共、爲念差越り由委細御國元江申來り付、御作事奉行・御普譜奉行・御用人迄御留守居佐久間九右衛門を以内、承合させり處、右式之儀迄相知り分者、不

残被書出事之由申聞り旨九右衛門申出り付、寅十一月十三日ニ朽木丹後守様江其趣書付差出り、右之段御留守居より 公義書上留ニ記置り故此分迄を記置也、

1456

繼豊公御譜中

正文在文庫

今般初め首尾好御暇、途中無吳儀其地御着之由珍重り、因茲御札之趣御念入段過當之至存り、恐々謹言、

(朱)

「享保七年」

八月十七日

水戸宰相

宗堯判

松平大隅守殿

御報

4457

全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又今度被下御暇、其上御馬并白銀・巻物拜領之、重疊難有由得其意

繼豊公御譜中

正文在文庫

全上

御札令披見外、

公方様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、
隨右御干着一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕
合外、恐々謹言、

(巻)

「享保七年」

八月廿一日

松平大隅守殿

安藤對馬守

重行判

外、國元到着付外、爲御禮以禰寝仙十郎如目録被獻之外、
右之趣遂披露外處 御前江被召出之、入念外段御喜色之
御事外、恐々謹言、

(巻)

「享保七年」

八月十八日

安藤對馬守

重行判

水野和泉守

忠之判

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

享保七年壬寅九月九日

大樹吉宗公以三佳肴^{鮒十}及執政宿次奉書・水野和泉守忠之
驛路之證印一、江府而賜之、於二忠之第二而授三與之家臣
佐久間九右衛門盛村一、是因先躡一、賀三去載繼豊襲封之
後始賜^{告還}國而見^尋問安否二也、仍使^下家臣二階堂與
右衛門廣行^{廻馬}・鎌田勘助政平^{上同}、其外步士四人、輕卒六
人警衛之上、即日發^三江都芝邸^不舍^三晝夜一、經^三歷東海・
山陽・西海之三驛一、十月五日到^三達麿城一、繼豊則拜^三戴
之^一、同日齋^三繼豊之報翰及所^與驛路之證印一、而使^下家臣
鹿島傳左衛門國泰^{番新}・赤塚利右衛門重元^{上同}馳^中江都^上矣、
其日爲^三恩賞之謝使一、令^下島津又吉久儔^{大身分}登^三麿城^一奉^中
繼豊之命^上、且吉貴亦使^下山岡權太左衛門久房^{物頭}爲^三謝恩
使^一副^三久儔^一赴^三江都^上、國泰・重元等經^三西海・山陽・東
海之三驛一、先^三久儔^一同月二十八日著^三江都^一、直候^三執政

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲安藤對馬守可
述外也、

九月七日



薩摩少將殿

番用 戸田山城守忠眞之第一、呈上繼豐之報翰、且復納忠

之驛路之證印一矣、久儔亦經九州之驛路到豐前小倉、

駕船取陸路於播州到大坂、歷東海驛十一月七日

著江都芝邸、同月九日久儔候執政・副執政各位之第一、

捧呈繼豐之書翰・勤使節、久房亦同勤吉貴之使節、

委錄吉貴之譜、同月十五日應教久儔登營、捧

繼豐之獻物二種・雙樽于

吉宗公、於白書院拜調 台顔、勤謝使著對目、肩親長務

是拜謝恩賜達薩府故也、松平能登守乘堅奏達之、

終而久儔亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾

二卷、再奉拜調

台顔、松平伊豆守信高奏達之乃退去矣、同月十八日應

教久儔重登營、於檜間執政安藤對馬守重行出席而

賜繼豐之奉書自見附與之于久儔、且久儔拜戴縮緬

三卷、松平信高執達之、乃退營候執政・副執政各

之第二奉申謝之、十二月十五日久儔使節事畢、與久

房共發芝邸、歷東海之驛到大坂、駕船著小倉、

經九州驛路、翌享保八年癸卯正月二十日到筑後松之崎

驛、時繼豐爲述職、發薩城止宿于茲、故則候而拜

謁復命、同月二十八日還薩府、

1461 全上

正文在文庫

一筆令啓達下、

公方様益御機嫌能被成御座下間、可御心安下、將又家督

以後歸國弥無吳在之哉、爲御尋御看一種被下下、依之

如斯下、恐々謹言、

朱カキ 享保七年 九月九日

安藤對馬守 重行判

水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠眞判

松平大隅守殿

1462 全上

正文在文庫

なをく萬く年も御きけんよく御はんしやうあそ

ハされ様ニ思しめし下、何もくよく申せとて下、

かしく、

御文くたされ下、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御めてたさ、さては

近衛太閤様御機けんよく御座被遊、御かさりおろさせら

1463

繼豊公御譜中

正文在文庫

覺

れ外御事、御めてたく思しめし被成りよし御悦仰あけられ、御ふみのやうひろういたしまいらせ外へハ、御満足と思しめし外、めてかしく、

朱力キ
享保七年

松平

大隅守さま 御返事

いは倉

梅その

さくらい

あ

苗代川之者共、朝鮮國ニの氏、當分十七姓有之由、依之此節より名之上ニ面々之氏を一字ツ、書付外様ニ被仰付外、勿論右通被仰付外儀、名字ニハ無之外、格式表やはり此中之姿ニハ、少衣品能爲被仰付儀ニハ無之外、然者先年李欣衛・主石・春勝・主山事、伊集院衆中之格ニ被仰付外儀、右四人之者共嫡子迄を衆中之格被召成、二男外ハ此中之通ニハ被差置外段申渡置外、此儀者弥其通之儀外、此節氏之字御免被成外儀者、本國にて持合之氏之字ニ候故、一字ツ、氏之字書外儀迄を今度御沙汰之

1465

正文在文庫

追申、中將にも御無事外歎、以別書不申入外條よりしく傳達たのミ入外也、

雖向冷氣外弥平安外歎、然者禪閣當春以來老病終不被得平腹(度カ)、去十四日被薨外、某自幼年蒙教示厚恩之事、彼是

1464

繼豊公御譜中

御記傳奉行

取次 和田次兵衛

享保七寅九月十八日

御勝手方

墨印

上御免被成事外條、右之旨を存聊不致忘却、至以後存違不成合之儀共曾ハ無之様可相心得外、尤伊集院變共より諸事申渡儀無違背可相守外、右之通伊集院地頭外吃と申渡外様こと申渡外條可承置也、

今茲九月十四日 近衛基熙公本政大臣 後稱禪閣薨ニ于京師堀河華第一、

故進ニ呈使翰於

家熙公 家久公ニ而奉吊(也)之、

胸中可令憐察給_レ、相互之遠祖往昔之由緒有_レ之故、禪

閣在世之間大玄院以來荷恩數十年、不自由無之閑居、今

更不堪感謝候、且又其内々にて年々得助力候、これハ一

旦之親之許之事候間可令返却_レ故、禪閣被贈_レ分、此以

後不相替、又公へ令進給_レハ、舊好之印も残り、又老故

禪閣被召仕_レ舊功之者等扶助之便、旁以可爲満足候、委

細御母堂へ令申入_レ條、宜御取許貴國古老之家臣ともへ

も被申渡可給_レ、此等之儀早速申入_レ事亦面_レ、乍然

不存隔意以愚筆如此_レ、穴賢々々、

朱カキ
享保七年 九月廿六日 家久

(蘇患)
薩摩少將殿へ

1466 繼豊公御譜中

正文在文庫

六諭衍義被獻_レ之_レ、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐々謹
言、

朱カキ
享保七年 九月廿九日

松平大隅守殿

戸田山城守
忠真判

1467 繼豊公御譜中

正文在文庫

枳穀一箱被獻_レ之_レ、遂披露_レ之_レ處一段之御仕合_レ、恐々

謹言、

朱カキ
享保七年 十月二日

松平大隅守殿

戸田山城守
忠真判

1468 吉貴公御譜中

今春吉貴因_二病痾_一、賜_レ告還_レ國、雖_レ療_二浴温湯之地_一未_レ得_二

驗快_一、每時發_二眩暈_一、既無_レ由_レ欲_レ窺_二參府之期_一、以故

繼豊馳_二使翰於江都_一稟_二之_一官府_二委開_二于後_一、

1469 扣寫在右筆所

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存_レ、隨_レ而_レ同氏上總

介事病氣爲養生、國元江相越湯治仕、病氣快時分參府之

儀可奉伺旨當春申上_レ處、奉願_レ通御暇被下置_レ付、致

入湯段々養生仕_レ得共未致全快_レ、只今之_レ躰_二の_レ參府

仕_レ儀、此節奉伺_レ様_二の_レ難叶奉存_レ、猶以遂保養少々

氣分快罷成_レ節參府之儀奉伺_レ様仕度奉存_レ、此段爲可

申上呈使札外、恐惶、

宋カキ
享保七年
十月十一日

戸田山城守様

水野和泉守様

安藤對馬守様

人々

1470

全上

扣寫在江戸家老座

口上覺

同氏上總介事病氣爲養生、國元は相越湯治仕、病氣快時分參府之儀可奉伺旨當春申上外處、奉願外通御暇被下置難有奉存、致入湯段々養生仕外得者少々快方ニ者罷成外得共、今以時々眩暈差發外付、入湯及存之儘ニ者不罷成外、然者當分之躰ニ者參府之時節奉伺様ニ者難叶奉存外、猶以遂保養少々氣分快罷成外節參府之儀奉伺様仕度奉存、右之趣以使札申上外得共、猶又此段被聞召遂可然様御沙汰奉頼外、以上、

宋カキ
享保七年
十月十一日

御名

1471

全御譜中

享保七年壬寅九月十四日近衛禪閣基熙公號應國京都華第而薨、訃音達ニ于薩府大磯館、

1472

正文在文庫

十月七日の御日付にて御ふみ被下、京都にて禪閣様御事薨御遊ハされ

一位様殊外御愁傷あそハし外得共、いよ／＼御機嫌ハさハリもあらせられず外、御悔仰上られ外御事申上まいらせ外へハ、御満足ニ思しめし外御事に御座外、かしく、

宋カキ
享保七年

まつ平

上總介さま

岩 倉
梅 園
さくらい

1473

継豊公御譜中

扣正文在江戸家老座

臺灣朱一貴謀反、去年迄爲相治由申外、就夫段々風説多礎成事共難相知外故、靖臺實録と申書物、於福州相求持渡候、平均之次第此實録に相知外由候故差上申外、一太子之定頃年迄無之、萬人殊之外心遣仕外、皇帝氣に

入候者、第七之王子又者第十四之王子なと、取々沙汰有之、以後者可及亂と諸人危り由申り、

一 韃國之内西韃ハ大清に叛罷在り、中國之境はあみい國と申りて、大清に進貢仕り韃國有之り處、此國を西韃犯り儀有之、第十四之王子大將に打手被差向候得共、大寒國に官軍働罷不成、打負引返しり、重り官軍より致奏聞、再大勢相催打立り旨承り付、唐人に相尋り得者ケ様成儀者時々有之事りと爲申由申候、

右之通於大唐承及り風説區々有之、不慥儀得共此段申上り、以上、

朱力キ
享保七年 十月

右之通中奉書横折ニ相調、靖台實録相添、寅十月十二日佐久間九右衛門、戸田山城守様ニ致持參、御取次中嶋六郎左衛門ニ差上り處、御受取追而御挨拶可被成由被仰聞り、然處同十六日御留守居御用之由申來、木脇賀左衛門^(弟)出り處、右ニ付而之御奉書御取次ニ而御渡被成り事、

全上

正文在文庫

靖臺實録一冊被獻之り、遂披露候之處一段之御仕合り、

恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十月十五日

松平大隅守殿

戸田山城守
忠真判

1475

繼豊公御譜中

正文在文庫

御太刀一腰備前三郎國宗

樺山權左衛門^(父)

右嘉吉元年

將軍義教公御舍弟大覺寺義昭、隱謀之企致露顯、潜日州

福嶋に被落下居事達

台聽、誅戮之儀 忠國公に被仰遣、樺山美濃孝久其外數

輩福嶋に被差遣、於彼地義昭生害にり、依之從

義教公、爲御褒美各御感狀并御太刀被成下、孝久に奉御

感狀并備前三郎國宗之御太刀拜領被仰付り、其後永祿元

年 義久公長濱に御光儀之節、樺山安藝守幸久右御太刀

致進上置り、然共右由緒にり故、樺山家に致格護置り得

共、其詮及有之、爲差立什物之故此節本々之通被返下り

間、難有頂戴仕可致格護旨被仰渡り間、此段可被承置旨

將監殿御差圖にり、以上、

享保七年寅十月廿日

御記録奉行

(御用人) 村田九郎左衛門 ㊦

紐豊公御譜中

扣正文在江戸家老座

全上

正文在文庫

返く御表よりも御禮仰上られりよし、よろしくひ
ろういたしまいらせり、めてかしく、

十月五日之日付の御文下されり、

公方様益御機嫌よく御座被成、御めてたく覺しめしりよし、扱ハ御手まへ様御家督はしめて御歸國御尋として、
宿次御奉書を以、御肴一種御拜領被成難有覺しめしりよし、御禮の爲御使者差上被成りに付なを又御念入せられ
り御文のやう申上りへくり、めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

方

三室

豊岡

松平

大隅守様

御返事 人々御中

高瀬

外山

た澤

松平大隅守高七拾貳萬九千五百石餘之上ケ米、於大坂相
納可申旨、水野和泉守様に先比御届申上、被聞召置り旨
被仰渡り付、大坂に差置り役人共は右之通米相納可申旨
申越、大坂御藏御奉行に上納可仕旨申出り處、彼御方は
江戸より被仰渡置候者、大隅守高六拾萬五千石餘之上ケ
米相納申旨に被仰渡置り、此方より申出り高頭致過上り
間、御勘定御奉行様より仰渡無御座り得者、過上之分ハ
御請取難被成旨被仰聞候段、大坂に差置り役人共申越り、
此方高役之儀者前より琉球高相込、七拾貳萬九千五百
石餘に相掛り、猿樂配當米・築地金又者先年之砂揚金・
水道出金等迄高役仕來申り付、此度之上ケ米者猶以上納
仕筈と相心得、高頭を御届爲申上置事に御座り間、右惣
高頭に相掛ケ、上ケ米上納仕り様大坂御藏に被仰渡被下
度奉存り、以上、

朱カキ
享保七年

九月

松平大隅守内

(盛) 佐久間九右衛門 村

右書付九月廿九日御勘定御奉行大久保下野守様正佐久間九右衛
門差出り處、同晦日九右衛門被召呼、下野守様御逢被成此儀尤

之儀外、乍然此方_レ承_レ承_レ迄_ニ而_レ者難致候、水野和泉守殿此趣輕
く一通書付可差出外、下野守江申聞外得_レ者和泉守殿江申上外様
ニと申聞外旨をも申上可宜と被仰聞外付而、左之通和泉守様江
申上外事、

1478 扣正文在江戸家老座

松平大隅守領内琉球高相込惣高頭七拾貳萬九千五百餘之
御判物高_ニ而、前_ニく猿樂配當米先年之砂揚金又老築地
金其外水道出金等迄右高頭之高役仕來申外付、此節之上
ケ米弥其通相納可申旨、大久保下野守様江申上外處、前
々之趣を以、此御方様江相伺外ハ、御差圖可有之旨承
知仕外故此段申上外、前々之通高役被仰渡被下外様奉存
外、以上、

松平大隅守内

朱力年 享保七年 十月朔日

佐久間九右衛門

右水野和泉守様江九右衛門致持參、御取次中村紋左衛門ニ而
差出外處御請取被成外、追而御挨拶可被成由被仰聞外事、

扣正文在江戸家老座

覺

高七拾貳萬九千五百六拾三石六斗三升

此上ケ米三千六百四拾七石五斗當秋分

但百石以下端高之上ケ米相除申外、

右松平大隅守上米、於大坂今月中相納可申外、此段申
上外、以上、

松平大隅守内

朱力年 享保七年 九月 佐久間九右衛門

右御届書寅九月八日御用番水野和泉守様江佐久間九右衛門差
出外處、御用人中村紋左衛門ニ而御請取、委御承知被成外由
紋左衛門ニ而被仰聞外旨九右衛門申出外事、

1480 全上

扣正文在江戸家老座

松平大隅守高御判物御添目錄之表六拾萬五千八百六拾三
石六斗三升、外琉球國拾貳萬三千七百石、合七拾貳萬九
千五百石餘ニ而御座外、依之前_ニく高役ニ付、猿樂配當米
迄表右高ニ相掛上納仕、御當地御藏方御證文も七拾貳萬
九千五百石餘之惣高ニ相詰、一紙御證文被出來外間、大
坂於御藏方表右同斷之御證文相渡外様被仰越可被下外、
以上、

松平大隅守内

朱力年 享保七年 十月 佐久間九右衛門

右之御書付大久保下野守様江、佐久間九右衛門致持參差出外處
二明日御勘定所江可罷出旨被仰聞、於御役所御差圖可被成旨
承知仕外旨十月廿一日九右衛門申出候事、

繼豊公御譜中

正文在文庫

依禪閣薨去之事、吊書之趣丁寧之義不堪感謝外、此節除
服外故如此外也、

朱力キ

享保七年 上冬廿六

薩摩少將殿

(近衛家久)
(花押) No.4

繼豊公御譜中

正文在琉球國國司

琉球假屋守江

御領國中地方之御檢地有之候儀、及數十年候故、地面親
疎有之、及困窺百姓及在之付、今度御領國一統致御檢地、
地面平等ニ支配仕候様ニと被仰付外、依之琉球之儀及御
當地同前ニ御支配被仰付候條、此旨琉球江申越候様可申
渡外、以上、

但御支配之作法琉球人爲心得郡奉行より書付相渡外

間、是又可相違外、

朱力キ
享保七年 十月

(種子島久基)
彈正

全上

正文在琉球國國司

御檢地之次第

一田方壹步豐年之出來粗相例、貳部程相引、出來粗之員
數方近方者上田六上納ニ四作^(併之)作得、中途者上田五
上納ニ四五作得、遠方ハ上田半納相究、附粗何程と
田方之坪々ニ相記外、中田・下田・下々田之儀者、右
之格ニ準候、
一田方御竿之儀者、間竿を以畦步相糺、あせの畦步相除
反畦相究外、
一畠方之儀、豐年出來粟相例、貳部相引、近所上畠三五
上納、中途上畠三四上納、遠方上畠三々上納ニ相究、
附大豆何程と相記外、中畠・下畠・下々畠・山畑右之
格ニ準外、
一畠御竿、右同斷<sup>(但あせハ無之候
引除少汰無之候)</sup>

一古田畠并新仕明之田畠共ニ竿相改、表盛右之格式を以
相掛、增高御藏入ニ罷成御法ニ外、右算用方之儀前々

之同役共々書付置り、乍然御檢地之儀者致竿反畦相改、其所古田畠之表盛を致本ニ、尤隣外城之古田畠表盛表試、其所之榮勞にしたかひ、少々ツ、高之上ケ下ケ致考を以、高相居申候、

一私領之儀者、古田畠延畦地位増之增高者、御藏入ニ罷成り、新仕明田畠之儀者、領主に被下之り、

一古田畠損地之儀者、其所之古田畠増を以差引被仰付り、致不足り分者御物より被下之り、

一奉行壹手之人數之事、

筆者四人

蒔見役之者貳人

竿取役之者貳人

其所より嘜壹人

右同郡見廻壹人

右同庄屋壹人

右同功才貳人

右人數ニ右御檢地致り、門割之節者蒔見、竿取相除り、

一慶長年間御竿ニ被差渡候節者、竿頭拾四人、附役百六拾八人ニ右御檢地相濟、高相究り、

一慶長御竿ニ右者、琉球高及八萬三千石餘ニ候得共、寛

永御支配之節者、御檢地なしニ本高百石ニ付、高七石三斗六升五合壹才宛之盛増ニ右、御檢地なしニ當分之通高九萬八百石餘ニ右り、

一御檢地之儀者、田方刈取り節より毛上仕付前迄相勤り、一高千石之壹名、日數六拾日程ニ御檢地門割太鉢相濟り、平地難所之差別を以、日數之過不足有之事ニ候得共、太鉢右之考を以相濟申り、然者壹萬石之在所ハ日數六百日ニ相濟り、

右者御當地御檢地之次第可申上旨被仰渡り、先右格式ニ右者御座り得共、於諸所見合を以高相居申儀御座り、以上、

朱力年

享保七年

前十月十三日

郡奉行

1484

全上

全上

一筆令啓達り、御領國中地方御檢地之儀及數十年外故、地面親疎有之、今度御領國一統御檢地被仰付、平等致支配り様被仰出り、依之琉球之儀者御當地同前被仰付り、委細之儀者爰元在番に申渡り、此段

國王様は可被申上り、恐々謹言、

享保七年 十月十八日

種子嶋(久基)彈正

北谷王子
三司官

1485

繼豊公御譜中

寫正文在文庫

(職務奉行通懸)

昨日三宅彌一郎様も御用之儀ハ故、御城に可罷出之旨申來、今日四時參上仕付處、大清之官服・平服・甲鎧・兵杖等之儀、長崎に御吟味被成り筋、相違之儀有之様ニ被 思召ハ、依之表向ハ急度御頼被成、御尋被成度思召ニ有之外、然共右之書物類押形等表有之、御當地ニ有相濟可申事ニハ、相尋可申之由御小姓衆被仰聞ハ由ニ有、右之趣四五ヶ條頭書ニ御尋被成り、御返答申上ハ右者、右通之書物押形終ニ披見不仕ハ、國許ニ勤番仕ハ琉球人共、本唐に爲參者見覺又者書物等表所持仕候哉、此儀表難計ハ得共、菟角被 仰付ハ、隨分於國許吟味可仕旨申上ハ、左ハ、追表向より御頼被成ニ有可有之旨御挨拶有之外、左ハ追付田沼專左衛門御出、毎度御用之儀ニ付罷出太儀有之由御挨拶被成退出仕ハ、右之段爲御心得申上ハ、以上、

1487

繼豊公御譜中

正文在文庫

享保七年 十月廿八日

佐久間九右衛門(盛)

1486

正文在文庫

一 清朝衣服并諸道具之圖ニ致しハ書物者無之事ニハ故、大清會典ニ考大概ハ相見えハ得共、衣服などハ繪圖無之故委ク難相知ハ、日本板行之書、訓蒙圖彙などの様成書有之外ハ、才覺成可申哉之事、

一 右之通之書無之外ハ、清朝衣服之製法、官位に隨ハそれノ品の可有之外、此儀長崎にて承合ハ得共、商人着用之衣服と、官人之衣服とさのミ替り無之様ニ申事にて、しかと不相知り、此儀北京ニ有及見ハ通、繪圖ニ調候事、

一 甲冑・鉾・太刀などの製法等、甲冑着しハ躰及見ハ、繪圖ニ調候事、

一 官服之外平生之衣服等ハ品カハリハ、是又繪圖に調候事、

享保七年

在日裏
松平大隅守家來ハ

1487

繼豊公御譜中

正文在文庫

戸田山城守様被相達儀有之之間、今日八ツ時過壹人可罷出旨、御用人中より手紙申來り付、罷出り處、御用人中嶋六郎左衛門より別紙御書付壹通御渡被成り、左より右御書付之趣御吟味被成、右通之書物等有之りハ、可被差出り、其外琉球人へも御聞合、相知り儀ハ委細可被仰上り、且又初之ヶ條之内、書物ハ無之り哉と有之り、此儀爰許御屋敷より御吟味被成りハ、可相知哉、私承及り儀共無之り哉之旨六郎左衛門申り付、平生私共取扱不申儀より故、究る之儀ハ存不申り得共、爰許於屋敷ハ大形相知申間敷り、いづれ琉球人ハ承合可申儀よりハ、國許より吟味仕節ニ無御座りハ何分にも難申上存り由申達りへハ、則其趣山城守様被聞召上、菟角琉人不承り罷成間敷儀より間、弥御國元へ申越御吟味之上、何分にも申出り筋に可仕旨、是又六郎左衛門にて被仰聞り、尤御渡被成り御書付差上申り、以上、

朱力キ
享保七年 十一月二日
(伊集院久矩)
藏人様
木協賀左衛門(祐 盛)

全御譜中
正文在文庫

御札令披見り、

公方様御機嫌被相伺之り、益御勇健御儀之間可御心易り、隨り小熬海鼠一箱被獻之り、各申談遂披露候之處一段之御仕合り、恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十一月三日

松平大隅守殿

安藤對馬守
重行判

全上

依禪閣薨去之事、爲弔慰使札之趣不堪感謝り、今日除服り故呈一翰り也、
本マ、

朱力キ
享保七年 仲冬五

松平大隅守殿

(近衛家照)
(花押) No.3

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤り、將又參勤時分儀以使者被相伺之り、及上聞り處、今度如御定來年三月中可致參府由被仰出り條可被存其趣り、恐々謹言、

朱カキ
享保七年
十一月五日

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

戸田山城守
忠眞判

松平大隅守殿

継豊公御譜中

正文在文庫

なをくめてたさ何もよく心得りて申せとの御事

御さり、かしく、

御文くたされり、まつく

公方様

一位様御機嫌よく御座被遊、めてたく思しめし被成りよし、さては

御てまへさま御家督初て御在國御尋として、宿次の奉書を以御看一種御拜領被成、まことにく御懇の御事、有かたく思しめしなされりよし、御禮として御使者差上られりよし、御念いらせられり御文のやうひろういたしまいらせりへハ御満足ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ
享保七年

お

1492

まつたいら
御返事

大隅守さま
人々御中

いは倉
梅その
さくらい

継豊公御譜中

正文在文庫

十月七日の御日付にて御ふみ被下、京都にて禪閣様御事
薨御遊ハされ

一位様殊外御愁傷あそハしり得共、いよく御機嫌に御さハリもあらせられすり、御悔仰上られり御事申上まいらせりへハ、御満足ニ思しめしり、かしく、

朱カキ
享保七年

まつ平

大すみの守さま

岩 倉
梅 園
さくらい

1493

全上

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗者但京升也

イン

内六百拾八石五斗者 琉球國高之分

右是者今度御上ケ米高七拾貳萬九千五百石餘ニ付、但壹

萬石ニ百石宛之積、都合米高七千貳百九拾五石當寅年半

分之積、先納三千六百四拾三石五斗殘^{本マ}、四石丑薩摩國

米請取御藏^ハ納申所如件、

享保七壬寅年十一月七日

(大坂御藏奉行) 朝夷 伊 織 團

(同) 筒井 主 税 團

(同) 加藤安左衛門 團

(同) 朝倉新右衛門 團

松平大隅守殿

役人中

1494 全上

御札令披見^ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^ハ、將又同氏上總

介參府之儀可被相伺之處、氣分未致全快付^ル參府難成^ル、

遂保養少^ク快^ハ者可被伺之旨令承知^ル、依之被差越使者

^ハ紙面之趣、各一覽之事^ハ、恐^ク謹言、

朱カキ 享保七年

十一月十三日

松平大隅守殿

安藤對馬守

重行判

1495 吉貴公御譜中

享保七年壬寅九月九日

將軍吉宗公以^レ佳肴^{尺^十}及宿次奉書・驛路之證印、賜^ニ于繼

豐一、即日家臣步士輕卒等警之衛之發^ニ江都一、日夜不^レ休

經^ニ歷東海・山陽・西海之三驛一、十月五日到^ニ達麻城一、

是因^ニ先 躪一、賀^下去載繼豐家督之後始賜^レ告歸^ト國、而尋^ニ

問安否^一也、同日爲^ニ恩賀之謝使^一令^下島津又吉久儔發^ニ廳

府^一赴^ニ江都^上、是故吉貴亦使^ニ物頭山岡權太左衛門久房^一、

爲^レ謝^ニ繼豐之拜賜^一、副^ニ久儔^一共發^ニ廳府^一、經^ニ九州之驛

路^一赴^ニ江都^一、十一月七日著^ニ江都芝邸^一、同月九日久房

候^ニ執政戶田山城守忠眞・安藤對馬守重行・水野和泉守忠

之、副執政大久保長門守教重・大久保佐渡守常春・石川

近江守總茂等之第一、勤^ニ吉貴之謝使^一、呈^ニ捧書翰於安藤

重行^一、同月十八日徵^ニ久房於重行之第一^一、授^下報^ニ吉貴^一之

奉書^上、見^ニ于左^一、十二月十五日久房與^ニ久儔^一使節事畢

發^ニ芝邸^一、翌年癸卯正月二十八日還^ニ于薩府^一、

1496 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見^ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤^{（總）}、將又同氏大隅守家督以後歸國付^{（巻）}の御尋之趣、以宿次呈奉書御看拜領、難有由得其意^{（巻）}、依之爲御禮被差越使者^{（巻）}、紙面之通各申談及 上聞^{（巻）}、恐^{（巻）}、謹言、

朱カキ
享保七年

十一月十八日

安藤對馬守

重行判

松平上總介殿
（爲津吉貴）

全上

なをくおもて向よりも御禮仰上られ^{（巻）}へとも、なを仰上られ^{（巻）}由御ふみのやう何もよろしく申上^{（巻）}へく^{（巻）}、めてたくかしく、

御ふミ下され^{（巻）}、

公方様益御機嫌よく御座被成^{（巻）}御事、御めて度思はしめし^{（巻）}由、しかれハ御同氏大すみの守殿御家督はしめて御歸國御尋として、宿次の御奉書にて御肴一種御拜領被成、誠にかたしけなく覺しめし^{（巻）}由、御禮として御使者御上被成^{（巻）}、仰上られ^{（巻）}由御ふみのやう何もよろしく申上^{（巻）}へく^{（巻）}、めてたくかしく、

朱カキ
享保七年

方

三室
豊岡
高瀬
外山
た澤

松平^{（吉貴）}御返事

上總介様

人々御中

全上

なをくめてたく何もよく御心得申せとの御事ニ御さ^{（巻）}、かしく、

文くたされ^{（巻）}、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成^{（巻）}よし、さては御同氏大隅守殿御家督はしめて御在國なされ^{（巻）}、御てまへさまも有かたく思しめしなされ^{（巻）}よし、御禮として御使者差あけられ^{（巻）}よし御念いらせられ^{（巻）}、御ふみのやうひろういたしまいらせ^{（巻）}へハ御満足と思しめし^{（巻）}、めてかしく、

朱カキ
享保七年

いわ倉

方

まつたいら 御返事 梅その
上總介さま さくらい
人々御中

全上

なをく萬々年も御機けんよくならせられ御様こ思
しめし、何もよく申せとてけ、かしく、
文くたされけ、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御めてたくけ、さては
近衛太閤様御機けんよく御座被遊、御かさりおろさせら
れけ御事け、御めてたく思しめし被成けよし御悦仰あけ
られ、御ふみのやうひろういたしまいらせけへハ、御満
足こ思しめしけ、めてかしく、

朱カキ
享保七年

いは倉
梅その
さくらい
まつたいら
上總介さま
人々御中

継豊公御譜中
正文在文庫

御札令披見け、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又家督以後
歸國無吳在之け哉、御尋之趣以宿次奉書相達、御着拜領
難有由得其意外、依之爲御禮以鳴津(久壽)又吉御樽看被獻之け、
遂披露け處

御前に被召出之、入念け段御喜色之御事け、恐々謹言、

朱カキ
享保七年 十一月十八日

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

戸田山城守
忠眞判

松平大隅守殿

継豊公御譜中
正文在文庫

御札令披閱け、御手前今度家督已後歸國、御懇之御尋宿
次以奉書御着拜領、忝之旨依之入念け段欣然之至存け、
恐々謹言、

朱カキ
享保七年 十一月廿三日

尾張中納言
繼友判

薩摩少將殿
御報

1502

全上

今度爲歸國御尋、以宿次奉書御看拜領之玆重存外、仍之御念入預示誨欣然之至外、恐々謹言、

朱力キ
享保七年

十一月廿四日

水戸宰相

宗堯判

松平大隅守殿

御報

也、

今度願王院歸寺、頃日出京、其邊愈平安之由玆重思給外、殊一種贈與之、每事丁寧之段満足不淺外、仍呈一簡外也、

朱力キ
享保七年 季冬二

(花押 No.4)

薩摩少將殿

1503

全上

貴札入御門主御披見外、弥御堅固之由玆重思召外、御門主御安泰之御事外、然者就御家督初の歸國、以宿次御奉書一種御拜領、依之爲御禮使者被差進外付、御紙面之趣入御念外儀思召外、此段宜申進之御事御座外、恐惶謹言、

朱力キ
享保七年

十一月廿六日

吉川式部卿

盛也判

松平大隅守様

1504

継豊公御譜中

正文在文庫

追申、(吉豊)上總介・おすまよりも珍物賜之、令滿悦外、

宜在傳達外、且又先月ハ以愚筆申候事、猶々頼入外

1505

継豊公御譜中

正文在寺社奉行所

(花押 No.5)

國中^(藤津吉野)之僧侶道學之心懸薄相成付外、先年

總州様以御書付寺院に被 仰聞置外、至當代弥其旨不致

忘却、修學勤行無懈怠、不亂宗門之法式、道儀不衰様可

致接待得旨、諸宗之門首に可申渡也、

享保七年十二月九日

在包紙
御袖判

寺社奉行に

1506

継豊公御譜中

正文在飯隈山蓮光院

薩摩・大隅・日州諸縣郡年行事職之儀、聖護院御門跡以

御許容被仰付、御書物頂戴之上者、大峯修行無懈怠相勤、當家之祈念可抽誠精者也、仍狀如件、

享保七年十二月九日 少將繼豐御判

飯隈山蓮光院

在包紙

飯隈山蓮光院

少將繼豐

1507

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨_レ^レ蜜柑二箱、

炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處、一段之御仕合候、

恐_レ謹言、

朱力キ

享保七年

十二月十二日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1508

吉貴公御譜中

正文在文庫

雖嚴寒之節愈平安之由傳承珍重々々、此邊無_レ吳事外、然

者故禪閣在世之間荷恩之事、向後父公へ可贈給之旨、少

將許申試外處、領掌之書翰到來、誠舊好之印本望此事外、仍呈一簡外、謹言、

朱力キ
享保七年 季冬十三

薩摩中將殿

(花押 No.4)

1509

吉貴公御譜中

扣寫在右筆所

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、將又同氏上總(吉)

介氣分未致全快外故、參府難叶外付保養仕、少々快罷成外

節參府之時分奉伺外様仕度奉存外旨申上外處、御奉書之

趣致承知外、此段爲可申上如斯御座候、恐惶、

朱力キ

享保七年

十二月十八日

戸田山城守様

水野和泉守様

安藤對馬守様

人々御中

1510

全御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌被相同之外、益御勇健御儀外間可御心安外、
隨而賜一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、
恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十二月十八日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1511 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 高
聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十二月十八日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1512 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌以使者被相同之外、益御勇健御儀外間可御

心安外、隨而琉球袖十端并鏗節一箱被獻之外、各申談遂
披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十二月十八日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1513 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 高
聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保七年 十二月十八日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1514 繼豊公御譜中

寫正文在文庫

知行目錄

高拾九石

恒吉大谷村之内

名寄帳別冊有

右老大礪天神之儀

寛陽院様御安置ニの賑有之ハ處、中比社司難續、社邊不

樂ハ付、往々祭祀等爲相續、從

總州様天神講被仰付、講銀之屯有之、其上、從

太守様 總州様 お須磨様被遊御寄進、不足之分老講人

數より出銀被仰付、此節右高御買入、帖佐組代官支配ニ

の所務米五石四斗六升四合年々物奉行より社司に相渡、

永々無懈怠祭禮相勤、社司相續ハ様所被仰付也、依之講

老此節被差止ハ、向後爲無紛講人數名書別冊相認渡置ハ、

仍如件、

享保七年寅十二月廿一日

名越 右膳 恒渡判

種子嶋 彈正 久基判

北郷作左衛門 久嘉判

鳴津 内膳 久兵判

鳴津 内記 久貫判

寺社奉行

1515 繼豊公御譜中

寫正文在文庫

寫

貴寺爲鳴津家宿坊、中納言家久代令興隆、寺領被寄附訖、

今度少將繼豊任先判之旨被成寄附之間、御祈禱先祖之日

牌・寺中修造等無怠慢可被執行ハ、仍狀如件、

享保七年寅十二月廿五日

名越 右膳 恒渡判

種子嶋 彈正 久基判

北郷作左衛門 久嘉判

鳴津 内膳 久兵判

鳴津 中務 久貫判

高野山蓮金院

1516 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺ハ、委曲水野和泉守可

述ハ也、

朱カキ

享保七年

十二月廿七日

吉宗公 墨印

薩摩少將殿

全上

御札令披見ハ、

(吉系)

芳姫様御逝去之段被承之、被絶言語之由得其意ハ、

公方様御機嫌被相伺之ハ、御安全之御儀ハ間可御心易ハ、

紙面之趣各申談及 上聞候、恐々謹言、

朱力年
享保七年

十二月廿八日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

全上

覺

一

鳴津圖書

右節旬日、月並御祝儀罷出ハ節、大御目附之引次、於

御座之間 御目見被仰付之旨被 仰出置ハ、右ニ付ル

御記録奉行より別紙を以申出趣有之、達 貴聞ハ處圖

書家之儀ハ譯ス有之、其上先圖書事御兄弟之御續を以

御禮席等之儀

總州様思召を以、若御年寄之上ニ被仰付置ハ、當圖書

事ハ先圖書ニ譯ス相替ハ、然共前ニより御取分ケ有

一

相良大藏

之事ハ故、大御目附下之御役圖書家ニ者不被仰付事

ハ、右之譯故此節 思召を以、御座之間ニ有之御禮席

者、大御目附引次ニ被仰付置ハ、依之表向ニ有之何そ屹

立ハ節、御禮席等之儀者其身御禮之人次ニ可被仰付ハ

間、表立ハ節者右之通可相心得ハ、

右家督之内大御目附格ニ被仰付ハ、大御目附以上之御

役被仰付ハ者者、寄合並又者其下之家ニ有之寄合可被

仰付旨

總州様御家督之内、御格式被仰出置ハ、然者大藏大御

目附格ニ被仰付置ハ、右之通格と被仰付ハる者、大御

目附同前之御格式ニ有之哉之旨、別紙を以御記録奉行よ

り得御差圖ハ趣達 貴聞ハ處、大藏事家督之内右之通

被仰付ハ付ル者、平岡八郎大夫次ニ被仰付ハ答ハ、大御目

附格と申ハ者、御側ニ相動ハ譯を以格と被 仰出事ハ、

何そ大御目附ニ相替儀者無之ハ、右通格と申儀紛數ハ

故、此節二階堂舍人事御側ニ相動ハへ共、大御目附ニ

被仰付格と申事被相除ハ、右之次第ニ得者、相良源

大夫事寄合ニ有之平岡八郎大夫次ニ被仰付ハ間、向後右

之通可相心得ハ、

右兩條達 貴聞外處、右之通被 仰出外間、間違無
之樣可記置外、以上、

朱力キ
享保七年 十二月廿八日

(名越恒渡)
右膳
(馬津久當)
將監

(表紙)

吉貴公	享保八年
繼豐公	
追舊記雜錄	卷六十

繼豐公御譜中

享保八年癸卯正月三日繼豐發_二魔府城_一述_二職于江都_一、家老島津内膳久兵・名越右膳恒渡、側用人伊集院權右衛門久盛・近習役及旅用人山澤十太夫盛香等屬_二從駕_一、此日止_二宿苗代川_一、同四日向田、同八日出水、同十一日發_二出水_一取_二路於九州_一、同二十二日著_二豐前大里_一、時雖_二吾船既出_一薩國_一未到_二此港_一、是故同二十三日到_二長州下之關_一、自_二是歷_一山陽道二月十一日入_二攝州大坂旅亭_一、同十四日到_二枚方_一溯_二流著_一城州伏見旅亭、同十七日出_二伏見_一經_二過東海驛路_一、三月四日入_二江都芝邸_一、同月五日繼豐詔_二

執政各位_二達_一述職事、是六日

將軍家使_二執政安藤對馬守重行來_一于我櫻田之第_一勞_中繼豐之遠來_上、

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力_中

享保八年 正月十一日

安藤對馬守

重行判

水野和泉守

忠之判

戸田山城守

忠真判

(島津繼豐)
松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力_中

享保八年 正月十一日

安藤對馬守

重行判

1524

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤候、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 二月十八日

安藤對馬守

重行判

松平大隅守殿

1525

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 二月廿五日

安藤對馬守

重行判

松平大隅守殿

1522

繼豊公御譜中

正文在文庫

(為津吉貴)
松平上總介殿

水野和泉守

忠之判

戸田山城守

忠眞判

縉紳全書二冊・中樞全書一冊・輔政要覽一冊被獻之、
遂披露候之處御喜色之御事外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 二月三日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

1523

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様益御機嫌能被成御座、年始御規式可相濟と目出度

被存由得其意外、依之御樽肴被獻之外、各申談遂披露外

處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 二月十二日

安藤對馬守

重行判

松平大隅守殿

1526

繼豊公御譜中

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗者、但京升也、

右是者當卯年御上ケ米壹萬石ニ百石宛、琉球國共高七拾貳萬九千五百石餘ニ付七千貳百九拾五石之内當卯春半分之積書面之通去寅薩摩米請取御藏ニ納申所如件、

享保八癸卯年三月四日

(天坂御藏奉行) 朝夷 伊織團

(同) 筒井 主税團

(同) 加藤安左衛門團

(同) 朝倉新右衛門團

松平大隅守殿

役人中

全上

寫正文在文庫

覺

慶長金并新金共ニ小判之内三分迄之切レ有之、金目三厘迄輕キ分壹判判及疵有之、金目少々輕クハ共、無滯通用可致旨去ル丑年相觸ハ處、通用滯ハ由相聞得ハ、依之自今切レ疵大小ニ無構致通用、金目之儀者只今迄之通三厘以上輕キ分者直シ金ニ仕ヘシ、諸國在ク御料・私領共ニ右之段相心得、諸商賣物代金・爲替金等無滯取引仕ヘシ、

若滯所々有之ハ者可訴出、急度越度可申付ハ、以上、

朱力キ 享保八年 卯三月

此御書付之趣可相達旨 水野和泉守殿被仰聞ハ間寫相廻(忠之)ハ、順達留より内藤日向守方ハ可被相返ハ、以上、

三月五日 大目附

(島津吉忠) 松平陸奥守殿奉

御名

(久留米誠志) 有馬玄蕃頭殿奉

御連名餘者略ス

右留守居

(朱) 「右御廻狀并御書寄通有馬玄蕃頭様衆より三月六日次來ハ由ニ而寫差越、本書ハ京極寺岐守様衆 江次渡ハ旨、岩山半兵衛申出候事」

繼豊公御譜中

正文在文庫

去年御暇之節被差出ハ當分養子願書致返進之ハ、以上、

朱力キ 享保八年 三月六日

(忠之) 水野和泉守

松平大隅守様

全上
寫正文在文庫

(01)

覺

一大隅守儀末男子無御座座、
一佐土原之儀嶋津淡路守祖嶋津右馬頭以久と申者に慶長八年拜領被仰付、至當淡路守領來申座、分地と申座の者無御座座、以上、

松平大隅守内

朱カキ
享保八年 三月

木脇賀左衛門全祐 感

右者三月八日林大内記様御家來田中作太夫より此御方御留守居に手紙を以、大隅守様御男子様有之信 等に哉承度外、將又嶋津淡路守様御分地雅 久の申座に哉承度外、御用之儀に付相尋申座、早々御知せ可被成旨申越座に付、右之通書付木脇賀左衛門同夜中林様に罷出、田中作太夫に、取合、右御書付相渡外處、彼御方に表扣有之座外、御分地と者相見得不申外、乍然譯表有之由外得者自然間違外座者如何座に付故、相尋申外由段々申外座に付、左之趣口達座の申達外、左外座の大内記様被聞召達成程書付宜外、彼御方扣と致符合外、珍重外、明日御書付差

(02)

出書外故御急被成り、致太儀座由作太夫座の被仰聞外由賀左衛門申出外事、

但右書付ハ段々御由緒表有之、其旨ハ御記録奉行より書出外得共、御分地有無一通り之御尋と相見得外座に付、右之通書付岩山半兵衛座の淡路守殿座に表入御内見、思召寄無之座に付、右之通書付差出、左之趣ハ口達座の申達たる事外也、

賀左衛門より作太夫に口達之趣

佐土原之儀、初者嶋津家領分座の嶋津中務家久に遣置、家久子至豊久致傳領外處座、慶長五年豊久戰死之後庄田三太夫安 傳と申人座に押被仰付置外、然處大隅守祖修理太夫義久座に預地座に被仰付、嶋津淡路守祖嶋津右馬頭以久を押し遣置、慶長八年以久に彼地拜領被仰付、至當淡路守領來申外、淡路守家座に付、分地と申座の者無御座外、以上、

右之通書付、委細之御尋表外ハ、右書付之趣口達座の申可申達旨賀左衛門に申含口達座の申達候也、
但書付ハ不相渡外、

朱
右之通外得共口達座而者如何座に付間、委細之訳書付を以

申上置り方可宜重而申談、三月廿日書付を以申上り

嶋津淡路守に分地有無之儀先比御尋に付、乍早速荒増書付差上置り、淡路守家筋之儀者、當大隅守八代之祖

陸奥守貴久次弟嶋津右馬頭忠將家之二男家なる御座り、嫡家者此方に罷居り嶋津玄蕃と申者なる御座り、

淡路守居城佐土原城者、自前代嶋津家領内なる、慶長年間迄龍伯甥嶋津中務大輔豊久居城なる外處、關ヶ原

なる豊久戰死以後

權現様上意を以山口勘兵衛殿に庄田三太夫殿と申人被差下、暫御番手城なる御座り得共、豊久事奉對

權現様無逆心趣達

台聽、佐土原之儀、龍伯(義久)・家久より親類之内なる番手

可申付旨被仰付り故、慶長六年龍伯家中に罷居り從弟

嶋津右馬頭以久入道宗恕事、其節嫡子に家督相讓、致

隠居罷在外得共、龍伯并家久より申付り乍隱居二男

を召列佐土原城番相勤申り、其後龍伯且又家久より

宗恕佐土原拜領被仰付度旨願申上、從宗恕、御目見

之願申出外處、願相達、慶長八年十月宗恕に佐土原拜

領被仰付、御直參に被召成り、宗恕二男右馬頭忠興者、

淡路守曾祖父なる御座り、此等之段其節申上管之儀御座り處、急成御用故委細を不申上得り、乍此上年久事外間國本に申越、舊記等見合相替儀も御座りハ、重なる可申上り、被聞召置可被下り、以上、

朱カキ 享保八年 三月 松平大隅守内

木脇賀左衛門

右者佐土原分地有無之儀、林大内記様を三月八日御尋に付、一通之儀書付差出、右書付之荒増口達なる賀左

衛門より御取次に申達り得共、口達迄なる者如何外故、

委細之譯書付差出置り方可宜と重なる内膳・藏人・右膳

其外申談、右之通書付、三月廿日賀左衛門、林様に致

持參、用人田中作太夫に委細申達書付相渡り處、幸大

内記様・大學頭様一所に被成御座り付、御兩人に懸御

目外處、入御念儀思召り、爲致不圖御用表有之儀り得

者成程被聞召置り、尤御書付者被留置り由、作太夫を

以御挨拶被仰聞り旨賀左衛門申出り、

但作太夫より申り者、嶋津御家之御記録等 (編貴) 大玄院

様御代被差出置、年々虫干等仕置儀に、定り佐

土原之儀も其内可有之り、然共大分之御書付等

俄見分難成、先日御急用に付相尋爲被申儀に、

其節被書出外ニ付、翌日御用無滞相濟申外、且又
太守様御實子被遊御座外哉と御尋被申外、右兩條

御國持御大名様不殘御尋爲被申儀ハ乍勿論、此御
方様なと御氣之儀少も無御座由物語仕由、賀左衛
門申出外、

卯三月廿日

但 巡見 上使御返答書之趣を以右之通書付相調
外、

一 右段之次第御國本に及申越外處、於御國元及御記錄
奉行にしらへ被申渡、爰元調ニ相替儀無之外、乍然以
前之儀得と相考り得者、御分地之意味者有之外、然其
其趣重而申出不及、最前申出外通ニ可然と申談外
通、御家老中より返答申來外也、

1530

繼豊公御譜中

正文在文庫

種積穀一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐
謹言、

朱力キ

享保八年 三月九日

忠眞判

在口裏
松平大隅守殿
戸田山城守
忠眞

1531

繼豊公御譜中

三月十一日因ニ執政之奉書、翌十二日繼豊登レ營獻ニ上
御太刀一腰・白銀五十枚・白縮緬二十卷、於ニ黒書院ニ
拜ニ謁

大樹吉宗公ニ奉レ申ニ謝述職事、丹羽式部少輔倚氏奏ニ達
之、且因ニ先格ニ家老島津内膳久兵名越右膳恒渡亦各獻ニ
上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷、奉レ拜ニ謁
將軍家、松平伊豆守信祝奏ニ達之、

1532

繼豊公御譜中

正文在文庫

明十二日五半時登 城參勤之御禮可被申上候、以上、

朱力キ

享保八年 三月十一日

安藤對馬守

水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

1533 全上

家來二人

御目見被仰付外間、召連可被罷出外、以上、

1534 全上

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城外、以上、

朱カキ 享保八年 三月十四日

安藤對馬守

水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

1535 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

朱カキ 享保八年 三月十六日

水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

1536 繼豊公御譜中

今茲三月十七日因_二執政之奉書_一、繼豊代于筑後久留米城

主有馬玄蕃頭則維_一、勤_二増上寺鎮火之番_一、且九月十六日

奥州仙臺城主松平陸奥守吉村代_二于繼豊_一勤_二之_一、

1537 正文在文庫

増上寺火之番爲有馬玄蕃頭代被仰付外間、被得其意可有

勤仕外、以上、

朱カキ 享保八年 三月十七日

安藤對馬守

水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

1538 吉貴公御譜中

正文在文庫

教墨披閱、今度極位之事相聞被伸嘉詞、懇篤之至令満足

外、餘期後音外、謹言、

朱カキ 享保八年 季春廿八

采衝家久 (花押 No.4)

薩摩中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤、紙面之越各申

談及 上聞、恐、謹言、

朱力キ

享保八年

四月朔日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

継豊公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸熨斗一箱被獻之外、遂披露、處一段

之御仕合、恐、謹言、

朱力キ

享保八年

四月十六日

忠眞判

右口裏

戸田山城守

忠眞

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在多門院

此目錄同案継豊公御譜中ニ掲載セ置レ有之

知行目錄

高貳拾五斛

吉田宮之浦村之内

郡山郡山村之内

名寄帳別冊有

右者薩州郡山厚地村花尾權現者 御高祖忠久公御志願、

而被崇置、三拾六坊御建立被成、御尊敬之靈地ニ而、

三拾六坊共漸、致願轉候付

綱貴公御在世、右廢寺之内差立、寺號五箇寺、御再興可

被成旨被 仰出置、從

吉貴公御造營、右之通寺領被寄附之訖、全可有所務、

仍如件、

享保八年卯四月十六日

種 彈 正 久基判

北 作左衛門 久嘉判

嶋 中務 久貫判

多門院

継豊公御譜中

正文在文庫

高三拾石

右老國分宮内彌勒院

吉貴様御再興致常法花讀誦外、依之

御前様依御志願、今度右高御買入御寄附被成、帖佐與御

高加置、當年より所務無出米、眞米拾壹石九斗四升年々

代官致支配可相渡之條、永々無怠慢如法可有勤行者也、

仍如件、

享保八年卯四月十六日

種子嶋 彈正 久基判

北郷作左衛門 久嘉判

島津 中務 久貫判

正八幡宮別當

彌勒院法印御房

1543 繼豐公御譜中

嚮是正徳五年乙未六月二十六日、家君吉貴欲_(毛)仇_(利)儷松平_(毛)吉之_(大)

民部太輔吉元領國防長門國在城于萩之令慶於嗣嫡繼豐、稟_(三)幕府_(一)

蒙_(二)允容_(一)、因今茲享保八年癸卯四月二十一日整_(三)婚儀於

芝邸_(一)、故受_(三)執政之奉書_(一)、繼豐同月二十八日登_(レ)營拜_(二)

謁

大樹吉宗公_(一)、奉_(レ)禮_(三)謝婚姻之儀_(一)、

1544 寫正文在文庫

一 四月九日吉日_(二)付_(レ)有_(一)、芝

御前様御道具松平民部太輔様御方より、御長持等少々

被差遣_(レ)事、

一 四月廿一日今日已刻芝

御前様松平民部太輔御方御興入、前以爲御迎柳生頼負様嶋津忠但馬守殿、民部太輔様御方は御越被成、御興入之刻於

御玄喚罷出、御貝桶彼御方御家老山内縫殿より伊集院久延

藏人殿、御興老六戸美濃より嶋津内膳殿御請取渡有之、(久延)

直ニ與御玄喚より被遊御入_(レ)、松平越前守様・松平越中守様其外御一門様御心安御方多人數被成御見舞候、(忠)

民部太輔様御方より爲御見送毛利但馬守様・本多兵庫頭様御出、暫被成御座_(レ)御立被成_(レ)、今日風靜天氣

好御婚禮御規式首尾克相調_(レ)外事、

一 四月廿三日 太守様御夫婦様爲三ツ目御祝、民部太輔

様御方は御越被遊、御祝首尾能相濟、

太守様は從民部太輔様御腰物大小被進之、御供之御家

老内膳殿・藏人殿ニも御腰物一腰充被遣_(レ)外事、

一四月廿五日御婚禮五ツ目爲御祝、民部太輔様御夫婦様芝御屋敷に被仰入、御同道之御大名様方數輩且又爲御取持御一門様方御心安御方數輩、御勝手手に御見廻被成、御囃子三番被仰付、御祝首尾能相濟外、
太守様に民部太輔様より御腰物一腰御持參ニ被進之
外事、

全上

寫正文在文庫

縮緬十卷

但 先格御時服二十献上仕外、

(朱)「本行張紙」右之通献上仕、婚姻之御禮申上度奉存外、御老女様方に
此通可被差上候、但白縮緬白紗纏之内

表白銀三枚差贈申度奉存外、以上、

松平大隅守内

(朱)「享保八年」四月廿二日 佐久間九右衛門(盛村)

(朱)「一女中兼五被贈物ニ不及候」
一白銀三枚充

三室殿

豐岡殿

高瀬殿

外山殿

一同二枚充

田澤殿

御表御使衆三人

以上

四月

繼豊公御譜中

正文在文庫

明廿八日五時登 城婚姻之御禮可被申上外、以上、

朱カキ 享保八年 四月廿七日

安藤對馬守

水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀帷子單物到來歡覺候、委曲安藤對馬守可述
外也、

朱カキ 享保八年 五月三日



薩摩少將殿

1548 吉貴公御譜中

正文在彌勒院

今度彌勒院就御再興、不斷護摩致執行候故、從

(吉貴)

總州様右護摩斷絶爲無之、銀六貫八百三匁程表方に被出

置之、右之利分一ヶ年銀八百拾六匁四分宛爲護摩料被遊御寄進候、年々表方より可相渡外條、御長久之護摩可致不斷執行外、仍如件、

享保八年卯五月三日

(義四) 右京 久守判

(比志島) 隼人 範房判

正八幡宮別當

彌勒院法印御房

1549 全上

正文在彌勒院

覺

今度彌勒院就御造立、不斷護摩致執行筈外、依之從

總州様護摩料銀一ヶ年八百拾六匁四分宛被遊御寄進

付、御下屋敷御方御銀貳拾貫四百拾匁、表方御借入に被

出外段(雜惣)太守様被聞召上

總州様思召を以御寄進之御事外故、永々護摩料相續外様

こと被 思召上外付、利足被相重壹割利に表方御借入に

被仰付之旨被 仰出外付、利銀之内より一ヶ年八百拾六

匁四分ツ、表方に差分置、銀高六貫八百三匁程に及外節、

元銀貳拾貫四百拾匁ハ御下屋敷御方に致返上、其以後若

右六貫八百三匁程壹割利付に永々表方に御借入被仰付

置、利銀を以年々護摩料に相渡、右銀高に及迄ハ貳拾貫

四百匁利銀之内を以、壹ヶ年八百拾六匁四分宛可相渡

旨被 仰出外條、此旨至後年紛爲無之如件、

享保八年卯五月三日

種 彈 正 久基判

北 作左衛門 久嘉判

正八幡宮別當

彌勒院法印御房

1550

全御譜中

正文在文庫

なをく御てまへさまこも御ふしの御事、めて度思

しめしり、何もよく申せとの御事御さり、かしく、
文くたされり、土用中ことの外暑氣ニ御座り得共、

一位様御機嫌よく御座被遊、御障もあらせられりハす、
御心易思しめし被成りよし、土用中御機嫌御伺御座りて
御目録の通

一位様へ御あけなされ、則披露いたしまいらせりへハ、
幾萬く年と御満足ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ
享保八年

お

いは倉

まつたいら

上總介さま

人々御中

梅その
さくらい

1551 継豊公御譜中

享保八年五月十九日繼豊毎ニ述職ニ從ニ先蹤一獻ニ上龍蹄ニ

匹子

大樹吉宗公、

1552 正文在文庫

今朝御馬ニ疋被獻之り、遂披露り處一段之御仕合り、恐
く謹言、

朱カキ
享保八年 五月十九日

重行判

在口裏
松平大隅守殿

安藤對馬守
重行

1553 全御譜中

正文在文庫

御修復有之付る、明廿八日、來月朔日例月之御禮無之り
間不及登 城り、以上、

朱カキ
享保八年 五月廿七日

松平左近將監
(重行)

安藤對馬守
(忠之)

水野和泉守

松平大隅守殿

1554 継豊公御譜中

寫正文在文庫

私婚禮相整り付、妻より

公方様は御機嫌窺獻上物仕り儀、同名上總介妻より御老
(音貴)

女衆迄願申上り處、願之通御機嫌同獻上物等仕候様御老
女衆より被仰聞、今日獻上物仕難有奉存り、右之御禮以

使者申上外、以上、

〔朱〕「享保八年」六月七日

〔右之通書付佐久間九右衛門御使者被仰付、享保八年卯六月七日御用番水野和泉守様江罷出、御用人松之尾源五右衛門江御

口上之趣申達右書付相渡外處、御禮一通り之儀外間、後刻

可申聞由申外而、書付請取置外通九右衛門申出外、中奉書切

紙相調也」

1555 繼豊公御譜中

正文在文庫

端午之 御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可

被差出外、以上、

〔朱カキ〕享保八年 六月廿四日

安藤對馬守

松平大隅守殿

1556 白木御文書五番箱中六十

從 公義薩州牧場其外御尋ニ付御答被仰出候扣寫

御記録所

右蓋紙ニアリ

一薩州出産之馬ハ、何れ及牧立之様ニ傳承外、弥其通外

哉之事、

一獻上之御馬其外薩州家中之馬を見及外にも、長ケ能相

見得外、總州佐倉・小金牧駒年々出外得共、小長成馬

多有之外、其上場所相應よりハ駒數及すくなく可存外

事、

〔朱〕「押札ニ而牧之内ニ山其外けんを成川なと之有之候哉、惣鉢地ハ石地之方ニ

一薩州之牧者いか様ニ外哉、父馬・母馬大長成を揃外様

ニ致事外哉、惣の牧場扱様承度外事、

一惣の薩州牧場之廣狭、父馬・母馬の數等は又承度外事、

但 牧場一所ニ駒何疋程ツ、出申外哉、

總州之牧場廣キ牧ハ豎三里はかり横二里ほとも有之

由、狹牧ニ及大抵一里四方程者在之由、いつれ及平

原之所ニ山なとハ曾無之由、右場廣キ牧ニ及一ケ

年駒廿疋ほとならずハ出不申由、惣數ニ百二十疋

ほとならずハ出不申由、其内長ケ三寸計成ハ稀ニ外、

多分ハ乘馬ニ成成かね、郷中ニ遺ヒ馬ニ百姓共持外

由承外事、

〔朱〕「右貳通之御書付卯六月三日、三宅彌一郎様御宅江佐久間九

右衛門被召呼、口上ニ而爲申聞外様ニと被仰付外得共、爲

覺相渡外由被仰聞外付、右御書付致御借用外ニ而、九右衛門

カ差出外付、寫被差越外、右ニ付御答之趣ニ通此次ニ記之」

一薩州出産之馬者、何れも牧立之様爲被聞召由、御本文

ニ相見得申外、弥其通ニ者外得共、地生立之馬も問、

御座外、尤野駒ニ表小荷駄ニ用申外も御座外、

一獻上御馬其外薩州家中之馬、長ケ能相見得外段御本文

ニ相見得申外得共、馬長ケ之儀者、皆共長能キと申、

而者無之、揃不申外、

一薩州之牧者馬を吟味仕、就中毛疵等ニ入念召入申事御

座外、母馬ニ者構不申外、

一牧場之儀者、所ニより同様ニ者無之外得共、牧内ニ山

野・林・川有之所を相圍、高サ九尺程之土手を築、不

飛越様ニ仕置申外、夏ハ山之頂ニ涼、林之日蔭ニ養入、

冬雪雨之節ハ林之内ニ養入申由、林無之平野之大牧ハ、

茅葺之無壁柱迄之家所ニ作置外得共、寒暑防キ宜

と申事御座外、牧内ニ駒走りと申外、七八町程之平

野ハかならず御座外敷能キと申傳外、惣而牧之儀者、

草立能所、所々ニ水出外所有之場所宜、石場有之外所

者馬之爪能有之外と申事御座外、

一父馬ハ壹疋ニ母馬十五六疋拾計も相圍罷居外を、一

立所之馬と薩州ニ者申候、

一都而薩州牧場之廣狹・父馬・母馬之數之御尋之事、牧

數者十八九ヶ所御座外、其内大牧ハ隅州福山と申所ニ

而御座外、其外ハ小牧ニ而御座外、福山牧大抵十三里

餘之廻ニ而、惣馬數大抵千七八百も罷居可申哉、父馬

百疋餘も罷居可申哉、例年八月貳歳之駒百計も取申事

御座外、所之小牧取駒之儀者四月も取、又者八月取申

所も御座外、小牧之取駒貳百餘も可有御座哉、都合之

馬數者、例年三百餘も可有御座外、尤年ニより増減御

座外、

右領國牧立之様大抵を申上外、以上、

松平大隅守内

六月

佐久間九右衛門(盛村)

1557

覺(本)御書ニ相添被差出候

薩州

一吉野

薩州蒲生

一青色野

隅州鹿屋

一高牧野

薩州

一穎娃野

薩州

一下瓶野

薩州

一比志嶋野

隅州曾於郡

一春山野

隅州

一末吉野

薩州穎娃

一唐松野

同願上瓶

一市山野

薩州吉田

一高牧野

隅州

一福山野

隅州

一佐多野

薩州加世田

一野間野

同願上瓶

一瀬崎野(薩州)

薩州 薩州高江 一市來野
一長嶋野 一寄田野

同國 一伊作野

以上

六月

(未) 「右貳通之書付卯六月五日九右衛門 御城江致持參、彌一郎
様江差出置外旨、坂元覺左衛門便江戸申來外事」

右者享保八年卯六月從 公義被仰渡外付御答被仰出外、
扣壹通明和二年酉三月十四日、小松式部殿方被成御渡、
後年爲見合御記錄所江寫留置候様ニと吉田用右衛門致承
知之書留置外也、

右一冊ニテアリ

1558

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前
御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面趣各申談及 高聞
外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 六月廿九日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、
隨而鯉節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合
外、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 七月朔日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1560

繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉
球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐
々謹言、

朱力キ

享保八年 七月朔日

忠之判

在口裏

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1561 全上

國分之内小嶋兩嶋御用迦之諸木、彌勒院薪山御預被仰付之旨此度被仰出外、依之山奉行致見分、御用木者帳面記置外條、右外之諸木支配可有之外、仍如件、

享保八年卯七月朔日

北郷作左衛門 久嘉判

正八幡宮別當

彌勒院法印御房

1562 吉貴公御譜中

嚮^(大)是正徳五年乙未六月二十六日、吉貴欲嫁^(毛利)娶松平民部

太輔吉元^(大)領之在城手秋^(大)之令嬾於嗣嫡繼豐、稟之幕府一迺

蒙^(大)台許、今茲享保八年癸卯四月二十一日江都芝邸而

整^(大)婚姻之禮儀、事傳^(大)達大磯之館、

全上

正文在文庫

御念入り御事とめてたく御満そくと思しめし外、誠に幾久しく萬々年も御長久御はんしやうの御事にて、めて度さ^(マ)のかきりなく御祝義も^(マ)様こと^(本マ、候へカ)祝いらせられ外、此よしよく心得外て申せとの御事

に御さ外、猶かしく、

文下され披露致まいらせ外、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御目出度さ、扱は此度御同氏大隅守殿御婚禮相濟まいらせ、御めて度さ、それに付右御祝儀迄ニ御手前さまへ御目録之通まいらせられ外ハハかすく忝おほしめしなされ外よし、おくかたへも同し御事に御しう義まいらせられ外ハ、これまたかたしけなく思しめし被成りよしにて、御禮仰上られ外御事何もめてたく、かしく、

朱力キ 享保八年

カ

岩 倉

梅 園

さくらい

まつ平 御返事

上總介さま 人々申給へ

1564 全上

誠に幾萬々年も御はんしやう被成、つきせぬめて度さのミ御祝義まいらせられ外様こと祝しめし外、此よしよく心得外て申せとの御事に御座外、猶めてかしく、

御ふミ被下披露申まいらせり、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御目出度さ、扱は此たひ御同氏大隅守殿御婚禮相濟めて度さ、それに付大すみの守殿おくかたへも御祝義御目録之通まいらせられりへハ、數くかたしけなくおほしめし被成りよしにて、御禮仰上られり文のやうなにも御念入り御事とめてたく御満そくにおほしめしり、めてたくかしく、

朱カキ
享保八年

まつ平 岩 倉
上總介さま 御返事 梅 園
人々御中 さくらい

1565 吉貴公御譜中

正文在文庫

返くよろしく申あけられり、めてたくかしく、
文下されり、

公方様ますく御機嫌よく成せられ、御めてたく覺しめさせられりよし、扱ハ先比御同氏大隅守殿御婚禮相調り御禮仰上られり處、御懇之

上意御さりよし、御手まへ様有かたく覺しめしりよし御

禮仰上られ、文のやう披露いたしまいらせり、めてかし

朱カキ
享保八年

松平 三室
上總介様 御返事 人々御中 豊岡
高瀬 外山

1566 全上

まことに幾久しくと御めてたさよろしく申せとの御事御さり、なをくめてたくかしく、

六月廿六日の御ふミ被下、ひろういたしまいらせり、まつく
公方様

一位様御機嫌よくならせられめてたくおほしめし被成りよし、扱者御同氏大すみの守殿先比御婚禮御首尾よく相すまいらせり付、御禮被仰上り所、御懇の上意にて、御手まへさまもかたしけなく思しめし被成りとの御事にて

一位様へ御禮被仰上御満足ニ思しめしり、めてたくかし

く、

朱カキ
享保八年

松平

上總之介さま

御返事

いは倉

梅園

人々御中

さくらゐ

方

1567

全御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿九日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談 及上聞

外、恐々謹言、

朱カキ

享保八年

七月十一日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

1568

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 高聞
外、恐々謹言、

朱カキ

享保八年

七月十五日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

1569

全上

返々相替す御き嫌御うか、ひ被成外御事めてたく
存まいらせ外、めてかしく、

七月十五日付にて文下され外、

公方様ます々御機嫌よく御座成せられ外、扱は御同氏

大隅守殿御奥方方向後御機けん御うか、ひ献上物被成度

よし、御手まへ様おくさまより御願被成外處、御願之通

御首尾よく 仰出され、難有覺しめし外よし御禮仰上ら

れ、文のやうよろしく申あけまいらせ外、めてかしく、

朱カキ

享保八年

方

三室

豊岡

高瀬

外山

松平

上總介様

御返事人々御中

幾ちとせ萬々年もと御めてたさよろしく申せとの御事御さけ、なをくかしく、御ふミ被下ひろういたしまいらせけ、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成けよし、扱者

公方様へ御同氏大すミの守殿をくさまより、向後御機嫌うかゝひ且又献上物被成け御事、御手まへさまのをくさまより御願被成け所、御願之通被仰出忝思しめしなされけよしにて

一位様へ御禮被仰上、御満足ニ思しめしけ、めてたくかしく、

朱カキ 享保八年

松平

上總之介さま

人々御中御返事

梅園

さくららる

岩倉

あ

全上

返く幾久しく御拜領被成けやうにとめてたく存ま

いらせけ、めてたくかしく、

八月二日付にて文下されけ、

公方様御機嫌よくならせられ、御めてたく覺しめしけよし、扱ハ六月廿六日御同氏大隅守殿御奥かた御手まへ様をくさまへ暑氣御尋として御銘々に御目録之通御拜領被成、大隅守殿御奥方にハ、初て御拜領被成、相替す難有思しめしけ由御尤に存まいらせけ、めてたくかしく、

朱カキ 享保八年

松平

上總介様

御返事人々御中

三室

豊岡

高瀬

外山

尾上

あ

1572

吉貴公御譜中

正文在文庫

何もよろしく御つゐてニ申上けへけ、なをくめてたくかしく、

十月十八日付にて御ふミ下されけ、

公方様益御機嫌よくならせられけ御事御めて度覺しめし

由、しかれハ九月十二日 上使安藤對馬守(重行)にて御同氏

大すミの守殿ハ御國もとへの御いとまつかハされ、その
うへしなく御はいりやう被成、右の御禮御申上なされ

外節、御懇の 上意も御座り御事、御手まへさまこもか
すく難有覺しめし由御禮仰上られ、御ふミの通めて

たくかしく、

朱力年
享保八年

三室

豊岡

高瀬

外山

尾のえ

まつ平

上總之介様

御返事
人々御中

1573 絳豊公御譜中

同年七月二十日 上使稻垣求馬種信來芝邸、從先規

貴鷹所擊執雲雀十五繼豐拜領之、則日登營奉申謝

之、且詣執政四位之第一、亦謝之、

1574 全御譜中

寫正文在文庫

口上覺

大清國皇帝代替付、當年冬琉球中山王より先格之通唐
ハ慶賀使差渡申答り、其節中山王進物之内太刀を學り

贈申儀り、鋼鐵なし作調、見分計太刀之形、用方
老不罷成、禮式太刀同前り段、前代皇帝代替之節、舊式

之進物御座り旨申越り、先例同來り間、此段申上り、以

上、

御張紙 (朱) 「享保八年」八月 御名
先例之通 可被申付候

「右御書付享保八年卯八月五日御用番安藤對馬守様江佐久間九

右衛門持參、御用人青柳藤右衛門ニ而差上り處、御受取、道

而御挨拶可被成由被仰聞り、然處同六日對馬守様御家來より、

御留守居御用之由申來、九右衛門罷出り處、右朱書之通御張

紙を被附、先例之通可被申付候由被仰渡り、右ニ付而何ぞ御

尋事成無之外事」

1575 全御譜中

寫正文在文庫

先年臺灣亂之時、生捕之囚人共福州城内ハ籠舎被申付置

り處、當正月廿五日番人之透間を窺、七拾餘人程籠舎を

破出り付、官人方ハ追手をかけ、福建之内永福と申山中

江追籠、夜白取卷不殘討捕、臺灣表及弥靜謐之由、

右之通承外旨渡唐之琉人共罷歸申候由、國元より申

越外、此段申上外、以上、

松平大隅守内

〔朱〕
「享保八年」 八月 佐久間九右衛門

〔朱〕

〔右書付亭通御用番安藤對馬守様へ八月九日佐久間九右衛門致

持參外處、御登 城被成外故、取次渡部金十郎江相渡置外通

九右衛門申出外也〕

1576 繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

爲新年之嘉儀被差渡使簡、殊如目錄送給之、入念外之段

令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

〔朱力キ〕

享保八年 八月十八日 少將繼豐御判

謹上 中山王

全上

芳翰令披閱外、去歲御看致拜領外爲祝詞、以南風原親方

太刀・馬代白銀百兩并別録之表被相贈之、入念之段欣然

之至外、恐惶不宣、

〔朱力キ〕
享保八年 八月十八日 少將繼豐御判

謹上 中山王

1578 全上

芳墨令披見外、去年於喜代婚禮相整外爲祝儀、被差渡城

間親方、太刀・馬代白銀百兩并目錄之通贈給之、入念外

儀令祝着外、恐惶不宣、

〔朱力キ〕

享保八年 八月十八日 少將繼豐御判

謹上 中山王

1579 全上

寫

一大清代替ニ付、琉球より當冬慶賀使被差渡外儀願之通

被成御免外、

一右ニ付而金丸拔太刀二腰・銀丸拔太刀二腰皇帝江被獻

外先例ニ而、品替等難成外間、其通被仰付被下度旨被

願出候趣有之候、前代より武具を表し外迄ニ而、禮式

太刀を用外同前ニ外得共、吳國江武具を差渡外儀御大

禁之事外得者、武具ニ似寄候物ニ而表猥ニ差渡外様ニ

者巨被仰付儀ニ付、右太刀者於大清ニ武具と唱有之由得者、御内ニ何分ニ御計難成、於江戸及御伺候處、先例之通可被仰付旨被仰渡付、

一右御免者重キ儀之故諸事不被入御念付不叶事付、依之右之品已前之通於御當地屹檢使被仰付、御物御取替ニ相調、追而相渡答付、

一右外之儀及願之通被成御免候間、用意可仕候、委細者玉城親雲上歸帆之節可申渡付、

右之通先在番親方に可被申渡付、以上、

朱力キ
享保八年

卯八月廿七日

伊集院藏人(久矩)

種子嶋彈正殿(久基)

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

琉球より慶賀使を以大清皇帝に被獻物之内、胡貳百斤・すわう千斤・紅花百斤者於唐相調答候得共、於唐難調儀及可有之候、殊ニ此節者指揮使之斷を及申達答付處、差支付の者如何付、右三品差替之爲用意、例年持渡り品之内より、からかミ五千枚・銅五百斤・錫五百斤持渡、可然と吟味仕付間、被成御免被下度旨玉城親雲上を以、是

又被願越り趣有之候、常持渡り品之内ニ及餘計持渡り儀、猥ニ者曾の御免難被成事候得共、此節者重キ祝儀付の慶賀使被差渡事付處、若差支付の者不成合之答付、其上指揮使之斷ニ付の少キ品能様内ニ申談候筋及可有之との譯及有之由得者、劣以格別候故、願之通差免付間、其通可被申渡付、尤舊規之通ニ相濟、餘計之品持戻りハ、其首尾可被申出付、

右之段玉城より攝政・三司官に相達候様琉假屋守に可申渡付、以上、

朱力キ
享保八年

九月

伊集院藏人(久矩)

一康熙皇帝崩御、御四男即位付の、先例之通琉球より爲慶賀使紫金官壹人・正儀大夫壹人、其外之役々北京に差渡申度付間、被成御免被下度由玉城親雲上を以段々被願越り趣有之候、代替初メ延引難成由其通可有之儀付故、願之通當冬慶賀使被差渡り儀被成御免付間、諸事舊式之通可被申付付、

一右付の被獻物之内、金丸拔太刀二腰・銀之丸拔太刀二腰品替等難成、當冬者必不差渡り付不叶事候間、何とそ於御國許御計被下度旨、是又被申出候趣有之付、尤

前代より武具を表し^レ迄之調方^ニ有、何^レ用方^ニ有^レ不罷成、於日本^ニ禮式太刀を用^レ同前^レ得共、吳國^ニ武具を差渡^レ儀^ニ御大禁之事^レ、左^レ得^レ者^ニ縱武具^ニ似寄^レ物^ニ有^レ者^ニ差渡^レ儀^ニ難成儀^レ、殊對大清^ニ候^レ者、武具之唱^有之由^レ得^レ者、御手沙汰^ニ有^レ者^ニ何分^ニ有^レ難被仰付^レ故、於江戸及御伺^レ處、先例之通^ニ可被仰付^レ旨被仰渡^レ、

一右御免之段^ニ重キ事^レ故、諸事不被入御念^レ有^レ不叶事^レ、依之右之太刀四腰以前之通^ニ於鹿兒嶋屹檢使を以御物御取替願之通調方被仰付^レ條、出來次第追^レ被相渡^レ有^レ候、尤大清代替付^レ有^レ者^ニ前^ニより有來たる事^レ有^レ候故、右之通候條、自今以後猶^レ以其通^ニ可被相得^レ、(心脱^レ之)

一皇帝即位付^レ有、指揮と申使者琉球^ニ被差渡^レ儀^ニ有^レ之外間、早^ニ慶賀使差渡、指揮使之斷を^レ可申遣由、且又先皇帝^ニ進香之祭等^ニ有^レ之候間、慶賀使兼務^ニ有^レ相濟候様可被致之由委細承置^レ、冠船之引續若指揮使被差渡^レ有^レ者猶^レ以難調必至と當迫^レ之由尤之儀^レ間、弥以考之通隨分斷被申遣可然^レ、(差力)

一例年之渡唐銀^ニ御定數有^レ之、聊相重^レ様^ニ有^レ難成事^レ得共、慶賀使遣銀^ニ格別之事^レ、依之被申越^レ通慶賀

1582

使遣銀九拾五貫目^ニ、接貢料銀之外持渡^レ儀^ニ差免^レ間、猥不持渡様堅^ニ可被申渡^レ、

一玉城事^ニ右之御用^ニ付差越最早御用相濟^レ、右^ニ付^レ有^レ者於琉球何角用意有^レ之筈^レ故、早^ニ御暇被下^レ間仕舞次第歸帆可仕^レ、

右之段玉城より於琉球攝政・三司官^ニ相違^レ様^ニ可被申渡^レ、以上、

朱力^レ年
享保八年 九月

久^レ喜
北郷作左衛門
久^レ喜
鳴津 李

伊集院藏人殿

全上

正文在琉球國司

覺

一琉球より大清^ニ進貢使差渡^レ儀^ニ往古より之勤^ニ有、於于今其例不相替^レ、依之進貢船乗組之人數并至船頭水主迄宗旨相改、御法度之宗門^ニ紛敷者^ニ無^レ之段^ニ在番奉行所^ニ可相違^レ、且又吳國^ニ兵具差渡^レ儀^ニ御大禁之儀^レ間、賊船^ニ爲用心定置^レ兵具之外、武具之類持渡間敷^レ、右之段^ニ每度雖申渡置^レ、猶以入念相改之出

船可申付外、萬一於大清御法度之宗旨す、め申者有之
外共、曾而致同意間敷外、尤歸帆之節何様之譯ニの表
唐人共乗せ來間敷旨能く可被申間候事、

一 渡唐船差渡外金高之儀者、先年從

公義琉球國司に御免許之上、於大清白糸巻物其外色、
買調薩州に差渡之、於京都相拂、其代金を以進貢使取
仕立まで仕事候條、渡唐金員數在番之奉行に申談、檢
使を以相改之、御定之外増金曾而差渡間敷外、且又於
大清毒藥買調儀者不及申、御大禁之書籍等買來儀堅
令禁止外、此段者兼而申渡置外得共、弥以慥ニ相守之
外様可被申渡外事、

一 渡唐船歸帆之節及、定而時分相考令出帆ニの可有之候
得共、近年者歸帆船或及破損、或諸所に致漂着及難儀
外、早竟出船之時節遲速故ニの右之通可有之哉、於其
儀者頭取并船頭別の不念之至外間、於大清出船時分之
儀者、能く入念吟味之上ニの可致出船外、乍其上不意
之仕合ニの致難儀、何之國に表漂着外ハ、其所之役
人より何方之船ニのあり哉と可被問外間、琉球より唐に
進貢船何月何日何方より出船仕外處、遭難風此所に致
漂着外通有筋申達、理不盡之儀共申懸間敷外、若飯米

等及拂底外ハ、其段相違相應之直成を以置物ニ仕、

諸事任差圖成程慇懃ニ致應對外様可被申渡外事、

右段ニ堅固相守外様渡唐船出帆之節、時々可被申渡
候、聊違背有間敷者也、

享保八年卯九月九日

種子嶋

久正 久惠

北郷作

久衛門 久想

伊集院

久人 久武

嶋津

久空

北谷王子

三司官

1583

絲豊公御譜中

正文在琉球國司

覺

近年渡唐船歸帆之節、或致破損、或諸所に令漂着候付、
此節御家老中より覺書を以申渡趣有之候間、被存其旨、
渡唐船出帆之時分、書付之趣渡唐之面々に申渡之、弥無
違背相守外様ニ致添書、壹艘一通ツ、可被相渡之、尤
於大清唐人共に見せ申間敷外、若逢賊船外儀有之候者、
燒捨可申外、且又逢難風、何方ニの表日本之地方に漂着

外者、書附之趣其所之役人江可申達之、乍其上疑敷様子見及外者、右書付差出、可入披見外、右之趣渡唐之頭取に時々可被申渡者也、

享保八年卯九月九日

種子島彈正

北谷王子

三司官

1584 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖一重到來歡覺外、委曲水野和泉守可述外也、

朱力キ
享保八年
九月七日



薩摩少將殿

1585 全御譜中

同年九月十二日

吉宗公使安藤對馬守重行來于櫻田之第一、賜歸國之告於繼豊一白銀百枚・白縮緬三十卷拜戴之、翌十三日繼豊

登レ營於三黒書院一拜三謁

吉宗公一、奉レ禮三謝賜レ告時 公加三懇篤之 尊言一、因三

先規一賜三龍蹄一匹一、奉レ禮三謝之、且芝邸留守勤家老島

津中務久貫從三先躰一、獻三上御太刀一腰・御馬代白銀一

枚・紗綾二卷一、奉レ拜三謁

將軍家一、水野壹岐守忠定奏三達之、乃退去、

1586 繼豊公御譜中

正文在文庫

島津但馬守先祖以來私國元江用事有之外節者、時々參度

旨申上、願之通被仰渡其時々不及何罷越外、但馬守儀表、

私國元江用事之節者、先例之通參外様仕度外、但馬守家

督仕外付此段申上外、以上、

(朱) 御張紙ニ而(朱) 可為先例
「享保八年」 九月廿一日 松平大隅守

(の:)

(朱) 「水野和泉守様御用人江御用手紙參外故罷出外處ニ、御用人赤

星彌三左衛門ニ而被仰聞外者、此間御伺書付紙を以御挨拶申

外ニ付、御願書御渡被成外故差上申外、

但 島津但馬守様御留主居も被召呼、御付紙ニ而御挨拶有之

外、以上、

九月廿三日

佐久間(盛村)九右衛門

1587 全上

寫正文在家老座

(朱)水野和泉守様より御張紙 可為先格之通候

私先祖以來用事御座外節者、松平大隅守國許に時々罷越

外間、同氏淡路守儀及用事之節者、不及奉伺罷越度之旨、

當御代初(准)淡路守被下御暇候節、享保二年酉四月御用番

久世大和守殿に申上候處、願之通被仰渡り、私儀及用事

御座外節者、先例之通其時々不及奉伺、大隅守國元(實)に罷

越候様仕度外、今度家督仕外付此段申上外、以上、

(朱)「享保八年」

九月廿一日

嶋津但馬守

1588 全上

正文在文庫

私儀今度御暇被下置國元(實)に罷越り、未男子無御座外付、

在國中若不慮之儀及御座外者、國元(實)に差置り私弟島津玄

蕃(傳)、當年拾六歳罷成り、此者養子被 仰付跡職相續仕外

様奉頼候、以上、

享保八卯

九月廿二日

松平大隅守判

1589

繼豊公御譜中

正文在文庫

請取申金銀之事

米高三千六百四拾七石五斗

金貳千七百九兩貳分、銀四匁三分者

後藤 包

右者爲上ケ米壹萬石ニ付百石宛、當卯夏御張紙直段三拾

五石ニ付貳拾六兩之積りを以、高七拾貳萬九千五百石分

當秋半分書面之通上納、仍如件、

享保八年卯九月廿六日

(御令奉行) (宜) 忠 深津八左衛門(印)

(同) (高) 密 黒澤直右衛門(印)

(同) (正) 矩 戸田忠兵衛(印)

(同) (邪) 忠 山田治右衛門(印)

大坂に被遣候ニ付 無加印

松平大隅守殿

役人中

全御譜中

同年九月二十七日繼豐發芝邸、家老島津内膳久兵・名越右膳恒渡、側用人伊集院權右衛門久盛、近習役旅用人山澤十太夫盛香等扈從駕、經東海驛十月十四日著伏見旅亭、同月十九日出旅亭、下河流即日著大坂旅亭、同二十五日駕船、十一月十四日著豐前大里、自是歷九州驛路同月二十七日止宿薩州大口郷、十二月朔日出蒲生郷(給良郡)小隊而詣大磯館、面謁老君吉貴、而後入薩府城(謝恩使島津仁七郎久、福殿二遊享保九年十一月)

全上

扣正文在文庫

寫

金子三拾兩

右爲 白旗大明神御供料、此度

少將繼豐被寄附之早、全被受納永々神前之勤行不可有怠慢之狀如件、

享保八年癸卯九月日

名越右膳

恒渡判

嶋津内膳

久兵判

嶋津中務
久貫判

鎌倉

相承院

1592

正文在文庫

請取申

白旗大明神御供料

金子三拾兩

右少將繼豐公御寄附、各被成副書畢、以右料物於當所田地求置、永々神前之勤行無怠慢、以來住職移轉之節素右之件儘可讓渡候、仍爲後證如件、

鎌倉嶋岡白旗大明神別當相承院

廿三世權大僧都寬明判

享保八季癸卯九月日

嶋津中務殿(久貫)

嶋津内膳殿(久兵)

名越右膳殿(恒渡)

1593

繼豐公御譜中

正文在文庫

一位御方近年伽羅御不自由之間、内々にて從其方進上之事、密々自下官可申試旨以御書被仰下候、委細清興禪尼可申入候、每度様々之所望申進上事赤面候也、

(卷)
「享保八年」 初冬十五 家久

1594 継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見上、

公方様御機嫌被相伺之上、益御安全御儀之間可御心易上、隨而小熬海鼠一箱被獻之上、各申談逐披露上處一段之御仕合上、恐々謹言、

朱カキ
享保八年 十一月五日

松平大隅守殿

安藤對馬守
重行判

1595 全上

御札令披見上、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十四日増上寺 御靈屋御參詣之儀被承之、恐悦旨尤上、紙面之趣各申談及 上聞上、恐々謹言、

1596 継豊公御譜中

正文在文庫

朱カキ
享保八年 十一月七日 安藤對馬守
重行判

返々御念入まいらせられ上御事、何もくよく申せとの御事ニ御さ上、めてかしく、御文くたされ上、まつく

一位様御機嫌よくならせられ御めてたく思しめしなられ上よし、扱ハさきの比、芝御屋敷御近所火事ニ付、御尋ましあそハし上へハ、御てまへさまかすくかたしけなく思しめし被成上よし御禮仰あけられ、御文のやうひろういたしまいらせ上へハ、數く御満足思しめし上、めてたくかしく、

朱カキ
享保八年

まつたいら
大隅守さま
人々御中
いは倉
梅その
さくらい

1597 継豊公御譜中

寫正文在文庫

口上覺

先年薩州江致問堀ハ銅山休置ハ處、大隅守領内町人之内
問堀之儀願ハ者有之差免、頃日檢使差遣致吟味ハ得者、
吹調ハカネ繼計有之、山中之者共及何カ共難名付ト申
由御座ハ、然者銅者無之方相見得申ハ、自然於長崎右山
銅氣及有之様沙汰杯仕、宜筋ニ共被聞召上候得者相違之
儀御座ハ間、此段各様迄申上置度存候條、御歸府之節御
内々御沙汰被仰上被下度ハ、頼存ハ、以上、

(朱)

「享保八年」卯十一月

松平大隅守内

木脇賀左衛門箱感

(朱)

「右書付享保八年卯十一月十三日長崎御奉行石河土佐守様御

宅江致持參、御家來磯邊惠左衛門江頼置ハ處、土佐守様長

崎ハ御歸府被成ハ付、惠左衛門ハ申上候處、逐一被得其

意外由木脇賀左衛門迄惠左衛門ハ手紙申遣ハ、

一右銅山之儀ニ付而辰六月廿八日石河様江佐久間九右衛門罷

出委細申上置ハ趣、享保九年之場ニ記置ハ事」

吉貴公御譜中

嚮レ是吉貴因三病痾、賜レ告白還レ國後、今般繼豐欲レ窺ニ

吉貴之參府之期、雖レ然每時發ニ眩暈ニ未レ得ニ愉快、故

馳ニ使翰於江都、稟ニ之執政、事見ニ于左條、

扣正文在右筆所

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅奉存ハ、將亦同氏上總
介事病氣色々養生仕ハ得共、未致全快、參府難仕之段、
去冬以使札申上ハ、今以疑ト無御座度々眩暈差發、當分
之躰ニ由者參府仕ハ由及御目見杯ニ登 城可仕様子ニ無
御座ハ、可罷成儀御座ハ者、病氣快節參府相伺ハ様仕度
奉存ハ、依之以使者申上候、恐惶、

朱力キ

享保八年 十二月九日

水野和泉守様

安藤對馬守様

松平左近將監様

人々

繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆令啓達ハ、

公方様益御機嫌能被成御座ハ間可御心易ハ、將又御鷹之
鶴拜領之條以宿次差越ハ、恐々謹言、

朱力キ

享保八年 十二月十三日

松平左近將監

乘邑判

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1601 正文在文庫

寫

此狀箱并鶴壹、從江戸至薩州鹿兒嶋、松平大隅守所に急
度相届返札可來り間、於江戸月番之老中に可持參者也、

朱力本
享保八年 卯十二月十三日 和泉印

右宿中

1602 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、十月十四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤り、紙面之趣各申談及 上

聞り、恐々謹言、

朱力本
享保八年 十二月十八日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1603 繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、隨り蜜柑二箱・
炙鮎一箱被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合り、

恐々謹言、

朱力本
享保八年 十二月十八日

松平大隅守殿

水野和泉守
忠之判

1604 全上

御札令披見り、就寒中

公方様御機嫌以使者被相伺之り、益御安全御儀り間可御
心易り、隨り琉球袖十端并鏝節一箱被獻之り、各申談遂
披露り處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱力本
享保八年 十二月廿二日

松平大隅守殿

水野和泉守
忠之判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、就寒中

公方様御機嫌被相伺之り、益御安全御儀可御心易り、
隨而鯛一箱被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合り、
恐く謹言、

朱カキ
享保八年 十二月廿二日

松平上總介殿

水野和泉守

忠之判

吉貴公御譜中

正文在文庫

御長久御はんしやうの御事にて相替らす幾(マ)かんもと
祝いらせられり、一入御悦に思しめしり、御手前さ
まにも御無事のよしきかせられ、數くめてたく思
しめしり、何もよく心得りて申せとの御事に御座り、
なぞめてかしく、

十一月廿一日の御日付にて文被下披露申まいらせり、ま
つく

公方様御機嫌よく成らせられり、

一位様御機けんよくならせられ、寒氣のあらせられすり

まゝめてたく御心易思しめしなされりへくり、扱は寒御
機嫌御窺と御さりて御目録之通御上ケ被成、數く御満
足さ誠に幾久しく萬く年も、めてかしく、

朱カキ
享保八年

まつ平

上總介さま

御返事

岩くら

梅園

さくらい

継豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀小袖一重到來歡覺り、委曲水野和泉守可述
り也、

朱カキ
享保八年 十二月廿七日

薩摩少將殿



(表紙)

吉 貴 公

享 保 九 年

繼 豐 公

追 舊 記 雜 錄 卷 六 十 一

1603

繼豐公御譜中

去載十二月朔日、繼豐歸薩城、使番頭島津仁十郎久福豫命謝恩使、故即日登城舍命而赴東都、取路於九州、同月二十日著大坂、翌二十一日溯流著伏見、歷東海驛路、享保九年甲辰正月三日著東都芝邸、同月五日到執政用番松平左近將監飛呂之第、呈上連署書而勤使价、且到若年寄各之第、亦呈上書簡勤使价、同月十五日應執政奉書之教、久福登營捧繼豐之獻物琉蕉布二十端・三種二荷、白書院而拜調

吉宗公、奉申謝歸國之恩篤、岡部内膳正長敬奏達之、久福亦親自獻上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷、再奉拜調

台顔、秋元伊賀守喬房奏達之、同月十九日久福再登營、松平乘邑出席于檜間、手自見附與所授繼豐之奉書上、且拜戴縮緬二卷、岡部長敬執達之退去矣、東都使价事畢而久福二月二日出芝邸、取路於東海驛、到大坂駕船經西海、三月十八日還薩府復命、

○去歲十二月十三日自

大樹吉宗公、貴廳所擊鶴一雙副執政宿次奉書及水野和泉守忠之驛路之證印、於忠之第授與家臣佐久間九右衛門盛村賜繼豐、是繼豐以賜告歸國故從先規也、使家臣鹿島傳左衛門國泰馬野間太郎左衛門政春番其外步士三人輕卒等警衛之上、即日發江都芝邸、日夜相繼經歷東海・山陽・西海之三驛、享保九年甲辰正月六日達薩城、繼豐則拜戴之、即日齎繼豐之報翰及所附與驛路之證印上、而使家臣入佐四郎左衛門俊明新門司金右衛門元峯上同江都矣、島津筑後久龍分大身豫奉恩賞謝使之命、茲日登城舍繼豐之

命_二發_一鷹府、且老君吉貴亦使_レ谷山長右衛門通洪_{役物頭}

爲_二謝恩使_一副_三久龍_二赴_一江都上、俊明・元峯等經_二西海

山陽・東海之三驛、先_三久龍_二同月二十七日著_一江都、

直候_二執政_用番松平左近將監乘邑之第_一、呈_二上_一繼豐之報

翰、且復_二上_一忠之驛路之證印矣、久龍亦取_レ驛路於大

口鄉_一、歷_二九州路_一、同月十四日至_三前小倉_二開帆_一、同二

十二日至_二大坂_一、歷_二東海之驛路_一、二月六日著_二江都芝

邸_一、同月九日候_二執政_用番安藤對馬守重行之第_一、捧_二呈

繼豐之書牘、且候_二執政_一・副執政各位之第_一、亦呈_二上

書牘_一、勤_二使節_一、谷山通洪亦同候_二執政之第_一、勤_二吉

貴之使价、同月十五日因_二執政之奉書_一、久龍_{著對斗目登}
_{肩衣長袴}

營、捧_二繼豐之獻物_一二種雙樽、白書院而拜_二謁

吉宗公_一勤_二謝使_一、是奉_レ禮_二謝恩資之達_一薩府_二故也、丹

羽式部少輔倚氏奏_二達之_一、久龍亦親自獻_二上御太刀_一

一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷_一、再奉_レ拜_二謁

台頭_一、牧野駿河守忠壽奏_二達之_一、乃退去矣、同月十八日

應_二執政之教_一、久龍重登_レ營、於_二檜間_一、安藤重行出

席、而賜_二繼豐_一之奉書手自見_レ附_二與之于久龍_一、且久龍

拜_二戴縮緬三卷_一、高木主水正陳執_二達之_一乃退_レ營、

候_二執政_一・副執政各之第_一、奉_レ申_二謝之_一、同日谷山通洪亦

1609

繼豐公御譜中

正文在文庫

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三ヶ條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保九年正月十一日 繼豐御判

1610

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之外、遂披露候之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年

正月十一日

松平左近將監
乘邑判

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、遂披露之之處一段之御仕合、恐々謹言、

朱カキ
享保九年 正月十一日

松平左近將監
乘邑判

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

(島津吉貴)
松平上總介殿

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤候、將亦同氏上總介病氣付、參府難成之由最前被申越候、今以院と無之外、

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

(島津繼豐)
松平大隅守殿

全上

病氣快節參府相伺、様被致度旨令承知、依之被差越使者、紙面之趣各一覽事、恐々謹言、

朱カキ
享保九年 正月十三日

松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

返く御ふみのとをり何もくよろしく申上まいらせ、めてたくかしく、

十二月朔日付にて御ふミ下され、

公方様益御機けんよく御座なされ、御めてたく覺しめし、しかれば御てまへ様御事、上使を以御暇仰出され、白銀・ちりめん御いたゝき、そのうへ御前におゐる御懇の御錠、殊に御馬御拜領被成、重疊有かたくおほしめし、御國もとへ御つき被成り、御事に御禮仰上られ、との御事、御ふミの通よろしく披露いたしまいらせ、めてたくかしく、

朱カキ
享保九年 正月十五日

お

三室
豊岡

まつ平
御返事
大すみの守様
人々御中
高瀬
外山
尾のえ

1614

全上

いくちとせ萬代までも相かわらすと、御めてたさよ
く申せとの御事御さひ、なをくかしく、
去ル十二月朔日の御日付にて御ふミ被下、ひろういたし
まいらせひ、まつく

公方様

(天英院、徳川家宣著)

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成り
よし、御手まへ様御事十二月朔日其許へ御着被成りよし、
めてたさ 上使をもて御いとま仰出され、白銀・ちりめ
ん御はいれう被成、そのうへ 御前へめさせられ、御懇
の御詫御馬御拜領かたしけなく思しめし被成りよし、右
之御禮使者にて被仰上り二付、
一位様へも被仰上りとの御事御満足さまことに、めてか
しく、

朱カキ
享保九年

6

1615

全上

松平
御返事
大すみの守様
人々御中
岩倉
梅園
さくららる

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又去秋被下
御暇、其上御馬并白銀・巻物拜領、重疊難有由得其意り、
國許到着付る、爲御禮以鳴津仁十郎(久徳)如目錄被獻之り、紙
面之趣承届り、恐々謹言、

朱カキ

享保九年

正月十六日

戸田山城守

忠貞判

松平大隅守殿

1616

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤り、將又去秋被下
御暇、其上御馬并白銀・巻物拜領之、重疊難有之由得其
意外、國許到着付る、爲御禮以鳴津仁十郎、如目錄被獻
之り、右之趣遂披露り處 御前に被召出之、入念り段御

喜色之御事^レ、恐^ク謹言、

^{朱カキ}
享保九年 正月十九日

松平左近將監
^{乘邑判}

安藤對馬守
^{重行判}

水野和泉守
^{忠之判}

松平大隅守殿

薩摩少將殿

1619 繼豊公御譜中

正文在文庫

追申愈平安珍重、此邊無^レ呉^レ也、

大樹放鷹之纏以奉書賜之、畏悅旨被^レ示告、欣幸目出思給

^外也、

^{朱カキ}
享保九年 二月朔 (ママ)

(近衛家總)
(花押) No.3

松平大隅守殿

1617 繼豊公御譜中

正文在文庫

今度首尾好御暇、途中無^レ呉儀其地御着之由珍重存^レ、仍之瑤章之趣御念入之段欣然之至^レ、恐^ク謹言、

^{朱カキ}
享保九年 正月廿四日

水戸宰相
宗莒判

松平大隅守殿

^{御報}

1620 全上

正文在琉球國國司

芳翰令披見^レ、去歲婚禮相整^レ爲祝詞、被^レ差渡本部按司、

太刀一腰・馬代白銀百兩并目錄之通被^レ相贈之、入念儀令

祝着^レ、恐^ク惶不宣、

二月朔日 少將繼豊御判

謹上 中山王

全上

爲青陽之嘉義、一封且如目錄賜之、目出祝納^レ、愈無事重歲珍重^レ、此邊同然^レ、尚期永日^レ也、

^{朱カキ}
享保九年 正月廿八日

(近衛家)
(花押) No.4

1621 全上

正文在文庫

爲婚禮之祝詞、遠境被入御念、瑤章之趣欣然之至存り、
恐く謹言、

朱カキ
享保九年 二月二日 水戸宰相 宗堯判

松平大隅守殿 御報

全上

御札令披見り、如承改年之慶賀珍重り、

公方様益御勇健被成御座、年始御規式可相濟と目出度被
存由得其意り、猶以御機嫌被相伺之り、弥御安全御事り
間可御心易り、隨り御樽肴被獻之り、各申談遂披露り之
處、一段之御仕合り、恐く謹言、

朱カキ
享保九年 二月五日 安藤對馬守 重行判

松平大隅守殿

全上

なをく何もくよろしく申あげまいらせり、めて
たくかしく、

正月六日付にて御文下されり、

公方様益御機けんよく御座なされ、御めてたくおほしめ

しりよし、しかれハ宿次御奉書を以御鷹の露御拜領被成、
有かたく覺しめしりとの御事、御禮として御使者御あげ
なされりよし、御ふみのとをりよろしく披露致まいらせ
り、めてたくかしく、

朱カキ
享保九年 二月十一日 三室 〆

三室 豊岡

まつ平

大隅守様

御返事人、御中

高瀬 外山 尾のえ

1624

雑抄

一享保九年甲辰二月三日於吉野御關狩、惣奉行嶋津主計(欠名)
殿・嶋津市太夫殿・種子嶋平馬殿、三番與・四番與・
六番と罷登り、朝雨天、晝は晴天、

1625

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく何もくよろしく申あげまいらせり、めて
たくかしく、

正月六日付にて文下されり、

公方様ますく御き嫌よく御座なされ、御めて度おほしめしりよし、しかれハ宿次御奉書を以、御鷹の羈御同氏大隅守殿御拜領被成、有かたく覺しめしりとの御事、御禮として御使者御あけなされりよし、御ふみのおもむきよろしくひろういたしまいらせり、めてたくかしく、

朱カキ
享保九年
二月十一日

三室

豊岡

高瀬

外山

尾のえ

全上

なをく文のやう御ねん入らせられり御事ニ思召
り、かしく、

御ふみ被下ひろういたしまいらせり、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成

りよし、さては

公方様より大すみの守殿宿次御奉書をもて、御鷹羈まいらせられ、かたしけなく思しめし被成りよしにて、

一位様へ御禮御ふいてう被仰上、御満足ニ思しめしり、まことにいく久しくと御めてたさよく申せとの御事ニ御さり、めてかしく、

朱カキ
享保九年

松平

御返事
上總之介さま
人々御中

いは倉
梅園
さくらゐ

1627

継豊公御譜中

正文存文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦之旨尤り、將又以宿次奉書御鷹之鶴拜領之、難有由得其意り、依之爲御禮以嶋津筑後御樽有被獻り、遂披露り處、御前に被召出之、入念り段御喜色之御事り、恐々謹言、

朱カキ
享保九年
二月十八日

松平左近將監
乘邑判

安藤對馬守
重行判

1628

吉貴公御譜中

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又同氏大隅守御鷹之鶴拜領之、難有之由得其意外、因茲爲御禮被差越使者外紙面之趣、各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年

二月十八日

安藤對馬守

重行判

松平上總介殿

全上

扣寫在右筆所

一筆致啓上候、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉存外、將亦同氏上總介病氣付、參府難叶段最前申上置外、今以無御座外故、病氣快節參府相伺様仕度奉存外旨申上外處、御奉書之趣致承知外、此段爲可申上呈使札外、恐惶、

朱力キ

享保九年

二月十八日

水野和泉守
忠行判

松平大隅守殿

水野和泉守様
安藤對馬守様
松平左近將監様

人、

1630

吉貴公御譜中

正文在文庫

まことに幾久しくと御めてたさよろしく申せとの御事ニ御さ外、なをくめてかしく、

ふみ被下ひろういたしまいらせ外、まつく

一位様御機嫌よくならせられ、めてたく思しめし被成外

(宋)
一御奉書之文言ニ、氣色快節參府被相伺度由令承知外と

御座外、此文言ニある者、年々御參府御伺不及外、御參府被遊外程ニ御全快被遊外、御伺被成り積御座外、左外得者六七年程過外、其節いつれにも御伺被遊外、能御座外、最早年々御伺不及外、早竟御老中御聞置之筋ニ御座外付、年々御届ニ不及由、

右者於江戸中務殿より、内々被聞召合外御方々參外手紙之趣、後年爲見合記置外、本書者右膳殿御方一巻帳ニ御仕付被成置外、別而蜜々ニ御知せ之御事外」

よし、扱者冬年かんき御たつねの御事までに

一位様よりおくさまへ御もくろくのとをりまいらせられ

けへは、御禮仰上られ御満足ニ覺しけ、かしく、

朱カキ
享保九年

松平

上總介さま
御返事

岩 倉

梅 園

人々御中

さくらら

6

1631 吉貴公御譜中

正文在文庫

營中以使者申入り序、啓一翰候、改年之賀儀珍重、弥可
爲堅固け、此表無異け、仍如目録被贈與之候、餘屬口上

け、謹言、

朱カキ
享保九年

二月廿日

(花押 No.3)

松平上總介殿

1632 全上

新陽之嘉義雖事舊け啓一簡け、愈平安け哉此邊無恙け、

仍如目録贈之け、尚屬使者け、謹言、

朱カキ
享保九年 二月廿日

(花押 No.4)

薩摩中將殿

1633 繼豊公御譜中

正文在文庫

營中以使者申入り次、啓一翰候、改年之賀儀珍重、弥可
爲平け、仍如目録令贈與之候、餘屬口上け也、

朱カキ
享保九年 二月廿日

(花押 No.3)

松平大隅守殿

1634 全上

御札令披見け、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又以宿次奉

書御鷹之鶴拜領之、難有之由得其意け、依之爲御禮以鳴

津筑後如目録被獻之け、紙面之趣承届け、恐々謹言、

朱カキ
享保九年 二月廿一日

戸田山城守

忠眞判

松平大隅守殿

1635 白木御文書五番箱三十中

御下屋敷に平田平太左衛門御用ニ付る參上仕り處、

御沙汰御座り趣左之通ニ付、

寄合以上官名附り内、名之唱別り耳立り類之名、向後無用可仕り、寄合以上ニ付る、無役之人、必官名ニ付無之り、常式諸人付來り何左衛門、何右衛門、何兵衛類之不耳立名を附可然り、乍然無役ニ付る、大身又先祖より附來り名者格別ニ付、且又官名ニ付無之り、耳立り名無用可仕り、何れ之筋ニ表別り替り唱之名を、爲除り様ことの御沙汰ニ付り、

右之通御沙汰承知仕り間、向後名替申出り人有之り節者、右之件を以相糺耳立り唱之名願出りハ、差留可申事、

辰二月

右之通御沙汰御座り處、當分無役之内官名附り人表有之、平田平太左衛門了簡迄ニ付ハ難決ニ付り、重り平太左衛門より名書を以、山口五太夫迄如何可有之哉と申達候處、五太夫より

總州様に申上り得者、朱書之通

御意候、委細左ニ相記り、

高橋七郎右衛門嫡子

高橋左門

嶋津助之丞養子

嶋津相馬

新納左京嫡子

新納刑部

新納伊織嫡子

新納主税

畠山式部嫡子

畠山數馬

菱刈藤馬

嶋津伊織

入來院右近

伊勢兵部

禰寢内記

彌生内記

二月

右書付 太守様達 貴聞り處、被 聞召置り旨、山澤

十太夫御取次ニ付承知仕り事、

辰二月十日 嶋津大藏

外包ニ二三三三

(朱)「伊織事者以前祖頭為相勤人ニ而候故名替不及候」

(朱)「兵部事家付而之名大身ニ有之候故名替不及候」

(朱)「入來院重絶(島津清純)」

「主馬・仙十郎事者格別り故、右近・内記名替不及り、」

(朱)「盛香」

(朱)「久徳」

(朱)「自起」

(朱)「禰方」

(朱)「定恒」

(朱)「島津清純」

(朱)「久徳」

(朱)「自起」

官名之儀ニ付、享保九年被 仰出候御書付召通

右明和二年 西十二月六日御家老座江有之ヲを被相寫、郡山

次郎左衛門江御渡被成、白木御文書五番箱江納置外事トア

リ、

1636

〔右衛門と申名遠慮仕々様被仰渡り付、新納右衛門(本)殿と名替被仰付度旨申出り付、右名替之儀老江戸に奉伺、申渡筈り得共、左外へハ往反も有之、其内右衛門ニお罷居り儀悉いかゝり、此段御内々、總州様に御沙汰御申上名替申渡、江戸に老首尾申上り筋にも可有之哉と申談(比喩)り旨、隼人殿に申達り處、可申上由にて右之趣總州様に被申上り處、番頭も官名ハ付申事り得共、同敷ハ官名ニお無之名願出り様有之、可然と之、御意り由被申越り付、右衛門に老官名ニお無之名を願出り様こと申渡、最前之書物相返り、右 御意付るハ以後爲見合書留置り、

享保十四年酉十月九日

(補註、前文書ノ行間書込ミナリ)

1637

繼豊公御譜中

正文在文庫

なをく御ふみのやう御ねん入まいらせられり御事

ニおほしめしり、めてたくかしく、御ふみ被下ひろういたしまいらせり、まつく、公方様

一位様御機けんよくならせられ、めて度おほしめし被成りよし、扱者

公方様より宿次御奉書をもて、御鷹羈御はいれう被成、忝思しめし被成りよしにて、御禮御ふいてう被仰上、御満足ニ思しめしり、誠ニいく久しく、萬々年も御めてたさよろしく申せとの御事ニ御さり、めてかしく、

朱力キ 享保九年

松平

大すみの守さま 御返事

人々御中

岩 倉 梅 園 さくらら

1638

繼豊公御譜中

寫正文在江戸家老座

覺

薩摩金山爲入用、松平故薩摩守代願申上、元禄十四巳年御取替被仰付置、翌午年去寅年迄段々上納仕り、相殘金六百兩有之、當年新金三百兩ニお皆濟上納仕替御座

外、此段申上外、以上、

十一月

松平大隅守内

川上五後右衛門(親 房)

(朱)

「右書付寛播磨守様江致持參差上外處ニ、御用人松田長右衛門

請取置、退出之節可申聞由申外旨五後右衛門申出外、

享保八年卯十一月四日」

1639

正文在文庫

請取申金子之事

金貳萬兩老 但後藤包也、

右是老爲薩摩金山入用奉願外處、御取替金被仰付請取申外、金山より出外山金、後藤方に相渡シ小判ニ仕立外員數ヲ以段々返納可仕外、若山金出不申外ハ、薩摩守方より返納可仕外、年數之儀老其節相窺可申候、仍如件、

元禄十四年巳五月十二日

松平薩摩守家老

新納市正(久 參)

同

島津勘解由(久 寛)

同

島津中務(久 應)

(御勘定奉行) (良弘)

井戸對馬守様

(同) (重秀)

萩原近江守様

1640

正文在文庫

寫

(同) (因權守、正右)
久貝備前守様
(同) (安藤)
戸川備前守様

一金山爲御入用 公義江御願を被立、中務・勘解由殿・市正殿連印之書付を以、元禄十四巳年金貳萬兩御取替、年々御上納被成來、去十一月十八日迄皆濟上納相濟申外、最前御願之上爲被 仰渡事外間、御用番様に御届可申儀之申談、安藤對馬守様江皆濟御返納相濟外御届、且又御勘定頭寛播磨守様江右之御届御留守居を以申上外、被聞召置外、

一右御金年々御上納之節、御勘定奉行方御裏書御證文被出置、近年老御金奉行より御請取被出置外、右御文鉢ニ皆濟上納之節老、本手形と引替可申旨ニ御座外、此節皆濟上納仕外付外ハ、本手形と御引替可被下哉之旨御留守居附入江清左衛門差出、御金奉行江得御差圖外處ニ御聞置、舊臘廿六日御金奉行山田次右衛門殿より本手形御引替被下相濟申外、

一此跡年々被下置外御證文ハ、右之通惣様差上外付外ハ、

皆濟上納相濟_レ筋之證書少_レ表無_レ之、今度本手形被返下_レ付_ルハ、皆濟上納相濟_レ筋之御裏書_ニ表被仰付可被下_レ付哉、本手形御返被下_レ儀_ニハ_レ得共、皆濟返上相濟_レ譯何_レ之證書無御座_レ付、爲向後_ニ表御座_レ由清左衛門再三申上_レ得共、右躰之證文_ニ御裏書被成_レ儀

表無_レ之御法_ニ付、最早本手形被返下_レ得ハ、夫社慥成證書_ニ由被仰聞、御裏書ハ無_レ之、左_レ及多年御拜借首尾好皆濟上納相濟_レ者無比類事_レ、目出度被思召_レ旨、何_レ表_方御祝儀被仰_レ由清左衛門申出_レ、

一 右本手形ハ爰元右一卷之箱之内_ニ納置可申_レ得共、自然ハ御記錄所_レ被納置_レ筋_ニも可有之哉と存_レ付、今日之便_ニ本手形差越_レ間、何分_ニ表御沙汰次第可被成_レ付、右之一卷ハ定_ル御勝手方歟金山方歟_ニ委曲可有之_レ間、惣樣上納相濟_レ首尾ハ、可被記置儀_レ故、此旨申越_レ、尤爰元_レ表本手形寫_レいたし一卷帳_ニ添置申_レ、是又爲御存_レ、以上、

朱力_キ
享保九年 正月二日

鳴津中務

鳴津内膳殿

鳴津 本殿

伊集院藏人殿

種子嶋彈正殿
名越右膳殿

1641 正文在文庫

御記錄奉行_レ

金山爲御入用

公義_レ御願を被立、鳴津中務・嶋津勘解由殿・新納市正連印之書付を以、元禄十四巳年金貳萬兩御取替、年々御上納被成來、去年十一月迄皆濟御上納相濟、年々御上納之節、御勘定奉行_方之裏書御證文_ニ、本手形御引替被相渡候由_ニ、右本手形江戸_方被差越_レ付、相渡_レ條御記錄所_レ可納置_レ、此跡年々御上納之節被出置_レ裏書御證文ハ、右之通本手形_ニ御引替相渡_レ付_ルハ、皆濟御上納相濟_レ筋之證書外_ニ無_レ之候_ニ付、於江戸ハ金奉行_レ被申上_レ趣共、委細江戸_方之書付_ニ相見得_レ付、相添相渡_レ間、右紙面之趣を以相記可納置_レ、右之通可申渡_レ、以上、

(朱)
「享保九年」二月 (島津久武) 全

1642 吉貴公御譜中

正文在彌勒院

條制

一專守一宗之法式、正八幡宮神前之勤行神事祭禮不可有怠慢事、

一天下安全・國主榮久・本支百世之祈願可抽精誠事、

一末門并支配之輩可受本寺差圖、若相背寺法之族於有之者、速可令沙汰事、

一精密沙門之戒行・顯密之修學可相勵之事、

一不可背國主之制法致私檢斷事、

右條々堅可相守之旨、依

輪王寺一品宮御氣色所定如件、

享保九辰年二月廿八日

十住心院大

僧都覺瀆判

深住解院大

僧都慈延判

大隅州

(給良郡)

彌勒院

正文在文庫

御札令披見々、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悅之旨尤々、將又舊臚妻女歲暮之御祝儀拜領之、難有由得其意々、紙面之趣各一覽之事々、恐々謹言、

朱力キ
享保九年 三月五日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

全上

去年御暇之節被差出々當分養子願書致返進之々、以上、

朱力キ
享保九年 三月六日

水野和泉守

松平大隅守様

1645

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗^六 但京升也

右是^六當辰年御上ヶ米壹萬石二百石宛、琉球國共高七拾貳萬九千五百石餘^二付、七千貳百九拾五石之内辰春之分、

書面之通去卯薩摩米請取御藏に納申所如件、

享保九甲辰年三月九日

(大番) (正直丸)
根岸又兵衛

(大坂御藏奉行、順明)
筒井主税

(同) (正義)
加藤安左衛門

(同) (義房)
朝倉新右衛門

松平大隅守殿

役人中

1646

繼豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及 上

聞、恐、謹言、

朱カキ

享保九年 三月十八日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1647

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及 上

聞、恐、謹言、

朱カキ

享保九年 三月十八日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1648

全上

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤、將又其方病氣

快節參府被同度由從同氏大隅守相達付、奉書之趣被

致承知之段被申越、紙面之通各一覽之事、恐、謹言、

朱カキ

享保九年 三月廿二日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1649

吉貴公御譜中

正文在文庫

御ねん入らせられ、御事御満足と思しめし、よろ

しく心得て申せとの御事、御座、なをくめて

かしく、

二月十八日の御日付にて御ふミ被下、ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めて度思しめし被成りよし、扱者御手まへさま御ひやう氣いまたしかくと御座被成すり付、御心よき節御參府の事御うかゝいの様ニ被成度、大すミの守殿よりお願遊ハしりへハ、御申上被成り通ニ被仰渡、忝思しめし被成りよしにて、御禮御ふいてう被仰上、めてかしく、

朱カキ
享保九年

松平

上總之介さま

御返事人々御中

梅園
さくらゐ

岩倉

お

1650
継豊公御譜中
正文在文庫

なをく御文のやう御満足さ、よろしく申せとの御

事ニ御座り、めてたくかしく、

二月十八日の御日付にて御ふミ被下、ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機嫌よくならせられ、めてたくおほしめし被成

1651

継豊公御譜中

正文在文庫

りよし、扱者 上總之介殿御ひやう氣いまたしかと御さなされりハすりゆへ、御ひやうき御心よき節、御參府の事御うかゝひ被成度よし御願遊ハしりへハ、御申上被成り通ニ被成り様こと被仰出、忝思しめし被成りよしにて、御禮御ふいてう御申上被成、御ねん入らせられり御事ニ思召り、めてかしく、

朱カキ
享保九年

松平

大すミの守さま

御返事人々御中

梅園
さくらゐ

岩倉

お

一 享保九年甲辰正月元日朝五半時、少將繼豊公御家督初
ゐ 五社并護摩所不動・同所稻荷に 御參詣被遊り、御
支度御束帶御懷ニ被爲召候事、
一 五社并護摩所不動・同所稻荷に、御膝着青銅百疋宛御
獻納之事、

一 御供之御家老嶋津左仲支度布衣着用、騎馬ニ御供之事、

但總州様御家督初五社參之節者、御家老兩人御供

二より得共、此節者壹人被仰付外、

一組頭種子嶋平馬(久忠)・町田宇右衛門支度熨斗目半切、御側

御用人穎娃長(久近)左衛門支度布衣、御用人伊集院十藏支度

熨斗目半切、御近習役福山平太夫支度布衣、御納戸奉

行小笠原彦八郎支度布衣、物頭諏方甚六支度熨斗目半

切、御小納戸伊地知次郎八支度布衣、中通御目附五代

傳左衛門・岸喜右衛門・關山軍兵衛・本田信次郎支度

素袍、表御年男町田郷九郎(久忠)・嶋津右平太支度素袍、御

内證御年男新納次郎九郎(時忠)・二階堂十郎兵衛支度素袍、

御同朋兒玉怡阿彌支度熨斗目半切、御厩別當新納悠右

衛門支度素袍着用外の御供相動候事、

但本田信次郎事者表御目附二より得共、中通御目附

差支外付差寄相動外、

一御轅御簾上ケ表御年男相動外事、

一御供番之小番三組共ニ打込御供、支度熨斗目半切、

一右同御先供三組共ニ打込御供、支度不洗物半切、

一陰陽兩御太刀・御ゆたん・御張弓御轅之先キニ左右ニ

持付事、

但足輕上下着持之、

一御朱傘壹本、

但御小者白丁着持之、

一御轅・御駕籠之者拾七人、

但長絹着、

一御挾箱御笠持御草履持、

但白丁着、

一御牽添馬道具大房、

但御中間白丁着、

右之外者例年五社參之御行列ニ不相替外、以上、

享保九年

四月

1652

全上

正文在文庫

一享保九年甲辰正月十七日九時、

少將糺豐公御家督以後年頭初の大雄山 御宮に 御參

詣被遊外、御支度御束帶御轅ニ被爲召外事、

一御宮に御太刀・銀馬代壹枚御獻納之事、

一御供之御家老伊集院藏人支度布衣、御番頭桂太七郎(久忠)・

嶋津右平太支度熨斗目半切、御側御用人伊集院權右衛

門支度布衣、御用人土持十右衛門支度熨斗目半切、御

近習役伊集院仲左衛門支度布衣、御納戸奉行諏方甚六支度布衣、物頭西彦太郎支度熨斗目半切、御小納戸伊地知次郎八支度布衣、中通御目附五代傳左衛門・町田正左衛門支度素袍、御目附堀四郎右衛門・上原後藤兵衛支度素袍、御側御小姓平嶋市左衛門・河田與右衛門支度素袍ニ御供之事、

但御同朋壹人御供ニ候得共、何某相勤外段不相知外、追而相知候節可書加外、

一御先番之御近習役平田平太左衛門支度熨斗目長上下、御納戸奉行小笠原彦八郎支度熨斗目半切、御側御小姓三原吉次郎・海江田半藏・二階堂傳八支度熨斗目長上下、表御小姓赤松甚之助・平田正藏支度熨斗目半切ニ亦相勤外事、

一御供番者小番三拾人、支度熨斗目半切、
一右同御先供五拾入支度不洗物半切、
一御朱傘壹本、

但御小者白丁着持之、

一御挾箱持・御笠持・御草履持白丁着、
一御蓑箱持白丁着、
一御沓籠持白丁着、

一御駕籠之者長絹着、
一御馬道具青好大房、

但御中間上下着、

右之外御供人數御持せ道具等、例年御宮ニ御參詣之節之通ニ不相替外、以上、

朱カキ
享保九年 四月

1653

全上

正文在文庫

一辰正月元日 太守様五社并護摩所不動・同所稻荷江御參詣被遊外次第書付一通、
一右ニ付御供人 總州様御五社參被遊外節ニ相替候段書付一通、

一辰正月十七日大雄山御宮江御參詣被遊外次第書一通、
右後年爲御見合相渡外間、帳面ニ可記置外、以上、

朱カキ
享保九年 四月
川上久重
一學

1654

全上

正文在文庫

享保九年辰正月元日 太守様御家督初而五社參被遊外

付、御供廻之儀 總州様御家督初初五社參被遊遊之節之

御供廻を以奉伺伺處、卯十二月廿三日御近習役平田平

太左衛門御取次を以被仰出趣有之、 總州様 御參詣

之節と者相替替外、其趣左之通通外、

但 總州様御供廻之儀者、墨書之通候、

太守様御供廻者、朱書を以相記記外、

一御家老貳人、支度布衣、騎馬二御供、

(朱) 「御家老壹人、支度布衣、騎馬二御供、」

一組頭御供無之候、

(朱) 「組頭貳人、支度熨斗目半切、」

一御側御用御供無之候、

(朱) 「御側御用人壹人、支度布衣、」

一御用人貳人、支度熨斗目長上下、

(朱) 「御用人壹人、支度熨斗目半切、」

一御側目附壹人、支度熨斗目長上下、

(朱) 「御近習役壹人、支度布衣、」

一表御目附壹人、支度熨斗目長上下、

(朱) 「御目附御役被仰付置外得共、御役柄相替外、尤御

目附御供無外、」

一物頭貳人、支度熨斗目長上下、

(朱) 「物頭壹人、支度熨斗目半切、」

一御納戸奉行貳人、支度布衣、

(朱) 「御近習役之儀者前條相記外、」

一御小納戸役貳人、支度熨斗目長上下、

(朱) 「御小納戸役壹人、支度布衣、」

一通御目附御供外、

(朱) 「中通御目附四人、支度素袍、

内壹人者表御目附差寄相勤、」

一表御年男貳人、支度布衣、

(朱) 「表御年男貳人、支度素袍、」

一御内證御年男御供無外、

(朱) 「御内證御年男貳人、支度素袍、」

一御同朋壹人支度熨斗目半切、

(朱) 「御同朋壹人、支度熨斗目半切、」

一御廐別當壹人、支度素袍、

(朱) 「御廐別當壹人、支度素袍、」

一御供番之御馬廻三組共二打込御供、

内拾人支度素袍其外者熨斗目長上下、

(朱) 「御供番之小番三組共二打込御供、支度熨斗目半

切、」

1655

一右同御先供三組共打込御供、支度不洗物半切、

(朱)

「御供番之御先供三組共ニ打込御供、支度不洗物半

切、」

一右外之御行列者

(繼豊)

太守様・總州様御供廻、共ニ例年五社參御供之通ニ

相替儀無之、

右後年爲御見合書付相渡候間、帳面ニ可記置、以

上、

(朱)

「享保九年」四月

(川上久恵 一學)

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤、紙面之趣各申談及 上

聞、恐、謹言、

朱カキ

享保九年

四月六日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

1657

1656

全上

誠に幾萬、年も御繁昌の御事にて、いく年も相か
はらすと祝入せられ、一入御悦さ、御手前さまに
も愈御無事ニおハしまし、よしきかせられ、めてた
く思しめし、何もよく心得て申せとの御事に御
さ、返、かしく、

閏四月御日付にて文下され、まつく

一位様御機嫌よくならせられ、何之御さハリもあらせ

られず、御膳も御心さまよく御手付まいらせられ、

御心易思しめし被成、扱は御機嫌御窺と御座

て、御目錄之通御上ケ被成、則披露いたしまいらせ

ハ、かすくめてたく御満足さ、めてたくかしく、

朱カキ

享保九年

方

まつ平

御返事

上總介さま

人々申給へ

さくらる

岩 倉

梅 園

継豊公御譜中

正文在文庫

御札令披見、

公方様益御機嫌能成御座、正月廿四日増上寺 御靈屋
御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上
聞候、恐々謹言、

朱力
享保九年 四月六日 松平左近將監
乘邑判

松平大隅守殿

1658 全上

返くよろしき様ニ申せとの御事ニ御座外、めてか
しく、

御ふみ被下ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めて度おほしめし被成
外よし、扱は正月晦日さくら田御やしき近方出火の節、
御たつね被遊外ニ付、使をもて御別條あらせられ外ハす
外御事うけ給まいらせ外ハ、御禮被仰上、御ねん入ら
せられ外御事御満足ニ思しめし外、かしく、

(朱)
「享保九年」

松平

大すみの守様

人々御中御返事

梅 園

いは倉

さくららる

あ

1659 継豊公御譜中

正文在正龍寺

廣濟寺住持職事、任先例可令執務之狀如件、

享保九年閏四月九日 少將繼豊御判

玄孛西堂

1660 全上

正文在出水幸善寺

(島津繼豊)
(花押 No.5)

高百斛

右先是、加紫久利大明神社頭就

中將吉貴公御再興、今度爲社領所寄附之也、全可領知之

狀如件、

享保九年閏四月十一日

加紫久利大明神別當

(田水)
幸善寺

1661 全上

正文在出水幸善寺

金幣

右先是、加紫久利大明神社頭就

中將吉貴公御再興、今般

太守繼豐公被寄附之早、永備于神前全御武運長久萬民快

樂之御祈禱可被抽丹精者也、仍副狀如件、

享保九年甲辰閏四月十一日

名 右膳
恒渡判

種 彈正
久基判

伊 藏人
久矩判

島 左
久武判

島 内膳
久兵判

島 大藏
久春判

加紫久利大明神別當

幸善寺

全上

正文在出水幸善寺

知行目錄

高百斛

大口之内 出水之内

名寄帳別冊有

右先是、加紫久利大明神社頭就

中將吉貴公御再興、爲社領今度

少將繼豐公被寄附之、御寄進狀所被成下也、全令所務無

怠慢宜被抽御祈禱者也、仍執達如件、

享保九年甲辰閏四月十一日

名 右膳
恒渡判

種 彈正
久基判

伊 藏人
久矩判

島 左
久武判

島 内膳
久兵判

島 大藏
久春判

加紫久利大明神別當

幸善寺

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物到來歡覺候、委曲安藤對馬守可述外也、

(朱) 享保九年 五月三日



薩摩少將殿

1664

繼豐公御譜中

正文在彌勒院

國分之内小嶋兩島御用迦之諸木彌勒院薪山ニ御預被仰付之旨被 仰出、山奉行致見分御用木老帳面記置外條、右外之諸木支配可有之旨、去卯七月北郷作左衛門書付を以雖被申渡置外、彌勒院儀老常法華讀誦定護摩致執行外、右通之寺院外ニ無之外故、從 吉貴公重御取立爲被遊御事外、依之 太守繼豐公思召を以、御用木共都の彌勒院江被召附之旨重外被 仰出外、外之寺山之老譯相替外間、餘例ニ老罷成間敷外、以來存此旨可有支配外、仍如件、

享保九年辰五月廿三日

鳴津内膳

久兵判

正八幡宮別當

彌勒院法印御房

1665

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及 高

聞外、恐々謹言、

(朱カキ)

享保九年

六月朔日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1666

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌被相伺之外、益御勇健御事外間可御心易外、

隨而纏節一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合

外、恐々謹言、

(朱カキ)

享保九年

六月五日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

1667

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞外、恐々謹言、

(朱)

「享保九年」 六月朔日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1668

全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御儀外間可御

心易外、隨る目錄之通被獻之外、各申談遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

(朱)

「享保九年」 六月五日

松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

1669

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面趣各申談及 上聞
外、恐々謹言、

朱力キ
「享保九年」 六月十一日

松平左近將監 乘邑判

松平上總介殿

1670

繼體公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上

外、恐々謹言、

(朱)

「享保九年」 六月十一日

松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

1671

全上

正文在島津大學

大隅國大始良之内木谷村者、爲其方知行之處、今度一所
之地申付之條至子孫全可領知之狀如件、

「享保九年」六月十五日 御判

嶋津周防殿(久徳)

1672 全上

正文在島津大學

此節大始良之内木谷村壹所之地被仰付ハ、然者漸々家來共召移、一所之勤表可有之ハ處、木谷少高ハ間、右木谷ハ差添ハ大始良野里村高之内、八百石方限を以周防殿持高ハ繰易被仰付、山野迄々木谷之内ハ被召附ハ條、此段承知可被成ハ、以上、

(朱)
「享保九年」辰六月十五日 伊集院藏人(久徳)

1673 繼豐公御譜中

寫正文在文庫

石河土佐守様御家來礮部惠左衛門ハ、佐久間九右衛門(盛)辰六月廿八日罷越、口上ハ申達ハ趣

松平大隅守領分銅山之儀、領内町人共依願問掘差免置、其後檢使差遣遂吟味ハ得者、銅氣少々無之ハ付、御内々木脇智左衛門致伺公申上置ハ趣御座ハ、然處右山ハ銅繼計掘出ハ由、頃日國元ハ申來ハ、少々之儀ハ御座ハ故、御届申ハ者無御座ハ得共、最前申上候趣相違ハ罷成候

故、此段申上ハ、御序を以被仰上置可被下旨申達ハ得者、

員數如何程出ハ哉と相尋候付、當正月ハ五月初比迄七拾貫目程掘出候旨申越ハ、繼計之儀ハ銅山と申ハ者無御座ハ得共、最前申上置ハ者相違仕候付、御斷迄ハ致伺公ハ由申達ハ處、具致承知御尤之儀存ハ、銅鍊杯者右式納之儀ハ者用々難達物ハ、金杯ハ者候得者格別ハ通致挨拶、入御念ハ趣者、土佐守致他出ハ間、歸次第可申候ハ、右ハ付者最早追ハ御挨拶者申間敷と惠左衛門申候由、九右衛門申出ハ事、

(朱)
「享保九年」

1674 吉貴公御譜中

正文在神社奉行所

神社奉行ハ淨光明寺(鹿兒島)

一得佛様御影 從(島津忠久)
總州様御寄進被遊ハ付、御安置所之儀、淨光明寺御位牌壇上座ハ被遊御安置、御四代様御位牌者順々被成御座ハ、
一御影御厨子調方、繪形之通唐戸厨子被仰付ハ、

1675

一御四代様御位牌・御厨子共ニ繪形之通此節調替被仰付
外、

一得佛様御影御安置被遊儀外間、御位牌者調替不及、御
厨子迄を

御四代様御厨子同然調替被仰付外、左外右 御影之脇
御位牌御安置被遊筈外間、此段被致承知、淨光明寺に

可被申渡外、尤 御位牌・御厨子之儀御物調替被仰付外
間、御法之通可被申出外、

右之通可申渡外、以上

朱力子
享保九年 七月

(島津久春)
大藏

全上

扣正文在淨光明寺

島津高祖從五位下忠久公者

右大將賴朝卿之長庶子也、治承三年産于攝州住吉、元曆

二年七歲賜伊勢國須可御莊・波出御厨、文治二年八歲

封島津御莊薩隅日三州守護職、其外領所、莊園、同年

八月始至薩州撫國民誅不臣、同五年歲十一、

右大將征奥州之役擢爲副將、其後補若狹・越前兩國守護

職、或如鎌倉述職、或歸薩州行政、嘉祿三年六月十八

1676

日逝于鎌倉、壽四十九、法名得佛道阿彌陀佛、歸葬薩
之廳府、建石塔藏遺骨、今本立寺之寶塔是也、其後創

建淨光明寺安尊牌、爾來國統嫡嫡相承、相續而至

二十一代前薩隅日三國太守兼領琉球國正四位下左近衛

中將源吉貴公、公退之後邈思高祖勲德、兼歎有尊牌無

靈像、且以向來丙午歲當五百年之忌辰故、豫爲追福降

命於淨光明寺十九世現住其阿上人寂翁、使佛工鳥居孝

重彫刻尊像、安置淨光明寺、仰願高祖尊像鎮座、永世

神靈如在、因此功德頻申多福極護國統延至無窮、國家

安泰萬民快樂故 命臣書其旨趣、納尊像體中、併垂不

朽、

享保八年(1797)龍次昭陽單闕黃鐘吉旦

臣肥後藤之丞基偉謹識

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面趣各申談及 高聞

外、恐々謹言、

享保九年 七月十九日

安藤對馬守 重行判

松平上總介殿

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤ニ外、紙面之趣各申談及言

上外、恐々謹言、

〔享保九年〕 七月十九日

安藤對馬守 重行判

松平大隅守殿

繼豐公御譜中

正文在文庫

覺

年頭御着座之次第、向後客居主居之無差別、御對面

所客居之方ハ一流ニ着座被仰付外、一流ニ相殘外人數

者、又一座二座ニ人数次第ニ可被仰付外、

鳴津兵庫殿 (久保)

鳴津玄蕃殿 (實徳)

鳴津左衛門 (久保)

鳴津周防殿 (久徳)

川上一學 (久保)

鳴津圖書 (久倫)

鳴津内膳 (久兵)

鳴津中務 (久實)

右圖書・内膳・中務家同格ニヨリ三年代リニ家格之場ニ

着座仕來候得共、圖書事乍同格無役ニヨリ、大御目附之

引次月並御禮御座之間ニ罷出事候付、當分者右名書之

通圖書上座ニ可罷出外、中務・内膳御役付ル者、於御

書院着座被仰付外家格之場ニヨリ共罷出事外、先役者

中務ニヨリ候得共、内膳嫡子島津藤次郎寺社奉行御役相

勤、中務嫡子嶋津又七事御番頭相勤外付、當分者藤次

郎、次ニ又七可罷出外、至後年者部屋栖無役之者者、

親之御役次第ニ罷出善外、家督ニヨリ其身無役之者同格

之家者、年生次第ニ上座可仕候、此儀者時々其時節之

御役又者年生を以前後之沙汰可致外、

鳴津 (久武)

鳴津將監殿 (久實)

鳴津助之丞 (久白)

右將監殿・助之丞家同格ニ有、隔年ニ家格之場ニ着座

仕事候得共、將監殿御役内ニ有養子嶋津小平(久幸)太丞御番

頭相勤外、助之丞事無役ニ有外故、當分者右之通着座

被仰付外、尤後年之儀及都の前條之通相しらへ可申外、

新納菊千代(特尊)

右四男家ニ有候得共、先祖之勲功を以三年ニ一度嶋津

李家着座之場ニ罷出來外、此節一流ニ被仰付外有表、

三年ニ一度者此内之通李家之場ニ着座被仰付、其外者

此場ニ着座被仰付外、且又李家ニ部屋栖有之、一所ニ

着座仕候時者、李家之次ニ三年ニ一度ツ、着座被仰付

外、

樺山主計(久初)

嶋津筑後(久應)

桂太七郎(久志)

喜入主膳(久志)

町田郷九郎(久徳)

伊集院藏人(久想)

嶋津帶刀(久色)

嶋津内記(久文)

右帶刀・内記家同格、着座之次第前條同格之家同斷ニ

可相心得外、

北郷 四郎

嶋津權太夫

大野七郎太夫(久近)

吉利李右衛門(久徳)

右七郎太夫・李右衛門家同格、着座之次第前條同斷、

種子嶋津正(久善)

右彈正家只今迄者四日ニ着座仕來候得共、今度年頭御

禮着座都る一列ニ被仰付候付、三日ニ此連名之通着座

被仰付外、

嶋津仁十郎殿(久想)

頼娃長左衛門(久近)

禰寢内記(清方)

入來院主馬殿(定徳)

比志嶋隼人(範勇)

肝付典膳

菱刈孫兵衛(重之)

諏方甚六(研善)

河田助右衛門(國勝)

右之通 思召を以、向後年頭御禮着座被仰付外、尤右

寫

一(久年)兵庫殿(久傳)・周防殿(實傳)・玄蕃殿正月三日年頭御禮着座之節、

向後於 御座之間御太刀進上着座可被仰付、右三人格別之御間柄之故、右之通被仰付儀家格付る被仰付事

之無之、其身一世右之通被仰付、嫡子方家格之通御對面所之御太刀進上着座可被仰付、

一右三人家格之次第、兵庫殿・玄蕃殿・周防殿と有之事候得共、當分之御取持之付、月次御禮之通兵庫殿・

周防殿・玄蕃殿と着座可仕候、尤家筋之付る者、何ぞ相替儀無之候、

一(久傳)島津大學事向後御對面所之、周防殿家格之場之、
島津(久傳)左衛門次御太刀進上之着座可仕、

一若御年寄・大御目附、此内者正月三日御禮御受被遊事
外得共、向後御家老同日元日御太刀進上可仕、

一只今迄老年頭御座配と唱候得共、向後年頭御禮着座と
唱、書付等之及右之通可仕、

右之通向後被仰付、以上、

朱力キ

享保九年

七月

大藏

之内病氣差合等之着座御斷申出外時者、其家之着座

之場不明置、右連名之次第一流之着座可仕、同格

之家者、其時親之御役又者子供之御役を以相糺、家

督之無役之者者、年生次第上座之罷出候儀、時々相

替替候間、前條右書之趣を以、御記録奉行しらへ之上

罷出外様可申付、尤以後しらへ迄之難致儀者、時

々可相伺、只今迄者御對面所之客居・主居之雙方

之着座仕來候得共、自今客居之方一流之着座被仰付、

一於御書院年頭御禮着座被仰付人数者、右御對面所着

座之準、客居之方一流之着座被仰付、島津周防殿今

度一所持之被仰付付、御對面所着座被仰付、左

候得者御書院之之上座之者島津大藏罷出者、

一御對面所之年頭御禮着座之節、此内者客居・主居之

着座仕付、御城代御家老其外相詰り人数常式列座之

席より引下り相詰事得共、今度客居一流之着座被仰

付る者、平生御出座之節之通主居之方は列座可仕、

御書院之年頭御禮着座之節及右之準列座可仕、

右之通被 仰付外間、此旨承知可被致、以上、

朱力キ

享保九年

七月

(島津久傳)
大藏

全上

寫正文在文庫

寫

御記錄奉行江

年頭御禮着座之次第、向後別紙之通被仰付_レ付、書付貳
通渡置_レ條右之趣致承知、向後右書付之旨を以し_レらへ可
申候、若難致譯_及外ハ、可得差圖_レ、尤右書付之旨趣後
年紛敷無之様帳面可記置_レ、

右之通可申渡_レ、以上、

朱力キ
享保九年 七月

大藏

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻_レ外、遂披露候之處、一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱力キ
享保九年 八月三日

松平左近將監
乘邑判

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

全上

正文在出水幸善寺

掛物 觀音立于蓮一葉佛像
狩野探幽守信筆箱入 一幅

右先年加紫久利大明神社頭、就中將吉貴公御再興、右掛
物箱蓋裏被記旨趣今度被寄附早、全令寶納之、至後年不
可有違失者也、仍副狀如件、

享保九年甲辰八月三日

加紫久利大明神別當

幸善寺

(義國)
右京 久守判

吉貴公御譜中

吉貴壽算遇_二今年五十休辰_一也、繼豐歡愉之餘欲_レ憑_二近
衛左大臣家久公_一、求_二和歌_一爲_二屏風_一、帖_レ之以_二壽_一于吉
貴_一賀_中初度上、使_下江州蘆浦觀音寺住願王院正僧智周
号編爲_中先容上、

家久公善之、遂與_二平松從三位時春卿及石井前權中納言行
康卿・交野左兵衛權佐時度朝臣_一、相俱各詠_二和歌三首_一、
近衛前攝政家照公_一見_二染筆_一也、乃命右京權大夫丹波賴

庸^工、令^レ畫三四時之景狀於屏風、每^二一時景狀^一配^二帖和歌^一三首、而賜^レ之、繼豐歡喜、則呈^三書翰^一奉^レ謝^レ之、詳具^二左方^一、

1684 正文在島津因幡忠通

賀屏風和歌

春帖 左大臣家久公

夏帖 平松從三位時春卿

秋帖 石井前權中納言行康卿

冬帖 交野左兵衛權佐時度朝臣

右

清書 前攝政家熙公

畫 右京權大夫丹波頼庸

1685 正文在島津因幡忠通

春

霞める野に若菜つむところ

軒の櫻に朝日のさしたるところ

岸の松に藤の咲たるところ

夏

平松^(時春)三位

^(近衛家)左大臣殿

むらさめに郭公の啼ところ
沼水に菖蒲ひくところ
木かけに人の納涼する所

秋

石井^(行康)中納言

庭に萩咲たるところ

河水に月のうつれるところ

紅葉のうすくこく満たる所

冬

交野^(時度)左兵衛權佐

山に時雨ふるところ

池水に水鳥あそふところ

竹に雪の降かゝりたる所

1686 全上

正文在島津因幡忠通

左大臣

百年のなかはの霞わけ初て若菜も千世を袖に摘つゝ

朝日影梢をてらすいゑさくらにほふか上に長閑さそそふ

さかりてハカゝれふちなみはなかつら^{本ケマ、(母)}きしなるまつの萬

代まてを

時春卿

1687

ほとゝきすはつねまちえていまよりはあかすかたらへむ
らさめの空
ぬま水に千夜松(代)させるあやめくさひく人さへやはひの
ふらむ
あすもこむおもふにかなふすゝしさはいはね松かけ水の
なかれて

行康卿

三首アリ詠メス、文字ノ順序モ分ツス

時度朝臣

冬來ぬとそらにもしるし雲かゝる外山はけさや時雨降ら
む
ところから千世もすむへきいけ水になれもなれてそ遊ぶ
をしかも
草も木も皆白妙のいろなからみとりまかへぬ雪のむらた
け

以上ノ御歌文字詠カネ写違モアルヘン

全御譜中

扣正文在右筆所

一筆致啓上り、左府様弥御勇健被成御座、玆重奉存り、
然者内々申上り同氏上總介賀之屏風、古代より之御式法

1688

色々有之内、御賢慮之上宜格御差圖被成被下、詠歌并
繪之儀表思召を以銘々被仰付、其上色紙形御清書之儀
前攝政様(定御象懸)に被仰上り處、此度之儀格別被思召り故、被染御
筆り之旨、委細編詞方(寫題)に被仰含り趣々具承知仕、誠に御
懇之御事忝次第御座り、屏風頃日相届り、別る結構出來
大慶仕り、右御禮爲可申上如斯御座り、隨り目錄之通致
進上之り、此旨宜預洩達り、恐々、

朱力ナ
享保九年

八月四日

進藤左馬頭殿(長富)

今大路兵部少輔殿(孝道)

全上

扣正文在右筆所

一筆致啓上り、前攝政様弥御勇健被成御座玆重奉存り、
然者同氏上總介賀之屏風相調り付る、色紙形御清書之儀
從 左府様被仰上り處、今度之祝儀格別被思召、御染筆被
成被下、頃日相届致拜見り、右御清書者故實有之、不容
易御事之由り處、被盡御心り儀誠に御懇之至忝次第奉存
り、御禮爲可申上如此御座り、隨り目錄之通致進上之り、
此旨宜預洩達り、恐々、

朱カキ
享保九年 八月四日

中川石見守殿
(長 堅)

全上

扣正文在右筆所

一筆致啓達_レ、貴様御堅固珍重存_レ、然者同氏上總介賀
之屏風調_レ付_レ、御詠歌被成被_下由致承知、御懇情之
程忝存_レ、御禮爲可申入如此御座_レ、隨_ル目錄之通_致進

覽_レ之_レ、恐惶、
恐惶、

朱カキ
享保九年 八月四日

石井前中納言様

平松三位様

交野左兵衛權佐様

全上
正文在文庫

此よし何もよく申せとの御事御さ_レ、かしく、

七月十一日の文被_下、まつく、
(天英院、家喜室)
一位様御機嫌よくならせられ_レ、めてたく思しめし被成

外へく_レ、扱は

一位様より暑氣御たつねとして、御奥かたへ御もくろく
の通參らせられ_レへハ、忝なく思しめしなされ_レよし、
御禮おほせあけられ、御ふみのやうひろういたしまいら
せ_レ得ハ、敷く御満足ニ思しめし_レ、めてかしく、

朱カキ
享保九年

松平

上總介さま

御返事
人々御中

いは倉
梅その
おくらい

一織豊公

一女子

一女子

一忠五郎

一貴儔

一女子

一女子

於弘

享保九年甲辰八月六日誕生、母相良大藏長賢女、

同十一年丙午五月三日天亡、

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間可御心易外、

隨而御干肴一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕

合外、恐々謹言、

朱力年
享保九年

八月十二日

松平大隅守殿

水野和泉守

忠之

全上

寫正文在文庫

(稱權)

薩州山川と申津より琉球那覇と申所に致着船外、海上

道程貳百四拾里餘後可有御座外、

一琉球那覇津より唐福州閩安鎮と申津に致着船外、海上

道程之儀若薩州に相知不申外、琉球に申越相知候趣申

來外節可申越旨國元方申越外、以上、

朱力年

享保九年

三月

吉貴公御譜中

正文在文庫

琉球那覇より唐福州閩安鎮と申津迄海上道程四百九拾里
餘後可有御座候、右道程薩州に相知不申外付、琉球に申
越可相糺旨當春國元方申越り處、於琉球及何そ書留等及
無之、海上之儀外故大概申傳之趣、右之通御座外と琉人
申外旨、頃日薩州より申越外、以上、

(朱)
「享保九年」八月

(朱)
「右薩州より琉球・唐に之道程里數等之儀、松平加賀守
様御聞被成度旨、御城坊主星野久務に御頼被成り由、久
務方川上五後右衛門に申達外付、御國元に申越返答之趣
を以、當春右之通川上五後右衛門より久務に書附遣候、
且又辰七月八日那覇より閩安鎮迄之道程、御國元方書付
被遣外付、八月十三日右之通書認、五後右衛門より久務
に遣外様こと申達相渡候、此貳通之書附 公義に爲被書
上儀こそ無之外得共、ケ様之儀公私共ニ申筋致逼り外
若如何數事外故、以來爲見合此帳ニ記置候事、」

返く何もよろしく申あけまいらせ外、めてたくか
しく、

七月十六日付にて御ふミ被下り、

公方様益御機けんよく御座なされ、御めてたくおほしめし由、しかれハ六月十一日暑氣之御たつねとして、おくさまへ御もく禄(禄)のとをり被遣りて、有かたく覺しめしりとの御事御禮仰上られり御ふミのおもむき、よろしく披露いたしまいらせり、めてかしく、

朱カキ
享保九年

八月十八日

カ

三	室
豐	岡
高	せ
外	山
尾	のえ

まつ平
上總介様 御返事
人々御中

御對面所

御太刀進上之席下之敷居より二枚目頭

一御太刀一腰

一御馬壹疋

直馬

屏子門之内ニる請取渡可仕り、

一右同斷

鳴津玄蕃殿(貴器)

一右同斷

鳴津左衛門(久重)

一右同斷

鳴津周防殿(久勝)

一御太刀一腰

一御馬壹疋

一右同斷

川上一學(久東)

一右同斷

鳴津中務(久實)

一御太刀一腰

一御馬壹疋

直馬

鳴津圖書(久倫)

屏子門之内ニる請取渡可仕り、

右中務・内膳・圖書家同格ニる、此以前者三家共ニ別

御座ニおゐて御太刀進上有之り故、三年代り之差別無

之候、此節一列ニ被仰付りニ付る者、今度被相定り年

繼豐公御譜中

寫正文在文庫

覺寫

八朔御太刀・御馬進上仕來り家々、此跡進上之場所段々相替り、今度年頭年頭(符外)御禮着座、思召を以一統ニ被仰付り付る者、八朔進上物之儀々、年頭御禮着座之御格式ニ準、左之通被仰付り、

頭御禮着座之御格式ニ準シ、御役無役を以中務・内膳・

圖書と次第被仰付外、圖書事中務・内膳同格之御役を

及相勤事ニ外ハ、圖書頭被仰付筋ニ及可有之外得共、

當分其身之格式を以、右之次第被仰付外、至後年八年

頭御禮着座ニ付、先達被仰出置外御書付之趣を以相

しらへ可申外、

一御太刀一腰

一御馬壹疋

一右同斷

一右同斷

右將監殿・助之丞家同格ニ外、此以前御太刀進上隔年

ニ前後有之外、今度被相定外年頭御禮着座之御格式ニ

準シ、將監殿御役之内者、頭ニ御太刀進上被仰付外、至

後年老年頭御禮着座之通、同格之家者其身御役之順、

無役之者老年生を以前後之沙汰可致外、

一右同斷

右者此以前虎之間ニ御太刀進上仕外、此節一列ニ被

仰付外者老年頭御禮着座同前、三年ニ一度嶋津左家之

次ニ御太刀進上被仰付外、右之外者此席ニ御太刀

進上可仕外、

一右同斷

一右同斷

直馬

屏子門之内ニ請取渡可仕外、

右之兩家此以前より御太刀進上隔年ニ前後有之外得

共、此儀年頭御禮着座ニ不相並外間、右之次第被仰付

外、

一御太刀一腰

一御馬壹疋

一右同斷

一右同斷

一右同斷

一右同斷

一右同斷

右帶刀・内記家同格ニ外、此以前御太刀進上隔年ニ前

後有之外、年頭御禮着座之御格ニ準、帶刀御役内者頭

ニ被仰付外、後年之儀者前條同格之家と同斷、

一右同斷

直馬

榊山主計(久初)

嶋津筑後(久忠)

直馬

屏子門之内ニ請取渡可仕外、

右之兩家此以前より御太刀進上隔年ニ前後有之外得

共、此儀年頭御禮着座ニ不相並外間、右之次第被仰付

外、

桂(久善) 太七郎

喜入主膳(久善)

町田郷九郎(久善)

伊集院藏人(久善)

嶋津帶刀(久忠)

嶋津内記(久忠)

北郷四郎

直馬

屏子門之内ニ請取渡可仕外、

直馬

北郷四郎

直馬

屏子門之内ニ請取渡可仕外、

一 御太刀一腰

一 御馬壹疋

一 右同斷

一 右同斷

右七郎太夫・全右衛門家同格ニ有、此以前御太刀進上

隔年ニ前後有之外、年頭御禮着座之御格ニ準シ、七郎

太夫御役之内素頭ニ被仰付、後年之儀素前條同格之

家同斷、

一 右同斷

直馬 屏子門之内ニ有請取渡可仕、

右者此以前虎之間ニ有別立有御太刀進上有之外得共、

年頭御禮着座之次第を以此一列被仰付、

一 御太刀一腰

一 御馬壹疋

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

右之兩家此以前より御太刀進上隔年ニ前後有之外、此

儀年頭御禮着座不相並、間、右之次第被仰付、

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

一 右同斷

右惣人數此前御太刀并直馬進上之場所段々相替、年

頭御禮着座之次第ニ準シ、向後於

御對面所、右之次第ニ御太刀進上仕、直馬進上之人數

表惣の屏子門之内ニ有、右之次第ニ被仰付、

菊之間 御太刀進上之席下之敷居より二枚目頭

一 御太刀一腰

一 御馬壹疋

一 右同斷

比志嶋(範房)

肝付(兼如)

菱刈孫兵衛(重之)

諏訪(重兼)

川田助右衛門(國忠)

頭御禮着座之次第ニ準シ、向後於

御對面所、右之次第ニ御太刀進上仕、直馬進上之人數

表惣の屏子門之内ニ有、右之次第ニ被仰付、

菊之間

御太刀進上之席下之敷居より二枚目頭

一 御太刀一腰

鳴津(久春)

鳴津(久忠)

鳴津(久忠)

鳴津(久忠)

鳴津(久忠)

鳴津(久忠)

伊集院半太夫(鳥津基明)

富山式部殿(正純)

鎌田小藤次(正純)

一右同斷

伊勢 兵部(貞)

右人數此以前より於菊之間、御太刀進上仕外、年頭御禮着座於御書院被仰付事外得共、御對面所ニ被召出外人數と、一列ニ老難被仰付外條、以前之通菊之間ニ御太刀進上被仰付外、

虎之間之事

御廣間 御太刀進上之席中數居より式枚目、中紙進上之席下數居より式枚目取

一御太刀一腰

一御馬壹疋

名越 右膳(貞)

一右同斷

義岡 右京(久)

一右同斷

嶋津彦 大夫(久)

一右同斷

平岡八郎 大夫(久)

一右同斷

島津 登(久)

一右同斷

二階堂 舍人(行)

右人數中紙進上仕來外得共、大御目附以上御役之儀老格別之儀外條、諸地頭持同前ニ中紙進上仕外儀、御役ニ付外不相應ニ外、依之此節より右之人數御役之内者、

御太刀進上被仰付外、此已後一所持・一所持格外之者、大御目附以上之御役被仰付外節者、家筋ニ無構御役之内者御太刀進上可被仰付外、

一御太刀一腰

一御馬一疋

川上 縫殿(久)

右此以前より杉之間ニ御太刀進上仕外、向後此席ニ被仰付外、

一中紙三束宛

新納次郎 四郎(久)

桂 仁治 太郎(久)

新納 右衛門(久)

町田 宇右衛門(久)

伊集院 十藏(久)

山田 新助(有)

右六人地頭職ニ無之外者、八朔中紙進上可仕旨被仰付置外、右次第を以此席ニ中紙進上被仰付候、

一中紙三束宛

諸地頭

右御役次第を以、以前之通八朔中紙進上被仰付外、

右老今度年頭御禮着座思召を以一統ニ被仰付外付外八朔進上物之儀老年頭之御格式ニ準、右之通被仰付外條向後右之次第可仕外、勿論同格之家前後之沙汰

ニ付外者、右仰出之通時々相替等候間、以來共御記

錄奉行にしらへ申渡、此節被相定外右御格式ニ可申付外、若しらへ迄ニ難決儀老時々可相伺外、

右之通明日可申渡外、以上、

御取次

享保九年七月廿七日

四郎左衛門

十太夫

將監殿

御家老中江

1696 正文在文庫

八朔御太刀進上之席、此跡段々相替候ニ付、今度年頭御禮着座之格を以別紙之通被仰出外付、其旨申渡寫壹通相渡外條奉得其意、至後年粉敷無之様帳内ニ可記置外、以上、

享保九年九月

个

1697 歙豐公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺外、委曲水野和泉守可述外也、

享保九年九月七日



薩摩少將殿

1698 吉貴公御譜中

正文在義岡彈正

(紋)



此紋ヲ可付外、

左平太忠守と可名乗り、

享保九年九月九日 (印文「吉貴」)

義岡源右衛門へ

1699 継豊公御譜中

享保九年九月十二日

吉宗公使安藤對馬守重行來于櫻田之第一、賜歸國之告於繼豊、白銀百枚・白縮緬三十卷拜戴之、翌十三日繼豊登レ營、於黒書院一拜三謁

吉宗公、奉レ禮謝賜レ告、時

公加レ懇篤之尊言、因先規賜龍蹄一匹、奉レ禮謝

全上

之一、且芝邸留守勤之家老島津中務久貫從_三先躡_一、獻_三上御太刀一腰・御馬代白銀一枚・紗綾二卷_一、奉_三拜謁將軍家_一、水野壹岐守忠定奏_三達之一_一、乃退去、

1700
全上

正文在文庫

請取申米之事

米合三千六百四拾七石五斗者

但京升也

右是孝當辰年御上ヶ米壹萬石二百石宛、琉球國共高七拾貳万九千五百石餘ニ付、七千貳百九拾五石之内、當辰秋半分之積、書面之通去卯薩摩米請取御藏_ニ納申所如件、

享保九甲辰年九月十四日

根來八左衛門○
尖番(長傳)印

筒井主悅○
尖坂御藏奉行(願明)

加藤安左衛門○
右(正番)同(正番)

朝倉新右衛門○
右(同)同(備房)

松平大隅守殿

役人中

正文在琉球國國司

爲年頭之嘉儀、被差渡使簡、殊如目錄送給之入念_レ段令祝着_レ、猶期後喜之時_レ、恐惶不宣、

朱力_キ
享保九年

九月廿一日 少將繼豐御判

謹上 中山王

1702
全上

正文在琉球國國司

芳墨令披閱_レ、當春御鷹之羈致拜領_レ爲祝儀、以具志頭親方太刀一腰・馬代白銀百兩并目錄之通被相贈之、入念_レ之段忻然之至_レ、恐惶不宣、

朱力_キ
享保九年

九月廿一日 少將繼豐御判

謹上 中山王

1703
全上

正文在琉球國國司

今度御領國中御檢地被 仰付_レ得共、琉球國之儀者訴之譯有之、御檢地者被成御免、盛增高被 仰付_レ、依之當辰年より出物上納之筈_レ得共、冠船以來物入之儀

相續、國中出分被申付置、冠船方拜借銀表來申年迄、返上相濟事、翌酉年より出物被仰付被下度旨訴訟被申出、無據差支譯被、聞召達、願之通酉年より出物被仰付、可被奉承知候、

一琉球國中引並之儀、當時困窮節外得者、急相調儀者難成候間、時節見合憲法致沙汰、何分と承可申出由、今度御配當之儀者、以前之御檢地及多年作人之多少、地面之親疎有之、農人稼穡差支、御藏入・給地共徵納相滞所、及有之由相聞得、此度御領國中一統と引並致配當、以來國中之潤と成、上下致安堵様こと之御事外故、琉球國迄御檢地被、仰付筈之處、近年百姓差迫外由訴之趣有之、檢使被差渡儀者被差扣、寛永年間之盛増半分被仰付、最早琉球高爲被相定事、右之通盛増及輕ク被仰付、此旨得と承知仕、引並之儀者時節見合時宜次第可被申付儀勿論候間、右之旨趣委細致承知、攝政・三司官江可申達、

以上、

朱力キ
享保九年
九月

種子嶋彈正(久基)

繼豐公御譜中

同年九月二十七日繼豐發芝邸、家老島津内膳久兵・名越右膳恒渡、側用人伊集院權右衛門久盛、近習役及旅入山澤十太夫盛香等扈從駕、經東海驛十月十四日著伏見旅亭、同月十九日出旅亭、下河流、即日著大坂旅亭、同二十五日駕船、十一月十四日著豐前大里、自是歷九州驛路、同月二十七日止宿薩州大口郷、十二月朔日出蒲生郷(給良郡)、小隊而詣大磯館、面謁老君吉貴、而後入薩府城、

繼豐公御譜中

扣止文在浄光明寺

奉遷

邦君高祖忠久公之尊像并五祖之尊牌之御座、表白之文竊以源深而流遠本立而道成、仁恩高於須彌智德深於大海矣、奉爲

先君 前薩隅日三國太守左近衛中將源吉貴公同刺史少將源繼豐公彫刻

鼻祖得佛公之尊像乃至五祖之尊牌、再新建大殿高堂等悉皆落成、準擬祇陀太子之寄捨於樹林門屋須達長者之創建祇園精舍焉、維時享保九年甲辰小春朔旦寅刻、奉遷

繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆致啓達候、雖寒冷之節上總介様 大隅守様弥御安康
 可被成御座と珎重思召外、然者兼而被仰入外御太刀二腰
 被進之、當時名譽之作、別の御感悦不少外、依之主水正・
 主馬首へ聊白銀如目錄并堂上方寄合書・六歌仙一通宛被
 遣之外、於色紙者被相添如何外哉、各御料簡次第兩人へ
 御傳達可被成外、右之趣宜申達之旨
(近衛家久)
 左府公御内意外、恐く謹言、

元祖之靈像與五祖之尊牌之御座于新殿、絲府縣繪燃燈散
 華燒香雕造芬陀利華雜作奇花異英莊嚴道場如同七重寶
 樹髣髴八功德池矣、今日延屈六十餘口之僧伽令勤修大
 法事、是此供養三寶者恰如頻婆娑羅王之供給、世尊更
 似波斯匿王之供施聖衆伏願依斯大善根福德因緣功德彌
 陀覺王滿足本誓海觀音勢至接手悲願海
 五祖之尊靈受成等正覺增進佛道之妙樂外護之大檀越國家
 安康子孫繁茂延壽比北州千歲世福方南瀛萬寶矣、
 時享保九稔龍集闕逢執徐孟冬朔旦

淨光明寺十九世其阿上人寂翁敬白

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、
 公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分
 之儀以使者被相伺之外、紙面之趣承届候、恐く謹言、
朱力キ
 享保九年 十一月三日
 戸田山城守 忠眞判
 松平大隅守殿

享保九年 十月十六日

山科越(範)中守(正) 範判

今大路兵部少輔(孝道) 孝判

中川石見守(長堅) 長判

進藤左馬頭(長寛) 判

今大路治部大輔(孝在) 判

進藤刊部大輔(長之) 判

鳴津内膳殿(久巳)

名越右膳殿(恒徳)

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又參勤時分
義以使者被相伺之外、及 上聞外處、如御定來年三月中
可致參府由被 仰出外條可被存其趣外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十一月四日

松平左近將監
乘邑判

安藤對馬守
重行判

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間、可御心易
外、隨而小熬海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段
之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十一月四日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

全上

今度

(徳川家宣)
文昭院様十三回御忌御法事御執行付る、以使者御香奠被
獻之外、於増上寺奉納之事外、右之趣及言上外、恐々謹
言、

朱力キ
享保九年 十一月十三日

安藤對馬守
重行判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

大樹吉宗公之

儲君長福公諭十一月十五日稱二

若君十二月五日可稱二諱於

家重公之令上、

全上

正文在文庫

今度

(徳川綱吉)
常憲院様十七回御忌之御法事御執行付る、以使者御香奠
被獻之外、於東叡山奉納之事外、右之趣及言上外、恐々
謹言、

朱カキ
享保九年 十一月廿九日

松平大隅守殿

松平左近將監
乘呂判

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御てまへさまも御ふしの御事めて度思し
めし、御きけん御うかゝひ被成、御満足におほしめ
しゆとをり、よく申せとの御事ニ御さ外、かしく、
十一月五日の文くたされ外、寒中ことのほかひえくし
く御座外得共、

一位様御機嫌よく御座被遊、何の御障もあらせられ外ハ
て、御膳なども御むしなくめしあけられ外、御心易
思しめし被成外へく外、寒中の御機嫌御うかゝひ御座外
て、御目錄の通

一位様へ御あけなされひろういたしまいらせ外得ハ、か
すく御満足ニ思しめし外、めてかしく、

朱カキ
享保九年

松平

上總介さま

御返事

人々御中

梅その

いは倉

あ

繼豊公御譜中
寫正文在文庫

寫

御記録奉行に

一壹所持・壹所持格・寄合・寄合並之ニ男・三男・四男、
初ぬ之 御目見仕外節、進上物之儀其家々ニ付ぬ進上
物仕來外品者、有來通可被仰付外、且又二男・三男・
四男 御目見之節進上物仕外例無之外ハ、時々遂吟
味可相伺外、其砌何分表可被 仰出外、

一小番之者之内ニ表嫡子三種貳荷、又者貳種壹荷御太刀
進上仕外、右二男以前より進上仕來外品者、有來通可
被仰付外、且又二男之進上物仕外例無之、新規ニ願出
外者有之節者遂吟味可相伺外、

右之通被仰付外間、此段承知仕帳面可記置旨可申渡
外、以上、

朱カキ
享保九年 十二月

(島津久春)
大藏

吉貴公御譜中

さくらい

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様御機嫌被相同之外、益御安全御事之間可御心易外、
隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、
恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十二月九日

松平上總介殿

松平左近將監
乘邑判

1716 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見候、就寒中

公方様御機嫌以使者被相同之外、益御安全之御儀之間可
御心易外、隨而琉球紬十端并鏝節一箱被獻外、各申談遂
披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十二月九日

松平大隅守殿

松平左近將監
乘邑判

1717 繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨而蜜柑二箱・
炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段之御仕合外、
恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十二月十五日

松平大隅守殿

松平左近將監
乘邑判

1718 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

(徳川家宣)

文昭院様十三回御忌御法事於増上寺御執行相濟、十月十
四日 御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之

趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保九年 十二月廿二日

松平大隅守殿

松平左近將監
乘邑判

1719 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方樣益御機嫌能被成御座、今度

文昭院樣十三回御忌御法事於增上寺御執行相濟、十月十

四日

御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悅旨尤候、紙面之趣各申

談及 上聞外、恐々謹言、

朱力平

享保九年 十二月廿二日

松平左近將監

乘邑判

松平上總介殿

1720 繼豐公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平左近將監
可述外也、

朱力平

享保九年 十二月廿七日



薩摩少將殿

(表紙)

吉 貴 公

享 保 十 年

繼 豐 公

追 舊 記 雜 錄 卷 六 十 二

1721

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱力_キ

享保十年

正月十一日

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿
(島津吉貴)

1722

全上

1723

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱力_キ

享保十年

正月十一日

松平左近將監

乘邑判

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1724

全上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之、遂披露_レ處一段之御仕合_レ、恐_レ謹言、

朱力_キ

享保十年

正月十一日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1725

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者舊冬

(家重)

若君様御弘之儀被承之、目出度被存由得其意外、依之被

差越使者外紙面之趣、各申談及 高聞外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 正月十一日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1726

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、然者舊冬

若君様御弘之儀被承之、目出度被存由得其意外、依之被

差越使者外紙面之趣、及言上外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 正月十一日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1727

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊冬御一門方諸大

名其外御禮相濟外段被承之、目出度被存由尤外、紙面趣

各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 正月十九日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1728

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊冬御一門方諸大

名其外御禮相濟外段被承之、目出度被存由得其意外紙面

之趣、及言上外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 正月十九日

安藤對馬守

信賢判

松平上總介殿

1729

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊冬御一門方諸大

名其外御禮相濟外段被承、目出度被存由尤外、紙面之趣

各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年
享保十年 正月十九日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1730
全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊冬御一門方諸大名其外御禮相濟外段被承之、目出度被存由尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力年
享保十年 正月十九日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

1731
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、舊冬(編志)常憲院様十七回御忌御法事於東叡山御執行相濟、去十一月十日御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱力年
享保十年 正月廿一日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1732
繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、舊冬 常憲院様十七回御忌御法事於東叡山御執行相濟、去十一月十日御靈屋 御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

正月廿一日

水野和泉守
忠之判

松平大隅守殿

1733
吉貴公御譜中

正文在文庫

舊冬

若君様御禮被爲請外付、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之外、遂披露外之處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年
享保十年 正月廿六日

安藤對馬守
信賢判

全上

松平大隅守殿

正月廿六日

安藤對馬守

信賢判

若君様御禮被爲請り付、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之り、遂披露り之處一段之御仕合り、恐々謹言、

舊冬

正文在文庫

繼豐公御譜中

松平上總介殿

正月廿六日

享保十年

朱力キ

水野和泉守

忠之判

謹言、

若君様御禮被爲請り付、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合り、恐々

舊冬

全上

松平上總介殿

舊冬

若君様御禮被爲請り付、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之り、各申談遂披露り處一段之御仕合り、恐々謹言、

享保十年 正月廿六日

朱力キ

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

御ふみのやう御目錄の通御あけなされひろういたしまいらせりへハ、めて度御満足に思しめしり、此よし何もよく申せとり、なをめてたくかしく、十二月廿一日の文被下り、まつく

公方様

一位様御機嫌よく御座被遊、御めて度思しめし被成りよし、然者

(家尊)

長福様御成長あそハされり付、御廣目御座りて

若君様と稱しさせられり仰出され、去冬十一月廿一日御

表へ 出御被遊、御一門様かた其外諸御禮請させられり

御事御聞被成、めて度思しめし被成、御祝儀として使者

にて仰上られりよしにて、御祝儀と御座りて、めてかし

く、

朱力キ
享保十年

あ

いは倉

まつたいら
御返事
上總介さま

梅その
さくらい

人々御中

1736
吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、舊臘

若君様は御名乗被進り段被承、目出度被存由尤り、依之

被差越使者り、紙面之趣各申談及 高聽候、恐々謹言、

朱力キ
享保十年
正月廿九日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

1739
全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、舊臘

若君様は御名乗被進り段被承之、目出度被存由得其意り、

依之被差越使者り紙面之趣、及言上り、恐々謹言、

朱力キ
享保十年
正月廿九日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

1740
繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、舊臘

若君様は御名乗被進り段被承、目出度被存由得其意り、

依之被差越使者り紙面趣、各申談及 上聞り、恐々謹言、

朱力キ
享保十年
正月廿九日

水野和泉守

忠之判

松平大隅守殿

1741
全上

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、舊臘

若君様は御名乗被進り段被承、目出度被存之由得其意

り、依之被差越使者候紙面之趣、及言上り、恐々謹言、

朱力キ
享保十年
正月廿九日

安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

繼豊公御譜中

正文在文庫

如承意

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊臘御表に 出御

諸御禮被爲請、目出度御儀候、依之被指越使者外ニ付預

示諭、御念入之段欣然之至存外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年

正月晦日

松平大隅守殿

水戸宰相

宗堯判

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御悦仰あけられ御満足のよし、何もよく申

せとの御事御さ外、かしく、

十二月廿七日の文くたされひろういたしまいらせ外、ま

つく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ御めてたさ、去冬十二月朔

日 若君様へ御諱進られ御事御聞被成、めてたくおほ

しめしなされ外よし、右之御祝儀と御座りて御ふみのや
う御念いらせられ御事、御満足と思しめし外、めてか
しく、

朱カキ

享保十年

松平

上總介さま

御返事

人々御中

いは倉

梅その

さくらい

全上

なをく御念入られ御事、何もよく申せとの御事

御さ外、めてかしく、

十二月廿八日の文被下ひろういたしまいらせ外、

一位様御機嫌よくならせられ外、御心易思しめし被成外

へく外、扱は十二月三日寒氣御尋として御てまへさま御

奥かたへ御目録の通参らせられ外へハ、御懇の御事御て

まへさまも、かたしけなくおほしめし被成外よし御禮

仰あけられ、御ふみのやう御念いらせられ御事御満足

と思しめし外、めてかしく、

朱カキ

享保十年

あ

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、舊冬御表 出御諸

御禮被爲請、誠目出度御事外、依之御念入外段欣然之至

存外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年 二月朔日

尾張中納言

繼友判

薩摩少將殿

御報

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 若君様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟

と目出度被存由得其意外、猶以御機嫌被相伺外、弥御

安全之御事外間可御心易外、隨る御樽肴被獻之外、遂披

露外之處一段御仕合外、恐々謹言、

まつたいら

御返事

上總介さま

人々御中

いは倉

梅その

さくらい

全上

御札令披見外、如承改年之慶賀珍重外、

公方様 若君様益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟

と目出度被存由得其意外、猶以御機嫌被相伺外、弥御安

全御儀外間可御心易外、隨る御樽肴被獻之外、各申談遂

披露外處一段御仕合外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年

二月二日

松平左近將監

乗邑判

松平大隅守殿

全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、舊臘

若君様は御諱被進、誠目出度御事外、仍御念入外段欣然

之至存外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年

二月三日

尾張中納言

繼友判

薩摩少將殿

御報

朱カキ
享保十年 二月二日

松平大隅守殿

安藤對馬守

信賢判

1749

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

舊臘松平伊賀守連判之列被仰付外段被承之、珍重由得其

意外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 二月四日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1750

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

舊臘松平伊賀守連判之列被 仰付外段被承之、珍重由得

其意外、紙面之趣各申談及言上外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 二月四日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

1751

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月十日東叡山 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及 上

聞候、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 二月九日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

1752

全上

御札令披見外、

公方様 若君様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、將又

舊臘妻女歲暮之御祝儀拜領難有由得其意外、紙面之趣各

一覽之事外、恐々謹言、

朱力キ

享保十年 二月九日

松平左近將監

乘邑判

松平大隅守殿

1753

繼豐公御譜中

正文在文庫

芳翰令披見外、舊冬廿一日

公方様 若君様御表出御、諸御禮被爲請、目出度御儀外、

依之入御念外段欣然之至存外、恐々謹言、

享保十年 二月十五日
紀伊中納言 宗直判

松平大隅守殿
御返報

1754 全上

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿四日増上寺 御靈屋

御參詣之儀被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣各申談及言上

外、恐々謹言、

享保十年 二月十八日
松平左近將監 乘邑判

松平大隅守殿

1755 繼豐公御譜中

正文在文庫

國許に御暇之節被差出外當分養子願書、致返進之外、以上、

享保十年 二月廿六日
水野和泉守

松平大隅守様

1756 繼豐公御譜中

正文在文庫

明十一日五半時登

城參勤之御禮可被申上外、以上、

享保十年 三月十日

松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1757

全上

家來兩人 御目見被 仰付外之間、召連可被罷出外、以上、

1758

繼豐公御譜中

去歲十二月二十六日繼豐發府城述職于東武、家老島津内膳久兵・名越右膳恒渡、若年寄平岡八郎大夫之品、用人頼娃長左衛門久周、近習役米良藤右衛門重賢・山澤十大夫盛香・河野八郎左衛門通興等從駕、既而歷九州之驛、今歲正月十四日著豐州大里矣、於是港同十五日駕船、同二十八日到攝州大坂津、翌日入旅亭、二月三日出旅亭、泝于川流到城州伏見、同四日發旅亭、經伊勢路東海驛、同二十五日入武州高輪亭、

謁_二于適母_一直到_二著芝亭_一矣、於是三月四日

上使松平左近將監乘邑來_二于吾櫻田亭_一勞_レ之、同十一日繼

豐登_レ營奉_レ謁_二于

大樹吉宗公、獻_レ御太刀一腰・白銀五十枚・縮緬二十卷

于吉宗公、御太刀一腰・白銀五十枚于

儲君家重公_甲也、此日依_二先躰_一、家臣島津久兵・名越恒渡

奉_レ拜_二謁_二于

台顏_一、各進_二獻御太刀一腰・馬代銀一枚・紗綾二卷_一、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見_レ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山 御靈屋

御參詣儀被承之、恐悅旨尤_レ、紙面之趣各申談及 上聞

外、恐_レ謹言、

朱カキ

享保十年

三月廿二日

水野和泉守

忠之判

松平上總介殿

繼豐公御譜中

正文在文庫

明廿八日例月之御禮無之_レ間、不及登 城候、以上、

朱カキ

享保十年

三月廿七日

松平伊賀守

松平左近將監

水野和泉守

松平大隅守殿

全上

扣正文在江戸家老座

上納申金銀之事

米高三千六百四拾七斛五斗

金貳千八百拾三兩三分 銀貳匁壹分後藤 常是 藤包

内壹分判三分

右者爲上ケ米壹萬石ニ付百石宛、當巳春御張紙直段

三拾五石ニ付貳拾七兩之積を以、高七拾貳萬九千五

百石分當春半分書面之通上納申所、仍如件、

松平大隅守内

佐久間九右衛門盛村

享保十乙巳年三月

御金奉行(忠) 短
戸田忠兵衛殿

(同) (刑政)
山田治右衛門殿

(同) (宣忠)
深津八左衛門殿

(同) (高) 黒澤直右衛門殿

正文在文庫

請取申金銀之事

米高三千六百四拾七石五斗

金貳千八百拾三兩三分 銀貳匁壹分

後藤包
常足

右老爲上ケ米壹萬石ニ付百石宛、當巳春御張紙直段
三拾五石ニ付貳拾七兩之積を以、高七拾貳萬九千五
百石分當春半分上納、仍如件、

享保十年巳三月廿六日 有人坂 黒澤直右衛門

(御金奉行) 戸田忠兵衛〇

(同) 深津八左衛門〇

(同) 山田治右衛門〇

松平大隅守殿
役人中

吉貴公御譜中

正文有文庫

御札令披見外、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日増上寺

御靈 (ママ)

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤外、紙面之趣各申談及言上
外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年

四月七日

松平上總介殿

松平伊賀守

忠周判

全上

なをく御機けん御うかゝひ被成、文のやう敷く
御満そくこ思しめし外、此由何もよく心得りて申せ
との御事に御座り、かしく、

四月五日之御日付にて文下され披露致まいらせ外、まつ

一位様御機嫌御すくれ不被遊り御事御聞被成、御やうた
い御窺なされり御事、何も御念入まいらせられり御事こ
思しめし外、ひとつる様もよほと御勝れあそハされす外へ
とも、段く快然の御事にて今ほとは御平生之通ニ御
機けんよく、御さへくしくならせられ外まゝ、めて度
御心やすくおほしめし被成まいらせ外、めてたくかしく、

朱力キ
享保十年

岩 倉

方

松平

上總介さま 御返事

人々申給へ

梅園

さくらゐ

全上

なをく今ほとハなを御機嫌よく御さへくしく成
らせられり、御心易思しめし被成り、何もよく申せ
との御事御さり、かしく、

五月朔日の文被下り、まつくさきの比

一位様御機嫌御勝れ不被遊り所、御快然あそハされ、三
月廿七日ニ御床場させられり御事御聞被成、めてたくお
ほしめし被成りよし、御ふみのやう御目錄の通、
一位様へ御あけなされひろういたしまいらせりへハ、か
すく御満足ニ思しめしり、誠にくとをくの所御床
あけさせられり、御めてたさ仰上られ御念いらせられり
御事ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ
享保十年

まつたいら

上總介さま

御返事

人々御中

いは倉

梅その

さくらゐ

方

全上

なをく何も宜しく申上まいらせりへくり、以上、
文下されり、まつく

公方様

大納言様御機嫌好成らせられ、御めてたく覺召させられ
り由、倍ハ先月十一日御同氏大隅守殿御參勤之御禮仰上
られ

若君様へ初め御目見へ仰上られ、重疊かたしけなき仕合
に思召りとの御事、かすく御めて度さ右之御禮仰上ら
れ、御ふみのやうよろしく披露いたしまいらせりへくり、
めてたくかしく、

朱カキ
享保十年

み空

豊をか

たか瀬

外山

尾之上

方

松平

上總介様

御返事人々御中

吉貴公御講中

正文在文庫

なをく何もく御念いらせられ御事思しめし
り、御てまへさまも御ふしの御事めて度おほしめ
しり、此よしよく申せとの御事り、かしく、
文くたされり、まつく

公方様

一位様御機嫌よくならせられ、御めてたくおほしめし被
成りよし、扱は御同氏大隅守殿参勤の御禮御しゆひよく
仰上られ御事、御てまへさまも有かたくおほしめし
なされりよし、御念いらせられ御ふみのやう、ひろう
いたしまいらせり得ハ、かすく御満足思しめしり、めて
かしく、

朱カキ
享保十年

まつ平

御返事

いは倉

右

上総介さま

梅その

人々御中

さくらい

吉貴公御譜中

正文在文庫

幾久しく萬く年も御さうきかせられりハんとめて
たさよろしく申せとの御事御さり、したひニ暑氣ニ
移りまいらせりまくなを御かまいなき様ニよく申せ

との御事ニ御さり、なをくめてたくかしく、
一位様より申せとの御事ニ御座り、其後素文ニても御た
つねまし被進りことく、一入とをくしくおほしめしり、
まつく

一位様御機けんよくならせられりま、めてたくおほし
めし被成へくり、いよく御手まへさまかはらせられり
御事もおはしましりハすり哉、かすくきかせられ度思
しめしり、此御目錄のとをり誠に御美しからぬ御事な
から、あまりくとをくしくおほしめしりニ付、御ふ
にて仰まいらせられ、しるしまてこまいらせられり、め
てたくかしく、

朱カキ
享保十年

松平

岩倉

右

上総介様

梅園

人々御中

櫻井

今御譜中

正文在文庫

御札令披見り、
大納言様益御機嫌能被成御座、先頃初る隅田川邊被爲

成外段被承之、恐悅旨尤外、紙面之趣及言上外、恐々謹言、

宋力平
享保十年 六月十二日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

1770 吉貴公御普中

今茲享保十年

敕使中院正二位前大納言通躬卿・中山正二位前大納言兼親卿、院使坊城正二位前大納言俊清卿既下、向于江都、乙巳四月九日

家重公元服於營中、敍任從二位大納言也、加冠并伊掃部頭直惟、理髮松平肥後守正容、烏帽子役水野和泉守忠之勤之、吉貴在國聞之、使家臣市來勘左衛門政洪發薩府至東武芝邸、於是六月二十六日政洪候執政水野忠之第一、呈吉貴書牒、且演說所含來之旨趣、翌二十七日政洪登營勤使職、吉貴獻上御太刀一腰、御馬一匹代金十兩于

大樹吉宗公、同品于

儲君家重公、奉賀三元服・任槐之兩伴、亦奉賀天英

院殿、有進獻、委開于後、

1771 繼豐公御普中

今茲享保十年

敕使中院正二位前大納言通躬卿・中山正二位前大納言兼(藤原兼盛)親卿、(藤原俊忠)院使坊城正二位前大納言俊清卿既下、向于江都、乙巳四月九日

儲君家重公元服于營中、敍任從二位大納言也、即日繼豐登奉賀之、同十一日

大樹吉宗公爲祝賀冠義及任槐、嘉招敕使・院使於城中大設饗應、奏舞曲、備覽觀矣、繼豐亦蒙尊命、候于營拜見焉、以故繼豐翌日至于執政各館、奉申謝之、同十八日又登營奉

兩公、獻御太刀一腰・馬代金十兩于吉宗公、同品于家重公、奉賀三元服任槐之太禮、

1772 繼豐公御普中

正义在文庫

猶以御禮之儀者、御能見物之翌日各宅可被相越外、

以上、

今度御元服御官位之爲御祝儀、明後十一日

敕使 院使御馳走之御能被 仰付外、其節可致見物旨被

仰出候、五半時可有登 城外、以上、

朱力キ 享保十年 四月九日
松平伊賀守 (忠 周)

(兼 邑) 松平左近將監

(忠 之) 水野和泉守

松平大隅守殿

1773

全上

明十五日例月之御禮無之外間、不及登 城候、以上、

朱力キ 享保十年 四月十四日

松平伊賀守

松平左近將監

水野和泉守

1774

繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝御香具一箱并丸鬘斗一箱被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十年 四月十六日

忠周判

1775

全上

今朝御香具一箱并丸鬘斗一箱被獻之外、遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ 享保十年 四月十六日

信賢判

在口裏 松平大隅守殿 在右裏 安藤對馬守信賢

1776

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、卍子單物到來歡覺外、委曲水野和泉守可

述外也、

朱力キ 享保十年 五月三日

薩摩少將殿



1777

全上

爲端午之御祝儀、以使者御卍子單物被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

在口裏 松平大隅守殿 在右裏 松平伊賀守忠周

繼豐公御譜中

朱力キ 享保十年 五月三日 安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1778 繼豐公御譜中

正文在文庫

今朝御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

朱力キ 享保十年 五月九日 乘邑判

存口裏 松平大隅守殿 存右裏 松平左近將監乘邑

1779 全上

今朝御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

朱力キ 享保十年 五月九日 信賢判

存口裏 松平大隅守殿 存右裏 安藤對馬守信賢

正文在文庫

今朝御馬一疋被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐

々謹言、

朱力キ 享保十年 五月十二日 乘邑判

存口裏 松平大隅守殿 存右裏 松平左近將監乘邑

1781 吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

大納言様御元服御官位相濟、四月十八日御一門方諸大名

其外御禮被爲請外段被承之、目出度被存之由得其意外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱力キ 享保十年 六月十六日 安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

1782 全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、今度

大納言様御元服御官位相濟、四月十八日御一門方諸大名
其外御禮相濟外之段被承之、目出度被存由尤外、紙面之
趣及 上聞外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年 六月十六日

水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1783 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同之、益御安全御儀外間
可御心易外、隨而鏝節一箱被獻之、遂披露外處一段之
御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年 六月十八日

安藤對馬守
信賢判

松平上總介殿

1784 全上

御札令披見外、就酷暑之節

公方様 大納言様御機嫌被相同之、益御勇健御儀外間
可御心安外、隨而鏝節一箱被獻之、各申談遂披露外之

處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年 六月十八日 水野和泉守
忠之判

松平上總介殿

1785 全上

なをく御機けん御うかひ被成、御満足さよろし
く心得外て申せとの御事ニ御さ外、かしく、
御ふみ被下ひろういたしまいらせ外、まつく土用中こ
との外暑さニ御さ外へ共、

一位様御機けんよくならせられ、暑氣の御さハリあらせ
られ外ハす外まゝ、めて度思しめし被成へく外、御機嫌
御うかひ、ことに相かわらす此御目録の通御あけ被成、
御満足ニ思しめし外、幾久しく萬々年も御機けん御うか
ひ被成外様こと思しめし外、めてかしく、

朱力キ
享保十年

右

松平

御返事
上總介さま
人、御中

岩倉
梅園
櫻井

正文在文庫

今朝琉球布一箱・砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球盛酒(泡脱)二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々

謹言、

朱力年

享保十年

六月十八日

忠之判

右口裏

松平大隅守殿

存右裏

水野和泉守忠之

今朝琉球布一箱并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之外、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年

享保十年

六月十八日

信賢判

右口裏

松平大隅守殿

存右裏

安藤對馬守信賢

繼豐公御譜中

正文在文庫

今度

大納言様西丸御移徙爲御祝儀、以使者御樽肴被獻之候、遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年

享保十年

六月廿三日

信賢判

右口裏

松平大隅守殿

存右裏

安藤對馬守信賢

端午之御内書可相渡外間、明日五半時 御城江家來可被差出外、以上、

朱力年

享保十年

六月廿四日

水野和泉守

松平大隅守殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度

大納言様御元服御官位相濟、御禮被爲請外付外、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之外、各申談遂披露候處、一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ
享保十年 六月廿七日
水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

1791
全上

今度

大納言様御元服御官位相濟、御禮被爲請り付る、以使者
御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之り、遂披露り之處一
段之御仕合り、恐々謹言、

朱カキ
享保十年 六月廿七日
安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

1792
吉貴公御譜中

正文在文庫

返く御祝儀仰あけられ、めて度御満足ニ思しめし
り通何もよく申せとの御事御さり、めてかしく、
五月十八日の文被下り、まつく

公方様 大納言様御機嫌よく御座被遊、御めてたさ

一位様益御機嫌よく御座被遊り、めて度思しめし被成り
へく外、此たひ

大納言様御元服御官位ニ付て、去月十八日諸御禮濟せら
れり御事、御めて度思しめしなされりよしにて、御使者
にて仰上られり由、御目錄の通

一位様へ御あけなされひろういたしまいらせりへハ、か
すく御満足ニ思しめしり、めてかしく、

朱カキ
享保十年

まつたいら 御返事 岩 倉
上總介さま 梅 その
人、御中 さくらい

1793
吉貴公御譜中

〔前諸縣郡〕
高原故常教院神徳院坊中廢壞矣、於是享保十年再興而建之
大藏、改號龍洞院、于時吉貴已老矣、是以恩賞寵遇多
出ニ於襲封之君、然實則吉貴之志也、

1794
全上

正文在文庫

御札令披見り、

公方様益御機嫌能被成御座、四月廿日東叡山 御靈前

御參詣之儀被承之、恐悦尤り、紙面之趣各申談及 上聞

外、恐々謹言、

朱カキ
享保十年 七月三日

松平伊賀守
忠周判

松平上總介殿

1795
全上

尚く御ふみのやう御ねん入らせられ御事におほしめしり、めてたくかしく、

六月廿五日の御日付にて御ふみ被下、ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機けんよくならせられめて度思しめし被成りよし、扱はひとあまりことをくしさのまゝ、御ふてにて仰付られ御事まで、御もくろくの通あらしくしき御しなまいらせられりへハ、御禮被仰上御満足と思しめしり、いく久しく萬々年も御さうきかせられり様と、めてたさよく申せとの御事、御さり、かしく、

朱カキ
享保十年

松平

上總介さま
御返事

人、御中

岩 倉
梅 園
さくらら

1799
繼豐公御誥中

同年七月十六日 上使大森半七郎來于芝第一、賜尊鷹所ニ擊執之雲雀於繼豐上、乃詣于執政各館、奉謝之、

1797
繼豐公御誥中

正文有文庫

明十五日例月之御禮無之、間、不及登城、以上、

朱カキ
享保十年 八月十四日

松平伊賀守
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1798
繼豐公御誥中

扣正文在右筆所

令海門和尚住玉龍山福昌禪寺疏

梵刹巍峨親肇先世起信法輪照耀正依智日開基矧此

先皇敕願之場抑亦舊邦積善之蹟已經三百餘年之曆數乃關

四十七世之主盟爰覺照山妙谷禪寺海門和尚道骨方礮德

音已著箕裘不墜傳洞下之眞燈文采難藏稱社中之上首故

移狖座以登龍山益舉楊嵩山之風頻發揮曹溪之令提起綱

紀則古徳之清規準據典型作後毘之永式恭祝、
聖朝之實算宜祈邦家之安寧故疏、

享保十年八月二十一日

少將繼豐

1799

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、六月十九日 大

納言様西丸御移徙之段被承之、目出度被存由得其意外、

紙面之趣各申談及 上聞外、恐々謹言、

朱カキ
享保十年

八月廿五日

松平左近將監

乗邑判

松平上總介殿

1800

全上

御札令披見候、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、六月十九日 大

納言様西丸御移徙之段被承之、目出度被存之旨得其意外、

紙面之趣及言上外、恐々謹言、

朱カキ
享保十年

八月廿五日

安藤對馬守

信賢判

松平上總介殿

1801

吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく御ふみのやう御満足さよろしく申せとの御

事ニ御座外、かしく、

七月廿一日の御日付にて御ふミ被下、ひろういたしま

らせ外、まつく、

一位様御機けんよくならせられ、めて度思しめし被成外

よし、扱ハ六月十九日

大納言様西之丸へ御移徙被遊外御事、めて度思しめし被

成外との御事にて、御悦被仰上御満足におほしめし外、

幾久しく萬々年も御はんしやう遊ハし、温せぬ御めて

たさのミと祝入らせられ外、めてかしく、

朱カキ
享保十年

外

松平

上總之介さま

人、御中

御事

岩 倉

梅 園

さくらゐ

吉貴公御諱中
正文作文庫

なをくよろしく御禮の通申上まいらせり、幾久しく相替す御いたゞき被成りやうにと存まいらせり、めてかしく、

七月廿一日付にて文下されり、

公方様御機嫌よくならせられ御めてたさ、扱ハ六月廿二日暑氣御尋として御奥方へ御もく録之通拜領被成、有かたく思しめしりよし御禮仰あけられ、文のやうひろういたしまいらせり、めてたくかしく、

朱力キ
享保十年

カ

三 室
豊 岡
高 瀬
外 山
おのえ

松平
上總介様
御返事人、御中

今

なをく御ふみのやう御ねん入らせられり御事こおほしめしり、めてたくかしく、

七月廿一日の御日付にて御ふみ被下、ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めて度思しめし被成りよし、扱は六月十八日暑氣御尋まし被遊、おくさまへ御目録の通まいらせられりへハ、御禮被仰上御満足におほしめしり、いく久しく萬々年もと御めてたさよく申せとの御事ニ御さり、めてたくかしく、

朱力キ
享保十年

カ

岩 倉
梅 園
さくらゐ

松平
上總之介さま
御返事人、御中

1804
全上

幾萬々年も御はんしやう遊ハし、相かわらす土用御たつね被遊り様と思しめしり、なにもよく申せとの御事ニ御さり、なをくめてたくかしく、御ふみ被下ひろういたしまいらせり、まつく

一位様御機嫌よくならせられめてたく思しめし被成りよし、さてハ土用御尋ましの御事までこをくさまへ御もくろくのとをりまいらせられりへハ、御禮被仰上御満足こ

思しめし外、めてたくかしく、

朱力キ
享保十年

松平

御返事
上總介さま

人々御中

いは倉

梅園

さくらら

b

全上

萬々年もとめてたさよろしく申せとの御事ニ御座
外、なをくかしく、

御ふみ被下ひろういたしまいらせ外、まつく

一位様御機けんよくならせられ、めて度思しめし被成外
よし、扱者暑氣御たつねましの御事まで外、おくさまへ
御もくろく之通まいらせられ外へ者、御手まへ様かたし
けなく思しめし被成外よしにて、御禮被仰上御満足ニ思
しめし外、まことに幾久しく、めてかしく、

朱力キ
享保十年

松平

御返事
上總之介さま

人々御中

岩倉

梅園

さくらら

b

古貴公御書中

正文在文庫

いく久しく萬々年も御機けん御うかゝひ被成外様
ことおほしめし外、御香御すき被遊りまゝ御かう道
くあれこれと御引かへさせ遊ハし外ニ、めつらしき
焼物御しん上被成さうく御慰ニなり、かすく御
満足さいかほともよろしく申せとの御事ニ御さ外、
なをく御ちやわんも中々御意ニ入、御ひそう遊ハ
し外ぬ、御心さしのほと、ことの外御満足ニ思しめ
し外、^{本マ}□の申せとの御事ニ御さ外、かしく、
七月廿五日の御日付にて御ふみ被下ひろういたしまいら
せ外、まつく

一位様御機けんよくならせられ外まゝ、めてたくおほし
めし被成へく外、當年ハ残暑つよく御座外へ共、御せん
なども御手つかせられ、御障あらせられ外ハすけまゝ御
心安思しめし被成へく外、扱ハ薩州にて此以前御調被成
外よしにて、にしき手焼物并此御さかな御目録のをり
御しん上被成、御満足ニ思しめし外、にしき手焼物ひと
つく御らん遊ハし外所、しほらしき物共美しき焼物ニ
てなかめ入らせられ外、誠ニ遠く御心付被成外て、御

しん上被成り御事、大方ならずおほしめしり、めてたく
かしく、

朱カキ
享保十年

松平

上總之介さま

人、御中

御返事 さくららる

岩 倉
梅 園

あ

1807

吉貞公御譜中

正文在文庫

今度

大納言様西丸御移徙爲御祝儀、以使者鯛一箱被獻之外、
遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年

八月廿七日

安藤對馬守

信賢判

松平上總介殿

1808

繼豐公御譜中

正文在琉球國司

爲年頭之嘉儀被差渡使簡、殊目錄之表送給之、入念外段
令祝着外、猶期後喜之時外、恐惶不宣、

1809

朱カキ
享保十年 九月二日 少將繼豐御判

謹上 中山王

全上

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖一重到來歡覺外、委曲松平左近將監
可述外也、

朱カキ

享保十年

九月七日



(島津總督)
薩摩少將殿

1810

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲重陽之御祝儀、以使者御小袖一重被獻之外、遂披露外
處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ

享保十年

九月七日

安藤對馬守

信賢判

松平大隅守殿

1811

全御譜中

同年九月十二日

大樹吉宗公使_三執政松平伊賀守忠榮來_于櫻田第一、賜_三歸國之告於繼豐、依_三先規_二拜_一領白銀百枚・紗綾三十卷、

翌十三日繼豐携_三家臣_二登_レ營_レ應_レ奉_レ謝_レ之也、雖_レ然有_レ故而不_レ能_レ登_レ營_レ
家臣名藏右藤恒茂同年九月十二日罹病捐館東武少郎、繼豐外叔父而以忌中之故也

之執政_一、同_二二十一日繼豐登_レ營_レ拜_レ謁
吉宗公_一、奉_レ謝_レ賜_レ告之辱_一、時蒙_二懇言_一賜_二御馬一匹_一、

同日從_二先格_一、家老島津大藏久春亦奉_レ拜_レ謁
吉宗公_一、獻_二御太刀一腰・馬代銀一枚・紗綾二卷_一、

1812 繼豐公御譜中

正文在文庫

請取申金銀之事

米高三千六百四拾七石五斗

金貳千七百九兩貳分 銀四匁三分者

後藤包
常是

右者爲上ヶ米壹萬石_二付百石宛_一、當巴夏御張紙直段
三拾五石_二付貳拾六兩之積を以_一、高七拾貳萬九千五
百石分當秋半分上納、仍如件、

(御令奉行)
深津八左衛門〇

享保十年巳九月十八日

(同) 黒澤直右衛門〇
(同) 戸田忠兵衛〇
(同) 山田治右衛門〇

松平大隅守殿
役人中

1813 繼豐公御譜中

正文在文庫

明廿一日五半時登 城御暇之御禮可被申上_レ、以上、

朱力キ 享保十年 九月廿日
松平左近將監
水野和泉守

松平大隅守殿

1814 全工

家來壹人

御目見被 仰付_レ間、召連可被罷出_レ、

朱力キ 享保十年 九月廿日

1815 繼豐公御譜中

先_レ是繼豐賜_二歸國之告_一、_三同年十月十一日發_二東武_一、家
老島津内膳久兵、若年寄平岡八郎太夫之品、用人頼廷長

1816

左衛門久周等扈從、同十二日於_二神名川驛_一減_二從_一、駕人
 數_一、經_二過相州鎌倉_一、歷_二見古跡_一、其夜止_二宿藤澤驛_一、既
 而經_二東海及伊勢路_一、十月二十七日到_二伏見_一、留滯_二二日_一、
 十一月朔日到_二大坂_一、留滯_二三日_一、同五日駕_レ船、翌六日
 開_二帆於難波津_一、十二月五日到_二長州三田尻_一、由_レ此取_レ
 陸_二同九日航_一豐州大里、經_二九州_一、同二十六日到_二着魔城_一、
 即日遣_二謝使町田宇右衛門久芳於東武_一、翌年二月到_二江
 府_一、登_レ營_二捧_一獻物、白書院而拜_二謁_一

吉宗公、奉_レ謝_二歸_一州之辱、奏者番牧野駿河守忠壽奏_二
 達_一、久芳亦獻_二上御太刀一腰、馬代銀一枚、時服三領_一、
 又同日奉_レ拜_二謁_一

尊顏_一、時以_二紗綾三卷_一、賜_二於久芳_一、其後久芳發_二東武_一、
 翌年四月十一日歸_二國復_一、責命_一、

吉貴公御譜中

正文在文庫

御ふみのやう何もよろしく、御つゐてこ申あけりへ

くひ、なをくめてたくかしく、

十月十八日付にて御ふみ下されり、

公方様 大納言様益御機嫌よくならせられり御事、御め

1817

て度覺しめしりよし、しれは、^(か脱カ)此度 上使にて御同姓大す
 ミの守殿御國元へ御暇仰出されり、白銀・御卷物拜領被
 成、其上 御前へめさせられ、御懇の御詫ことに御馬は
 いりやうなされり御事、御手まへさまも數く難有覺
 しめしり由御禮仰上られ、めてたくかしく、
 享保十年

三室

豐岡

高瀬

外山

尾上

まつ

かつさの介様

御返事

〔朱〕
「雜抄」

高持成願御格式之事

一御役人・小役人明細帳に載り程之者、高直之願申出、

又者高直之願申出答り得共、支有之り故、所務迄を請

取り通、銘々支配頭に申出り上、高奉行に申出り節、

今迄奉行方當分支配頭に右之首尾申出り儀、別條無之

哉之旨相尋り上、書付ヲ以又々明細帳之首尾有之事り

得共、以後右之通首尾仕りこ不及り條、銘々高奉行

に高直之儀申出外節、御法之通調申出、高直相濟外節、
明細帳仕付外、首尾當人支配頭に可申出外、且又支有
之外高之儀者、其趣承届、是又書付ヲ以銘々支配頭に
可申出外、其書附ヲ以明細帳仕付可申渡外旨、享保十
已十月被相定外事、

繼豐公御譜中

正文有文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之候、益御安全御儀外間
可御心易外、随而小焔海鼠一箱被獻之外、各申談遂披露
外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年 十一月三日

松平大隅守殿

松平左近將監
乘邑判

全上、

御札令披見外、

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健之御儀外
間可御心易外、随而小焔海鼠一箱被獻之外、遂披露外處
一段之御仕合外、恐々謹言、

朱力キ
享保十年 十一月三日
安藤對馬守
信賢判

松平大隅守殿

繼豐公御譜中

正文有龍洞院

彌勒院

右者此節龍洞院御再興ニ有、寺格之儀并年頭進上物等之
儀、諏方別當安養院同格ニ被仰付、往々彌勒院兼帶被仰
付外、現住被仰付外節ハ色衣御免被成外、住僧人柄之儀
者、彌勒院門中より見合可申出外、且又御下屋敷御看經
所・御位牌所右寺内ニ御安置被成、爲寺領御高百拾七石
餘追有

御袖判を以御寄附被成筈外、左外有礙御圍之堂社不殘惣
別當被仰付外、右段々別紙書付ニ委細相達外條、其段ハ
寺社奉行より可被申達外、以上、

朱力キ
享保十年 十一月
(鳥津久武)
全

繼豐公御譜中

正文有文庫

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

る蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、各申談遂披露外處一段

之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十年 十二月十八日

水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1822

全上

御札令披見外、

公方様 大納言様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤外、隨

る蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之外、遂披露外之處一段之御

仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十年 十二月十八日

安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1823

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御安全御儀外間

可御心易外、隨而鯛一箱被獻之外、遂披露外處一段之御

仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十年 十二月十九日

安藤對馬守 信賢判

松平上總介殿

1824

全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌被相伺之外、益御勇健御儀外間

可御心安外、隨而鯛一箱被獻之外、各申談遂披露外處一

段之御仕合外、恐々謹言、

朱力年 享保十年 十二月十九日

水野和泉守 忠之判

松平上總介殿

1825

繼豐公御譜中

正文在文庫

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御勇健御

儀外間可御心安外、隨而琉球袖十端并鱈節一箱被獻之外、

各申談遂披露外處一段之御仕合候、恐々謹言、

朱カキ
享保十年 十二月十九日 水野和泉守 忠之判

松平大隅守殿

1826 全上

御札令披見外、就寒中

公方様 大納言様御機嫌以使者被相伺之外、益御安全御

儀外間可御心易候、隨而琉球紬十端并鏝節一箱被獻之外、

遂披露外處一段之御仕合外、恐々謹言、

朱カキ
享保十年 十二月十九日 安藤對馬守 信賢判

松平大隅守殿

1827 吉貴公御譜中

正文在文庫

なをく寒中御機嫌御窺被成、御満足さ御念入られ

外御事ニ思しめし外、御てまへさまも御無事の御

事ニ御座被成めてたく思しめし外、何もよく申せと

の御事ニ御さ外、めてたくかしく、

十一月十八日の御ふみ下され外、まつく

公方様

大納言様御機嫌よくならせられ、

一位様御機嫌よく成らせられ、寒氣御障もあらせられ外

はすりま、御心易おほしめし被成りへく外、寒中の御

機けん御伺と御座りて、御ふみのやう御目錄之通

一位様へ御あけなされ、披露致し参せりへハ御満足ニ思

しめし外、めてたくかしく、

朱カキ
享保十年

まつ平 御返事

上總之介さま

人々御中

いは倉

梅その

さくらゐ

1828 繼豊公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖一重到來歡覺候、委曲松平伊賀守可

述外也、

朱カキ
享保十年 十二月廿七日 吉尔公 御印

薩摩少將殿